# 魔法少女リリカルなのは―ドクロを持つ転生者―

暁 楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは―ドクロを持つ転生者―

【Ｎコード】
Ｎ８９７６Ｙ

【作者名】
暁　楓

【あらすじ】
テンプレな理由で神に殺された主人公が、テンプレな転生を受けて、テンプレにもリリカルなのはの世界で頑張ります。
でもテンプレじゃない気がする幼少期を過ごし、地味に原作を崩壊させて、物語は結局テンプレな気がする中学校から。
才能をいっぱい持って、願いを叶える力も持って、だがしかし、自分の世界は常に無音。

そんな主人公の、テンプレではない力を使ってテンプレな物語を生きていく物語。

一応チートオリ主。しかし他と比べたら大したことなくね？そんなキャラです。作者は転生ものは初書きです。未熟な駄作者ですが、よろしくお願いします。

# e1．プロローグ　1（前書き）

どうも、色々他の小説が危うくなりつつある暁　楓です。

もう、色々とやばい駄作者ですが、この作品も生暖かい目で見守ってくれたらなと思います。

あらすじ通り、中途半端と言える程度にチートな転生オリ主です。

そんな、“完璧ではない力”でどう頑張っていくのかを書いていけたらなと思ってます。

ちなみに、忙しい方は後書きを見てください。話をガッツリ纏めたわかりやすい説明を載せます。

ではどうぞ。

# e1．プロローグ　1

俺の名は、忌束キリヲ。

――――転生者だ。

転生。それも二次創作では珍しくない、神様によって記憶を継いだまま漫画・アニメの世界へ行くというもの。

俺はそれによって、“この世界”で、“才能”と“王の証明”を持たされ、生を受けた。

・・・まずは、今にいたるまでの、昔話をしよう・・・。

「すいやせんでしたぁーーーーッッ!!!」

“今”から、もう何年も前。
何もない真っ白な空間で、1人の中年男が俺に土下座をしてきたのが始まりだった。

「・・・・・・・・・誰?」

突然ここに来て、いきなり土下座された“俺”は、そう返す他なかった。

「は、はいっ!私はここ、天界で“神”をやらせていただいておりますっ!!」

「・・・・・・・・・は?」

説明が長いので割愛

「・・・えっと、つまり俺は、多忙だった貴方のうっかりミスで寿命の書類をシュレッダーにかけてしまった・・・と」

「もーーーし訳ありませんッッ!!!」

地面を砕かん勢いで頭を振り下ろして土下座を繰り返す神。

ちなみに、シュレッダーにかけてしまった書類は複数人分らしい。
まあ、俺1人だけということは普通に考えてありえないけど。
・・・シュレッダーが天界にもあるんだと思ったのは自分だけでないはず。

あと、現世での死因は心臓麻痺。デスノートか。

「・・・・・・で、俺はどうなんの・・・？」

「は、はい！こうなったのは私の責任ですので、私が責任持って別の世界へ転生ということにさせていただきましたっ！！」

・・・どうでもいいけど、どれだけ低姿勢なんだよ・・・。

転生、ね・・・。

「場所、というか世界は？」

「はい！あ、あの、貴方が原作を知っている世界がよろしいでしょうか！？」

「・・・まあ」

「それでしたら、リリカルなのはの世界でよろしいでしょうか・・・？」

「・・・いいんじゃない？そこで」

というか、それ以外の作品でまともに知っている作品がほとんどないのが現状だ・・・。

あ、そう言えば。

「他の人達はどうするんだ?転生するとしたら、特に場所が被った場合とか」

「それについては・・・同じ世界に転生、ということに・・・・・・すいません。さすがに個人別に、ＩＦの世界を作ることは無理でして・・・」

まあ、無理もないだろうな。

「お詫びと言っては何ですが、物語に適応できる力や道具と、ご希望する能力、そして願いを3つまで叶えようかと！」

「あ、それ別にいいです」

「な、なぜですか！？」

「いや、原作に関わろうとして痛い目に遭うのは嫌なので。それに、リリカルなのはなら他の転生者も来るでしょ?ならその人に任せちゃえばいいかなと」

「い、いや・・・そうなったら、私の、その・・・立場が・・・」

聞く話によると、何にも施しをせずに転生したら上司の神達に厳罰を食らうらしい。

なこと言われてもなぁ・・・。

「・・・なら、その3つの願いについては、何か願いを叶える道具にして現世に送って。あと力は・・・・・・うん、神のあんたがランダムに選んで、それを付けちゃって」

「そ、そんな!?それでは施しがないのと・・・」

「転生した後で願いを思いついたらそれを叶えるって形に変えるだけだし、力も最初から知ってたらつまらないから。そう言っておけば反論もないんじゃない？」

「は、はあ・・・」

とりあえずは納得してくれただろうか。

「で、では、そういうことで転生させます・・・生活に問題ない環境と、リリカルなのはの世界での必要レベルの魔力、そしてデバイスはデフォルトということにさせていただきます。あ、あと、願いを叶える道具は、手に入れた時に使い方もわかるようにしておきますので。あ、最後に、転生後の自分の名前を新たに設定してください」

「あー・・・はい」

どこからか紙・・・新しい俺の書類が手渡された。名前の欄に新しい名前を記入しろってか。

んー・・・じゃ、これでいいや。俺が原作を知っている数少ない作品のキャラだ。

書き終わり、書類を神に返す。

「で、では・・・転生、いきます！」

「ん？・・・えっ、あ、ちょっ、テンプレェェエエエエエッッ！！！」

落ちた。

これが、転生までの出来事だ。

## e1．プロローグ　1（後書き）

今回を纏めると！！

神
「転生してー」
←
オリ主
「オッケ」
←
神
「じゃあ落ちてー」
←
オリ主
「これじゃあテンプレだよ」
←
転生しました。

こんなんです。わかりやすいでしょ？

もう数話分はプロローグとして使います。ご了承ください。

## e2．プロローグ　2（前書き）

プロローグ2です。

まだプロローグは続きますよ？

今回は才能発芽編といった感じですかね。

また忙しい方は後書きで簡単な内容を。

ではどうぞ。

# e2．プロローグ　2

そして、転生させられた。

転生させられてから数年間は、ある意味地獄とも言えた。赤ん坊からの転生だから、もはや黒歴史。もう思い出したくない。

転生した俺の名前は忌束キリヲ。

少年ジャンプで連載していた漫画『エニグマ』のキャラだ。運がいいのか、俺の髪の色はキリヲと同じ黒だった。

神によって何かの能力を付けられたが、知らなければ使うこともないだろう。そして下手に使わなければ騒ぎにならないんだし、原作に関わるかどうかぐらついている俺にとっては、何もしないで現状維持が最善だ。

当時そう思っていた俺に、黒歴史なんていうのではない、現実の地獄が来るのは、俺が7歳になってから。

そしてその日が、俺の“力”が発現する日であり、その他、特別な日でもあった。

俺の親は、忌束ノゾミというおふくろだけだった。おふくろは艶や

かで長い黒髪を生やし、スタイルもいい、文句なしの美人だ。人もよく、理想的な女性と言える。

だが、そんなおふくろとは正反対に、親父は最悪だった。いや、あんなのはもはや親父とは認めない。

俺の血筋上の親父は、暴力団の男、それも幹部だった。
詳しくはわからないが、そいつにおふくろが強姦されてその結果、俺がデキてしまったらしい。つまり、俺は望むべくして産まれたのではないのだ。

俺が産まれてからも、そいつは何度も家に押し入り、おふくろに襲いかかった。だが、乱暴をされた訳ではない。脅迫されたが、金目的ではない。金を取り上げてくることもあったが、それでもあいつの目当てのものは別にあった。
おふくろも、金は出しても奴の本当に要求するものだけは頑なに渡そうとしなかった。叩かれても、殴られても、ナイフで脅されても、おふくろは“それ”を差し出そうとしなかった。

俺は当時“それ”が何なのか知らなかったが、それを知ったのは、俺が6歳であったある日のことだった。

当時は休日で、おふくろは買い物に出かけていて俺は留守番をしていた。

夕方になり、不意に玄関の扉がガチャガチャと激しく音を立てた。
何度も争いを見た俺にはすぐにわかった。またあいつが来たのだ。
隠れようとしたのだが、扉が無理やり開けられ、ズカズカとそいつとその部下2人が入り込んできた。

「チッ、女はいないか・・・・・・おい、ガキっ」

俺のことは気にせず、一通り探しまわったそいつは、俺にいきなりナイフを突きつけてきた。

「お前はあいつと住んでんだからわかるだろ?『木箱』はどこだ。言えっ」

「・・・知らない」

俺は首を横に振って答えた。

本当に知らない。木箱ってなんだ?こいつが探し求め、おふくろが必死に守り続けている木箱には何がある?

「・・・知らないだぁ?そんな嘘、通ると思ってるのか?・・・さっさと言えっ!木箱はどこにある!!」

「知らない」

「てめぇっ・・・ぶっ殺されたいか!!」

「知らない!!」

負けじと声を張り上げ、睨みつけた時だった。

そいつがブチ切れた。

「このクソガキッ・・・!おい、押さえろっ!」

「！？」

２人の部下が俺を床に押し付け、身動きを取れなくする。

それでももがこうとする俺を余所に奴はまずナイフで俺の上半身の服を切った。

そして――――

「――――――――あぁああ〝あぁ〝あ〝あぁぁ〝あああぁあっっ！！！！」

背中に、焼き付くような激痛が走った。

最初は首辺りだったその激痛は、ザクザクという音と共に腰の方へ

と広がっていく。

一通り背中を抉った奴は次に俺の体中を切り裂き、さらには手や足、さらには胴体にもナイフを突き刺した。

その間部屋中に響く、俺のこの世のものとは思えない断末魔。

ゲス野郎はそんな俺を見て笑っていた。

「――――キリヲっ!!」

その時だった。おふくろが帰ってきたのは。

おふくろは俺の断末魔を聞き、血まみれの俺を見て、すぐさま奴の部下達をどかし、俺を助けようと動いた。しかし、そんなおふくろの前にゲスが立ちふさがった。

「待ってたぜっ。さあ、アレをよこしな!」

「どきなさい!あなたに構っている暇なんかないわ!!」

おふくろがどかそうとするが、男と女。ゲス野郎はビクともしない。

「さっさとアレをよこせと言ってんだよっ!黙って俺の言うことに従えっ!!」

「黙りなさい!あなたなんか・・・キリヲにこんなことをするあなたなんか、ここから出て行ってっ!!」

――ドクンッ

「このクソ女(アマ)っ！！」

ゲスがおふくろに殴ろうとした、次の瞬間だった。

――グイッ

「うおっ！？」

見えたのは、目の前にいるおふくろではなく、その真逆である、後ろへと腕を動かすゲスの姿。

「な、なんだ！？腕が勝手にっ・・・！」

そんなことを言いながら、後ろに動く腕を空いている手で抑えるゲス。

そして、見た。

「・・・な、なんだこのカウンター！？」

ギュルギュルギュルギュル・・・

勝手に動くゲスの腕に張り付いた、奇妙な黒いカウンター。

日・時・分・秒が記されたカウンターが回転し、その上には巻き戻しを示す左向きの三角形が2つ。

何が起きたのか、わからなかった。

そして同時に、

全てを理解した。

「キリヲっ！」

ゲスが同様している間におふくろがゲスの部下を押しのけ、俺を引っ張り出した。

「この野郎っ！！」

しかし部下の野郎もただでは返そうとせず、持ち込んでいた金属バットで横薙ぎに殴りかかった。

その時に、俺はありったけの力で叫んだ。

「――戻れっ！！」

そうしたら、そいつの金属バットを振るう動きが“戻った”。

さらに俺は、近くにあったコップをそいつの顔面に投げつけた。

「ギャッ・・・！」

怯み、後ろによろめくゲスの部下。

それでも、腕の動きは“戻り”続ける。

結構な速さで振った分、同じ速度で“戻る”バット。そいつの後ろにいるゲス。

結果。

ドゴッ！

「ぐふぅっ！！」

バットがゲスの腹に直撃した。

「兄貴！！」

「な、なんだよコイツ！気味が悪ぃっ！」

「くそっ、覚えてやがれっ！」

この現象に恐怖したのか、ゲス共は早々に出て行った。

が、それが運命の別れ道、いや、そいつらの運命だったようだ。

――――キィィイイイイッッ、ゴシャァアアッ！！

ゲス共は、道路まで飛び出したところでトラックに跳ねられ即死。

俺は、奴らが即死する音が聞こえた直後に、意識を閉じた。

俺の怪我は相当酷く、退院するまで数ヶ月要した。その上、多くが古傷として残り、動きにも制限が付くほどだった。

俺の自由は、あのゲス野郎からの理不尽によって奪われた。

そして退院して家に帰って、おふくろが俺に見せたいものがあると

言ってきた。

それは、例の木箱だった。

何の変哲もない、粗末な木箱。大きさにして、人の頭ぐらいなら入りそうだ。

そしておふくろは木箱を開け、その中身を取り出した。

中身は、ドクロだった。

下顎の骨が前後で入れ替わり、額辺りから上の部分がない不気味なドクロ。

「・・・・・・それは？」

俺は尋ねた。

しかし、俺はこれの正体を知っていた。

俺の名前の由来でもある、二次元の作品で最も重要となる物体。所有者の願いを叶える代わりに、周囲の運命を歪める呪いのドクロ・・

・。

「呪いのドクロで、持ち主をエニグマって言う王様にする物なの」

エニグマの証明――――。

だが、持った者をエニグマにさせるこのドクロを、おふくろが普通に触れている。つまりこれは・・・

「母さんが・・・王様？」

「ええ・・・今はね」

そう言って、おふくろは今まで手の清潔さが売りの仕事だからと言って常に右手にはめていた黒い革手袋を外した。

「このアザを持った人がエニグマになって、ドクロに願いを3つまで叶えてもらうことができるの・・・」

おふくろの右手には、アザが刻まれていた。

人差し指と中指には丸、親指には四角で格子状に刻まれた黒いアザ。

手の平と甲に刻まれれば完全なエニグマとなった証である。

「危険な物だから、最後の願いで誰の手にも届かないところに置いていくつもりだったけど、この間使っちゃってね」

この間とは、俺の才能（ちから）が初めて発現した時のことだ。

――――キリヲにこんなことをするあなたなんか、ここから出て行っ

てっ！！

おふくろのその叫びを、ドクロは願いと読み取ってしまったらしい。
結果、今のおふくろは王ではあるが意味のない状態らしい。

「あなたの・・・キリヲのその力も、このドクロに願ったから・・・
本当に、ごめんなさいっ・・・」

俺のこの力・・・これは作中の崇藤タケマルが使う『古傷による逆再生』の才能だ。ちょうど、タケマルも俺と変わりない境遇だった。
理不尽・・・・・タケマルはその理不尽が嫌いだった・・・理不尽を受けた。

そして、これからの未来で、理不尽を受ける人がいるのを、俺は知っている・・・！

「母さん・・・僕は、理不尽は嫌いだよ。痛くて、つらくて怖くて悲しくて・・・もう、そんな理不尽は嫌だ」

言いながら、俺は目の前に映るドクロに手を伸ばす。

「もう理不尽は嫌だ・・・理不尽はもう、僕・・・いや、俺で終わりにしたいっ・・・！」

「キリヲ・・・！？」

額の縁を掴み、握り潰すような気持ちで強く力を入れる。
おふくろは驚いているが、理不尽に対する憎悪が、それを認知させ

なかった。

「だから俺はっ・・・コイツで！理不尽をぶっ壊すっ！！」

――――バチッ

電撃を受けたような感覚がした。

おふくろの右手のアザが薄くなる。

同時に、ドクロを掴む俺の右手に、アザが刻まれていく。

「俺が・・・エニグマだっ！！」

こうして俺は、呪いのドクロの王となった。

## e2．プロローグ　2（後書き）

今回を纏めると！！

転生しました。

←

親父の虐待で逆再生の才能取得。

←

さらにエニグマになりました。

ね、わかりやすいでしょ？

次回はついに無印編です。サクッと片付けます。

## e3．プロローグ　3（前書き）

プロローグ3つめ。

ついに介入活動に入ります。

つっても、あっさり流しちゃうけどさ。

## e3．プロローグ　3

そうして、俺はエニグマになった。

だが、現在・・・舞台である１３歳に至るまでの昔話はもう少し続けよう・・・。

当然と言うべきか、エニグマになった直後、おふくろには驚かれた。元々は俺の才能の説明だけで終わらせるつもりだったらしい。だが今となってはどうでもいい。

それから、おふくろは俺にエニグマ使用におけるルールを説明してくれた。と言っても、俺が知る通りのものだった。

意識を集中し、自分の願いをドクロに言う。それだけだ。

願った後、その願いは周囲の運命が歪んだ姿で現実となる。これも知っている。

願いは３つまで。これもわかりきったことだし、おふくろが見せた時にも言っていた。

だが、次のルールだけは原作にない、特殊なものだった。

願った後、代償になるものを述べればそれの運命が代償として歪められる。

つまり、代償の提示である。
代償にする人や物体を言えば、ドクロはそれを代償として歪める運命の対象とするらしい。言わなければ、無差別に何かの運命を歪めるそうだ。
だが、物体と言っても小物程度ではドクロは代償として受け入れない。建物や乗り物・・・つまりは人の運命が歪められるような代償でなければならないのだ。
なお、歪み方は人によって変化する。単純に不幸にするというものもあれば、大犯罪者の運命を歪めれば大量殺人などの大事件を引き起こす場合もあるらしい。
当然ながら、代償を自分に設定することも、可能と言えば可能だ。

おそらく、あの神がそう設定したのだろう。エニグマの力を用いた結果、俺が不幸にならないようにするために。まず、エニグマの証明を贈ること自体どうかと思ったのだが、願いを叶える道具などあまりなかったのだろう。

・・・以上が、エニグマのルールだ。

・・・エニグマとなってから、もう6年過ぎた。俺は中学生だ。

現時点で、俺の願いの残りストックは2つ。すでに俺は、願いを1つ使っている。その願いの話をしよう・・・。

エニグマとなってから3年後。

その間、俺は才能の制御ができるようにおふくろには内緒で練習をしていたが、とんでもない事態になった。

才能が、1つだけに留まらなかったのだ。

崇藤タケマルの『逆再生』の他にも、

灰葉スミオの通信（テレパス）、『チャンネル［ｅｓ］』。

来宮しげるの『予知』。

支倉モトの『消える呪い』。

九条院ひいなの『第3の手』。

祀木ジロウの『三次減算』。

栗須リョウの『ＦＬＡＴ（フラット）』。

綺島ユウタの『コピー』。

これらが確認できたのだ。

きっかけはある日、逆再生の練習の時に疲れてベンチに腰掛けた時だった。

腰掛けたベンチから立ち上がった時、俺の手の平に数字が刻まれ、ベンチが小さくなった。三次減算が発動したのだ。

それから実験してみたが、全て成功。水沢アルの『人形化（ピットくん）』だけがまだ未検証だが、おそらく使える。

また、予知については本来のしげるの予知ではなく、予知と通信（テレパス）による産物『夢日記』となっていた。

おそらく人形化も、元々の設定（肉体から精神が離脱し、精神のない人形に入り込む）になっているはず。

・・・正直な話、神もやり過ぎだと思う。同時発動もできるのだから、能力を複合させれば兵器レベルにもなりかねない。いまさらだが。

・・・それはともかく、転生の時に手に入れた俺のデバイスは完全な補助型だ。

名前は『ガーディアン』。鎧・・・すなわちバリアジャケットそのものがデバイスである。結界やバインド、補助魔法に長けていて、純粋な防御力ではかなり堅いらしい。

別に戦闘が好きな訳ではないので助かる。

ちなみに魔力はＡＡ。

魔導師としては十分有能だが、原作キャラよりは低い程度。

それと、俺の普段の格好としては傷を隠すためにフード付きコートを常に着ている。両手ともに傷を隠すために包帯をしているが、アザのある右手にはさらに革手袋をはめている。

さて、一通りの説明をしたところで、介入の話をすることとする。

まず、俺の住まいについてだが、元々は海鳴市ではなかったのだが、意外なご都合主義にも、ゲス親父が死んでから遠い親戚のいる町ということで、海鳴市に引っ越した。

で、その親戚とは・・・・・高町家だ。

世界は広いようで狭いものである。

引っ越してすぐになのはとは対面こそしたものの、それきり会ってない。まず会わないようにしている。

リリカルなのはの世界に来て最初こそ浮かれていたのだが、度重なる理不尽とエニグマ化によって、もはやそんな感情などなかった。

引っ越してから学校にも通っていない。通信教育だ。体中の傷や内面事情のことを考えれば当然である。おふくろはできれば通わせようとしているみたいだが。

そして9歳になり、物語が始まる。

まず無印。戦闘への介入は無理だろうし、時の庭園も行く手段がな

い。ドクロに願えば行けなくもないが、非効率にも程がある。危険も大きい。ジュエルシードを探そうにも明らかな場所は危ないし、明らかでない場所もどこを探せばいいのかわからない。ガーディアンの探索魔法を使えばおそらく感づかれ、戦闘になる。

そして何より、俺の予想通り、他の転生者がいた。

名前は知らない、というか興味ない。そいつは銀髪でやりすぎな程にイケメン。しかもガーディアン曰わく魔力がリミッター付きでＡＡ＋。しかも遊戯王で存在するモンスター『ＴＧ　ワンダー・マジシャン』に似せた融合騎までいる。その上仮面ライダーディケイドのベルト所持。神は介入に必要な分だけはオートと言っていたのだから、容姿、魔力、融合騎の３つを願いで、ベルトを漫画・アニメ能力として手に入れたのだろう。

だが、俺の計画は変わらない。そして気合いで、ついにジュエルシード１つを探し当てることに成功した。

そしてジュエルシードをコピーし、コピーしたジュエルシード（略してコピーシード）だけを持ち帰った。もちろん、コピーの本領である『コピー物の操作』によってジュエルシードとしての反応は感知されないようにした。

その上でコピーシードの性能を『純粋に願望を叶える力』に操作。

なお、コピーは１つの物質につき１つしかコピーできない。だが、１つあれば終盤でプレシア・テスタロッサの元に行き、そこでまたジュエルシードをコピーできる。

・・・フェイトは無印の間理不尽を受け続けたが、それによってと

も言える友達や家族に出会えた幸福者だ。しかし、プレシアはどうだろうか。

組織の上の者の無茶な命令のせいで起きた事故でアリシアを亡くし、もう一度アリシアと共に過ごすため必死に研究を重ねた。しかし結果はよろしくなく、逆にプレシアが病に侵され、果ては虚数空間に落ちた。これが、理不尽と言えないのだろうか。

だからこの才能(コピー)をもって理不尽から引きずり出す・・・理不尽をぶち壊すっ！

しばらくなのはの動向を探り、そして明朝の決戦。原作通りになのはがスターライトブレイカーで決着してから、俺も動いた。

まず、あの転生者を含めた全員がアースラに転送されてから、コピーシードを使用、時の庭園へと向かう。

場所は直接プレシアの目の前。いきなり来た俺に対して、プレシアは驚き以前に迎撃に出ようとした。

「待て、プレシア・テスタロッサ。俺はあんたの願望を叶えに来た」

「・・・なんですって？」

「まずは俺が隠れる場所が欲しい。どこかないか？」

「・・・・・・・・・こっちよ」

プレシアはしばらく悩んだ後、隠し通路を開いた。そこに隠れろということらしい。

だが、この隠し通路がバレることはわかっている。俺は隠し通路に入った後、できるだけ気付かれにくい奥の隅に隠れ、さらに透明化して隠れた。

そして、局員が来た。

アリシアの入った生態ポッドにまで近づく局員を蹴散らすプレシア。転送される局員。そして通信でフェイトに打ち明けた真実、フェイトに対する嫌悪。

そして次元震。ここまでは概ね原作通りだ。ジュエルシードが3つしかないとプレシアが言っていたが、あの転生者、フェイトのジュエルシード回収を徹底的に妨害していたらしい。3つはおそらく、海で回収したものだ。

そして通信を切ったプレシアが、こっちを見た。正確には、おおよその検討をつけた方向なのだが。

「・・・・・早く出てきなさい」

そう言われて、俺は透明化を解除した。

「・・・認識阻害魔法？その割りには魔力を感じなかったわね」

「魔法とは別だからな」

「そう・・・そんなことはどうでもいいわ。話は聞いていたわね？願いを叶えると言うなら、私とアリシアをアルハザードに・・・」

「それより手っ取り早く、ここで蘇らせてやる。そもそもアルハザードは、願いを叶えるための途中経過だろう？」

「・・・！？」

「だがこの次元震だと崩れたら面倒だな。管理局もまた来る。移動するぞ、模写世界（コピーワールド）に・・・！」

バンッと壁を叩き、そして言う。

「コピーッ！！」

少ししてから、壁の一部が隠し扉になって動いた。

「っ！？そこに隠し扉はないはず・・・！？」

「コピーした時の庭園と繋ぐために造ったんだからな。行くぞ。ジュエルシードとアリシアを運べ」

そう言って俺は造った通路を歩き出した。

プレシアも3つのジュエルシードを持って続く。アリシアは傀儡兵に運ばれていく。

「このコピーした時の庭園は、俺達以外には不可視と不可侵が働いている。あと強度も高めているからさっきの次元震で崩れることもない」

「あなた・・・一体何者なの？」

プレシアの問いに、俺は立ち止まった。
顔だけプレシアに向けて、答える。

「俺は、エニグマだ」

「エニグマ・・・」

「コピーの庭園に入ったことだし、ここでいいだろう。ジュエルシードを貸せ」

プレシアからジュエルシードを受け取る。

番号は・・・うん、さっき使ったコピーシードと被っていない。

コピーは1つの物体につき一度きり。同じものをいくつも造ることはできない。そしてコピーシードは願いを確実に叶える代わりに使い捨てで、庭園に来た瞬間に砕けた。

コピーシードで使える願いは3つ・・・・・・十分だ。

「コピー」

片手に乗せてあるジュエルシードをもう片方の手で被せる。そしてジュエルシードから純粋に願いを叶えるコピーシードを造り出す。

「ジュエルシードが増えた!?」

「さて・・・1つはあんたに使ってやる・・・・・・“治せ”」

造り出したコピーシード1つに願った。コピーシードが輝きを放った。

光が収まると、先程驚いていたプレシアがさらに驚いた。

「身体の重さが・・・消えた!?」

「あんたの病を治しておいた。アリシアが生き返ってもお前が死んでは意味がないからな・・・・・・さて、次に“蘇れ”」

2つめのコピーシードに願う。

先程と同じ光が止んでから少し経って、裸はまずいから俺がいつも着ているフード付きコートを纏っていた少女の瞼が動いた。

「ん、ぅ・・・・・あれ、お母さん?」

「アリ・・・シア・・・・・・アリシアッ!!」

長年待ち望んでいたアリシアの蘇生を目の当たりにしたプレシアが、あっという間に涙を流してアリシアを抱き締めた。

「アリシア・・・アリシア、アリシアぁぁっ・・・・!!」

「お、お母さん・・・苦しい・・・・・・」

「・・・フン」

これで、俺のやりたいことは終わった。あとは言うべきことを言って去るだけだ。

「最後のコピーシードは俺の帰還用に使わせてもらう・・・・・・
あと、この庭園にあるものは全てコピー。俺が解除したら全部消える。どこか別の世界に転移したら、早いとこ衣食住を揃えるんだな」

「ええ・・・ありがとう。礼を言うわ」

「・・・お兄さん、誰？」

最後にアリシアに尋ねられた。

そうだな・・・会うことはもうないんだし、別にいいか。

「・・・忌束キリヲ。それが俺の名だ・・・・・・“帰せ”」

名前だけを告げて、俺は地球へと戻った。

これが、無印での俺だ。

## e3．プロローグ　3（後書き）

今回を纏めると！！

才能を9種持ちました。

←

無印開始です。

←

色々無視して決戦の日へ。

←

あっさり庭園に侵入。ジュエルシードのコピーでプレシアの治療とアリシア復活。

←

後はすたこら撤退。

こんなん。

プレシア？どっかでアリシアと笑顔で暮らしてるんじゃない？

次回でプロローグ編最後。キリヲはA，s編をどうする？

## ｅ４．プロローグ　４（前書き）

プロローグ編ラスト、Ａ，ｓ編です。

またあっさり纏めます。

# ｅ４．プロローグ　４

それから半年後。物語はＡ，ｓ編に差し掛かる。

俺の魔力は前回言った通りＡＡ。蒐集対象としては十分に狙われる。そのためガーディアンにリミッターを掛けてもらい、極限まで魔力を隠した。

才能は魔法とは別物のため、普通に使用が可能だ。俺は自分の才能でできる方法はないか、時期を待ちながら考えた。

闇の書・・・後の夜天の魔導書と、祝福の風リインフォースを消滅から救う方法だ。

色々と考えてはみた。まず真っ先に思いついたのがＦＬＡＴでシステムを切り離した後の夜天の書に潜入、改悪プログラムを元に戻すというもの。平面世界に入り、平面世界のものをある程度なら変化させられるこの才能。改悪プログラムの原形は元の夜天の書なのだから、改善も不可能ではないと考えた。

しかし、問題が発生。ＦＬＡＴは“変えられる”のであって“元に戻せる”訳ではない。つまり、元に戻そうとするのであれば、その“元の形”を知らなければならない。俺には、夜天の書の元の姿を知る由もなかった。

次に思いついたのが、コピーによってバグのないプログラムを造ること。しかし、それも結局はＦＬＡＴと同じだし、造れても組み込むことができないのであれば変わりないのが現状だ。

逆再生もだめだった。この才能は等速逆再生しかできない。組まれたものの解体では組まれた直後からの逆再生になるが、この場合、一体どういう逆再生になるかわからない。そもそも、バグプログラムの状態を逆再生させたら、せっかくなのは達が破壊した防衛プログラムが復活する恐れもある。

変わった視点で、コピーして改善したプログラムの形状通りにＦＬＡＴで変化させるという案も持ったが、形状と中身は別物だ。外見が変化しても、中身のプログラムに変化がないのでは話にならない。ＦＬＡＴで変化させる場合、プログラムについては１つ１つ自力で入力しなければならないのだ・・・。

悩んでいる内に時間は過ぎてしまい、１２月２４日。

闇の書が目覚め、そして闇が終わる日である。

海岸で沖での戦いは僅かにだが見えた。最後に３人と転生者のブレイカーが決まり、防衛プログラムが転送されていった。

それから、俺はある公園に向かった。

管制人格・・・いや、リインフォースが消滅する場所だ。

時間的に早すぎる気もしなくはなかったが、逆に遅くてなのは達と遭遇してしまってはいけない。リインフォースと2人っきりの間に行う必要がある。
だから早く行って、先に公園に来るリインフォースと偶然会ったという形に持って行こうとしているのだ。

余談だが、俺の服装は古傷に触れないようにするため少し大きめの長袖にズボン、そしてフード付きコート。そしてリュック。

コートも若干大きめで、フードの影響であまり前が見えない。
その上に考え事をしているので、当然と言うべきか、人とぶつかってしまった。

「っ、と・・・」

「あっ、す、すまない。私の不注意で・・・」

「いや、俺も前を見て・・・?」

フードを取って謝ろうとして、固まった。

ぶつかった相手が、リインフォースその人だった。・・・どうやら、彼女も公園に向かっている途中だったらしい。それに、いつの間にか公園を通り過ぎてしまっていたようだ。

「・・・・・・」

「あ、あの・・・大丈夫か?」

「・・・・・お前、そんな格好で何をしている？」

原作通りではあるが、リインフォースの今の格好はノースリーブで丈の短い黒い肌着のみ。明らかに不自然だ。なぜに騎士甲冑を纏わないのだろうか。

「それは、その・・・」

俺の指摘を受けて、リインフォースが目を泳がせる。魔法のことを言わずに言い訳をしようと必死だ。

だがその言い訳を聞くほど時間に余裕などないから、話を進めることにした。

俺は首にぶら下げた十字架の簡素なネックレス・・・待機状態のガーディアンを摘んで持ち上げた。

『こんにちは』

「っ！？・・・デバイス・・・！？」

「フリーの魔導師だ。デバイスを知ってるってことは、あんたも魔導師かなんかの類なんだろ」

俺のことは適当にでっち上げておく。本当のことを話しても長くなるだけだ。

「これなら話せるだろ。何をしてるのか、聞かせてもらうぞ」

「はぁ・・・」

とりあえずは悪意のある人ではないと思ったのか。俺の話を受け入れて、俺とリインフォースは公園へと向かった。

公園のベンチに座って、俺はリインフォースの話を聞いた。

リインフォースから聞いた話は、まあ原作とほとんど同じ内容だった。違いもあの転生者の名前が時々出てくる程度で、あとは違いがなかった。

「・・・それで、お前はここで自身を破壊するという訳か」

「あぁ・・・我が主やあの雛達は強い。私がいなくなっても、きっと未来で羽ばたいて行ける・・・」

「・・・・・・・・・」

確かに、あいつらの未来は明るい。それは確かだ。

だが・・・俺は、あの灰葉の言った台詞のように、誰も犠牲にならない未来が欲しい。そのために、俺はこの力(エニグマ)を手に入れた。

元々、理不尽を正すために手にしたドクロだ・・・。俺の才能(ちから)で正されない理不尽をぶち壊してもらうのが、俺の理想とするエニグマの使い方。

なら、迷う必要なんかない・・・・・・。

「リインフォース・・・だったか」

「・・・なんだ？」

「お前の理不尽・・・呪いに踊らされ、最後には死ぬというお前自身の理不尽から解放されたとしたら・・・お前は何を望む？」

「無理だ・・・私の身体は、もう・・・」

「望みを言えと言っているんだ。無理云々ではなく、お前の願いを言え」

「・・・・・・」

リインフォースはしばらく黙ったが、やがて、小さな声で呟き始めた。

「・・・主のそばで・・・主の成長を見届けたいな。・・・我が儘を言えば、主と共にずっと生きていたい・・・・・・」

「・・・なるほどな」

「だが・・・だめなんだ・・・・・・もう、私の身体は壊れきっている。それに、私が生きていたら、主に危険が・・・」

「・・・お前の望み、叶えてやろう・・・」

「え・・・？」

涙声で自分の望みを否定するリインフォースの前に、ベンチから立ち上がった俺が立った。

「お前が死ぬ必要がなく、かつ誰も不幸になることのない未来。その願いを叶えよう」

「無理だ・・・そんなことは・・・」

「やってみせる。ドクロの王、エニグマの名にかけてな」

そう言って、俺はリュックのチャックを開け、中から、エニグマの証明であるドクロを取り出した。

ドクロを見た瞬間、リインフォースが驚いた。

「それは・・・！？」

だが俺はそれを気にせずに、俺の手に収まっているドクロのみを見る。

「ドクロよ・・・お前の待ち望んだ1つめの願いだ。よく聞け・・・！」

意識を集中させる。

集中すればするほど、俺の中にいる怪物が、俺の器から溢れそうな感覚が湧いてくる。

それを抑え、そして、叫んだ。

「――リインフォースを、呪いから解放しろっ！！改ざんされたプログラムを、元の“夜天の魔導書”の姿に戻せっ！！」

――――――そして。

「代償は――――

――俺自身だっっ！！！」

―ｓｉｄｅ・リインフォース―

・・・あの光景は、３年以上経った今でも、一瞬たりとも忘れたことはない。

突如私の前に現れた黒髪の魔導師は、奇妙なドクロを手にして、そのドクロに向かって、私の願いと、代償というものを大声で言い放った。

その直後だ。

バチッ!!

「うっ!?」

電流が走ったような感覚がした。

衝撃は一瞬だったが激しく、ベンチに座った態勢でもよろめいてしまう程だった。

だが・・・、

「あぁぁあ〝あ〝ぁぁ〝ああ〝ぁあああ〝ぁ〝あ〝あ〝ぁっっ!!!」

魔導師の少年は、人のものとは思えない断末魔を発していた。

ドクロを取り落とし頭をかきむしる少年は耳と口から血を流していた。

「グッ、ゴボッ!う〝おえぇっ!!」

「どうしたんだ!?しっかりしろ!!」

吐血する少年にどうしてよいかわからず、とにかく私は少年に声をかけ続ける。

――――王ノ願イハ聞キ入レタ。

その時に、ゾッとするような、不気味な声が聞こえた。

――夜天ノ管制人格、リインフォースヲ呪イカラ解放シヨウ。

それは、生気のない骨クズ・・・、

――ソシテ、オ前ハソノ代償ヲ支払ッテ貰ウ・・・！

ドクロからの声だった。

「お前っ・・・彼に何をするつもりだ!?」

雪のついたドクロを手に取って、そのドクロに問うた。

――我ハ王ノ望ミヲ叶エルノミ・・・。

――オ前ヲ呪イカラ自由ノ身トシ・・・。

――代償トナル、我ガ王ノ自由ヲ奪ウ・・・！

「なっ・・・！」

私が驚愕する間にも、ドクロが生のない声を響かせる。

――王ハ幼キ頃ニ理不尽ヲ受ケ、身体ノ自由ガ阻害サレタ・・・。

――ナラバ今度ハ我ガ、モウ１ツ残サレタ自由・・・“音”ヲ彼カラ奪オウ。

――何モ聞コエナイ・・・何モ語レナイ・・・無音ノ世界ヘ、彼ヲ導ク・・・！

「や、やめろ・・・そんなことをするなっ！その願いを取り消してくれ！私のことはいい！！」

私が望んだせいで、目の前の者が代償にされようとしているのが嫌で叫んだ。

だが、ドクロは私の願いを聞き入れない。

――――汝ノ願イハ聞ケヌ・・・我ハ王ノ望ミシカ聞カヌ・・・。

「・・・じょう〝、どうっだっ・・・！」

その時、少年の酷く、潰れたような声が聞こえた。

口や耳から止め止めもなく血を流しながら少年は私が持っているドクロを睨みつけていた。

そして、血走ったように開いていた彼の瞳が、より一層大きく見開かれた。

「やってみせろっっ！！！」

・・・それからどのくらい経ったのだろう。

気がつくと、高町なのはやテスタロッサ、神崎拓也、騎士達に我が主も来ていた。

「リインフォースさん！大丈夫ですか！？」

「リインフォース！」

高町なのはと、テスタロッサが私に声をかけてくる。

「あ・・・・・は、はい。大丈夫、です・・・」

起き上がり、そう言うと、皆が安堵のため息をついた。

「よかった・・・公園についたら、リインフォースが倒れていたから」

「全く、変な心配をさせおって」

テスタロッサが私の状況を説明してくれた。将は、呆れたような視線を向けてくる。

そんな中、我が主が車椅子を動かして私の前についた。

「リインフォース！消えるなんて絶対あかん！制御なら、うちがしっかりするから！だから消えんといてぇ！」

「あ・・・」

そうだ・・・彼は・・・？それと、私はどうなったのだ・・・？

それに・・・さっきから感じるこの感覚は・・・！

「・・・・・今まで感じていた・・・バグによる身体の淀みが、感じない・・・？」

「え・・・？」

胸に手を当て、自分自身の身体を調べてみる。

・・・確かに、今まで感じていた淀みがなくなっている・・・これって・・・まさか・・・！

「ち、ちょっと調べさせて・・・！」

シャマルが夜天の書を手に取って調べる。

少しして、調べ終わったシャマルの目が見開かれた。

「嘘・・・バグが、なくなってる・・・それどころか、プログラムが正常になってる！」

「え、ということは・・・！」

「リインフォースは、これからも生きていける・・・！」

この場の空気が一気に喜びに包まれる。

だが・・・これはつまり・・・・・。

「でもよ、なんでバグがなくなったんだ？」

「我らが確認した時には確かにプログラムは歪められたままだった・・・リインフォース、何かあったのか？」

「・・・それは」

この時、すぐに話すべきだったのかもしれない。

だが、彼がどうなったかがどうしても気になっていた私は、不意に、夜天の書に何かの紙切れが挟まっていることに気づいてしまった。

夜天の書を手に取り、紙切れが挟まっている頁を開く。

そこには――――、

『このことは誰にも話すな』

紙切れにはそう書かれ、所々、血が滲んでいた。

全て、悟った。

書を閉じ、書を抱いて、私は涙した。

涙が止まらない。

「よかったな、リインフォース」

神崎のその甘ったるい声は、耳に入らなかった。

主も、小さな勇者達も、騎士達も、祝福の言葉を贈ってくれている。

しかし、私のこの涙の意味を理解する者は、誰1人としていなかった。

――――私のせいだ。

私のせいで、１人の少年が犠牲になったんだ。

闇が終わり、祝福の風の名をもらった最後の最後で、誰にも知られず、

たった1つの、私にとって途方もない大きな代償が支払われた――。

―side・out―

## ｅ４．プロローグ　４（後書き）

今回を纏めると！！

Ａ，ｓです。

←色々すっ飛ばしてラストへ。

←ドクロに願ってリインフォースを完全に治しました。

←しかし代償としてキリヲから音が奪われそのまま別れ、リインフォースが鬱ＥＮＤ。

こんな感じ。

助かったのにリインフォースが鬱な終わり方って・・・。

でも、原作ではやてのために自己犠牲を選んだリインフォースなら、こんな感じになるのかなと妄想してみたり。

リインフォースって、責任感はしっかりしてるけど、逆にしっかりしすぎて１人で抱え込みすぎてるって感じなんですよね。１弾目なのポでも自分を強く責めたり、事態の早期終息のために自身の命を削るようなことをしようとしたりなので。

リインフォースはしばらくこの鬱を引きずっていきます。

## 忌束キリヲ　設定

氏名
忌束キリヲ

年齢
１３歳

所属・学年
私立聖祥大附属中学校第１学年

出席番号
２番

血液型
ＡＢ型

身長体重
１６４ｃｍ　５３ｋｇ

部活動
帰宅部

特技
才能（９種類）、読唇術

得意科目
数学、理科、国語

苦手科目
社会科、英語

好きなもの
甘いもの（特に翠屋のケーキ）、ライトノベル、静かな場所

嫌いなもの
理不尽、人ごみ、騒がしい（と思える）人

備考
・ドクロの保有者＝エニグマ（願いは9歳の時に一度使用。願える残りの回数は2回）
・エニグマ使用の代償によって聴覚と発声器官共に機能停止状態。念話も不能。
・デバイスを所持

神の失敗によって一度死んだ転生者。忌束キリヲは転生後に設定した名前。
性格は案外普通で、僅かにテンションが低め程度の学生。
血縁上の父親は暴力団の幹部。その父親の虐待によって背中や手足に重傷、今も古傷として残り、出血することもあるため行動に制限がかかっている。
才能はその重傷になった日に覚醒。同日、父親は交通事故で死亡。
怪我の退院後にエニグマとなる。
父親から受けた仕打ちによって理不尽を嫌悪し、理不尽を正そうと行動。無印ではプレシアの治療とアリシアの復活、Ａ，ｓではリインフォースの救済を行った。

しかし、リインフォース救済時にエニグマの力――願望を叶える力を使用。代償としてドクロに音を奪われる（サイレンス化）。
勉強は通信教育のみを受けていたが、古傷の出血が落ち着くようになり始めた頃に、母親の忌束ノゾミの手配により聖祥小学校第５学年から復学。今年で中学第１学年となる。
完全な無音環境で生きるため、読唇術を習得。だがそれだと相手の話がわかるのみなので、彼の性質上、会話は互いに筆話になる。
あだ名は、発声できない故に無口なため『サイレンス』。
古傷の出血は落ち着いてはいるもののまだ続いており、それを隠すために学校にも許可を貰ってフード付きのコートを常に着ている。
同じ理由と言って、エニグマのアザがある右手には革手袋をしている。
魔法陣はミッド式で、魔力光は灰色。キリヲ曰わく「黒の方がよかった」とのこと。魔力ランクはＡＡ。
また、魔導師の力を自営の非合法依頼遂行屋『大火星王の宴』の営業に使用。『大火星王の宴』に来た依頼は、キリヲが“その人が理不尽に悩まされているか”で判断している。欲目的の依頼は受け付けていない。
オカルトグッズを大量に所持している。あまりに所持しているがため、暇があれば検証もする。怪談も多く知っている。オカルトグッズを集めているのはノゾミ。「呪いには呪いを」という考えのもとキリヲの音を取り戻そうとしている。意味不明だが、ノゾミなりに可能性のあることをやろうという母親としての愛。

才能

・通信（テレパス）、チャンネル［ｅｓ］

原作『エニグマ』と性能は同じ。キリヲと触れた人物がリストに登録され、その中でキリヲを受け入れている人物とのみ通信・発信できる。
読み取りの場合には、思考の他にも過去の記憶映像を読み取ることもできる。
しかし、サイレンス化のため、現在この才能は事実上受信による記憶の読み取りしかできない。

・予知、夢日記

今日中に起きる出来事を予知する。
本来の予知（発現中に涙が出て、その間に予知）とは違い、原作では予知と通信（テレパス）の産物だった夢日記が今作の予知となる。
突然の睡魔に襲われ、寝ている間に左手で今日の日付と起こる出来事の絵日記を書き出す。
予知の運命は、行動によって変化も可能。つまり、予知は行動しなかった場合の未来である。
予知の記述は、下手くそな絵と文字な上、全て平仮名である。
起きたままの夢日記も可能。起きたまま書いた時、未来の動きを予知する。

・消える呪い

原作と同じく、消えろと念じれば自分や、消えてほしい物体が消え

る。
写真の一部を消すことも可能で、消した場合にはそれが存在しない場合の写真として現れる。
正確には消えるのではなく、透明化。効果は最長で１０秒程度で、透明化している間に行動することもできるが、才能を発動する場合はかなりの集中力が必要になる。

・第３の手

原作と同じく、手形のみの透明な３つめの手。
半径５ｍ程までが第３の手が届く範囲であり、その範囲内で手を動かし、軽いものなら運ぶことも可能。手の大きさは７、８歳程度。
第３の手が触れたものには手形がつくが、数分したら消える。

・三次減算

原作と同じく、無機物の大きさを縮小できる才能。
元々の大きさが物体に表示され、その表示された数字を“削り取る”ことで物体を縮小。削った数字は手に刻まれ、その数字を元の物体に戻すことで物体の大きさを元の大きさまで拡大させることができる。
あくまで減算のみであり、元の大きさより大きくすることはできない。
ちなみに刻まれた数字が手から他の場所に移ることはなく、第３の手で触れることによって発動した三次減算は、第３の手で再度触れなければならない。

・人形化

エニグマ5巻のおまけ参照。
精神が肉体から離脱し、別の身体、つまり人形に取り憑いて動くことができる。
取り付かれた人形は、一般成人の身長並みまで大きさが変化。そして身体能力が月が出ている夜間に限って6倍になる。
なお、発動中は人形が本体となるため、人形に痛覚が存在する。頭と身体が離れる、身体がバラバラになると気を失ってしまう。
また、同じく人形が本体となるため、サイレンス化を受けている現時点で唯一声を出せる姿。しかし人形化の間他の才能が使えない。
人形に魔力がなければ、魔法も使えない。

・逆再生

原作と同じく、物体の動きや状態を巻き戻す。
発動時に背中の古傷の皮が剥がれ、その皮が人型の式紙に変化、巻き戻す物体に張り付きカウンターを出現させて巻き戻す。
逆再生の速度は等速。組み立て状態などの巻き戻しならば、組み立った直後からの逆再生となる。
逆再生中、背中は皮がなくなったことによる出血が起こるため、長時間の運用は命の危険にもなる。

・ＦＬＡＴ（フラット）

写真や絵や文字などの平面世界に入ることができる。
平面世界内はその平面世界によってことなり、写真などの静止画像の場合はものは常に止まっており、動画の場合はその動画内の動きのみをする。
平面世界のものは操作主であるキリヲと、キリヲが許可をした人物のみが動かすことができる。なお、キリヲに限ってものをある程度違う形に変更できる。
平面世界と現実世界の行き来はキリヲとキリヲが触れている人物のみができる。
なお、平面世界でのものの変化は基本的には外見のみであり、中身を変えるのであれば中身もちゃんと設定しなければならない。

・コピー

無機物を全く同じようにコピーし、コピーした物体を操ることができる。
コピーした物体は角度や落下、固定を自由自在に変えることができる他、不可視や不可侵、さらには中身の改変などもできる。
１つの物体につきコピーは一度きり。これは、例えば同じもので片方がコピー済みのＡとＢがあったとして、Ａはもうコピーできないが、質としては全く同じであるＢをコピーすることはできるというもの。

その他道具

・エニグマの証明

エニグマをエニグマたらしめるドクロ。下顎の骨が前後で入れ替わっている。
ドクロがエニグマとして受け入れられた者の願いを3つ叶える。
しかしその願いの代償として、エニグマを含めた周囲の運命が歪められる。
しかし、代償を提示すればそのものが代償を支払う。提示する代償は、必ず何かしら人の運命が関わらなければならない。
所有者――エニグマの望みが3回叶うまで、エニグマの所有権は保持される。
代償の提示と所有権の保持のルールは原作にはなく、神が新規に作成したルール。キリヲが代償によって不幸になるのを防ぐために設定した代償提示のルールだったが、逆に自己犠牲の結果を引き起こした。所有権保持のルールは単純に、確実にキリヲが願いを叶えることができるようにするための手配である。また、代償がサイレント化で終わっているところを見ると、神は代償による被害も操作して軽減しているらしい。
なお、右手に刻まれるエニグマの刻印と一度所有権を別の人に変えることで願いの制限回数が元に戻るのは、原作通りに存在する。

・ガーディアン

インテリジェントデバイスで、支援・制御に特化したデバイス。
バリアジャケットそのものがデバイスであるという変わった構造。

バリアジャケットは黒い学ランと手足の枷。早い話が原作エニグマで刑務所にいたキリヲそのもの。
防御能力はとんでもないぐらいに高く、防御魔法を本気で張れば、なのはのスターライトブレイカーも防ぎきることができる。・・・できる、というのが精一杯であり、防いだあとはおそらく魔力切れや体力の消費で動けなくなる。
使用者の思考を読み取って行動する機能が備わっており、それを利用してサイレント化している状態でもセットアップができる。
自動防御システムにも優れ、自動防御だけでもかなりの威力までこ攻撃を防ぐことが可能。純粋にバリアジャケットの守りも堅い。結界魔法や拘束魔法、補助魔法が充実している。
だがその反面、攻撃関係についてはもはや無能レベルである。
待機状態は十字架のネックレスである。
ちなみにカートリッジシステムはない。というか、つけれない。枷の部分もバリアジャケットだから。

## e5．キャラてんこ盛りって、それなんてご都合主義（前書き）

やっと本編です。

なお、今回から会話に“筆談”があります。

筆談の時は文頭に『：』がつきますので目印に。

ではどうぞ。

## e5．キャラてんこ盛りって、それなんてご都合主義

そうして、後は原作キャラに遭遇しないようにしながら、現在。

俺は聖祥中学1年生。聖祥中は女子校だとか二次で見たことがあるが俺は知らん。作者が知らん。

まあメタ発言はいいとして。その辺は二次創作だから。

ちなみに2組だ。

今日の日付は、中学校生活が始まってから1日後。今日から授業が始まっていく。

制服に着替え（学ランじゃないのは若干残念）朝食も取り、今日の授業で使う教材を入れたカバンを持つ。空いた片手はよくポケットに突っ込んでいる。

玄関で靴を履き、扉を開ける。

そこに、おふくろがやってくる。

笑顔でいくらか口を動かした後、紙を1枚、俺に差し出してきた。

：行ってらっしゃい

「　　」

その8文字を見た後に、俺は音のない声を出す。

そして出発した。

人は、適応する動物である。
今までにない環境、問題、困難に直面した場合、それに対する答えを探し、最も効率のよかった自分の答えに納得し、それを答えとして定着させていく。

人間は適応力があり、そして頭が固いという、矛盾した生物だ。

そんなことはないと言う人はいるだろう。

逆に、それがいいと言う人もいるだろう。

俺はおそらく後者だ。その矛盾は受け入れるべきものであり、それが個性になると思ってる。

音の自由を奪われる、無音の呪いを受けた当時の俺は発狂するか、思考が止まるかと思った。

しかしそれから3年と3ヵ月。もう、無音であることが当たり前となっている。

そして適応するために、読唇術を覚えた。会話ができるようにするため、筆談という選択肢を取った。

元から静かな場所が好きだった俺にとってこの呪いは、今となっては呪いではなくなっていた。

中学校生活が始まったのは昨日からだが、実はまだクラスに誰がいるのか1人も把握していない。

忌束キリヲという名で、出席番号が最初の方で座席が端なため尚更だ。

昨日のうちに席替えもされたが、それでも全くみていない。ちなみに席替え後の座席は真ん中より少し後ろの位置。

なので教室に入って、まだ掲示されていたクラス名簿を確認する。

主に調べるのは原作キャラ。

・・・いた。

真っ先に見つけたのはアリサ・バニングス。女子の1番。なんか色々と突っかかってきそう。騒がしいやつは基本的に嫌いだ。

ん、フェイト・T・ハラオウンの文字みっけ。筆談したら、字を丁寧に書いてくれそう。俺から声ならぬ文字をかける気はないが。

・・・ん？

高町・・・なのは、だと・・・・・・？

・・・通称魔王まで居やがった・・・静寂に暮らせるか不安になる・・・。

はやてやすずかの名前はない。はやては会ったことないが、すずかは去年一昨年と連続でクラスメイトであり、よく筆談相手になってもらってた。ゆえに一緒でないのが少し残念だ。

あの転生者・・・神崎拓也の名前はなかった。あいつ、チート能力持ってるクセして俺にネチネチ、しかもせこく突っかかってきてうざったかった。

具体的には死角から声をかけるとか、聞こえないことをいいことに陰口を言いたい放題。

聞こえないからって、よくそんなみみっちいことができるな。哀れに思えてくる。

しかもあいつの周りにはムサい取り巻きがいるからそれもウザい。このクラスにだってその取り巻きがいるし。まあ、読唇術で言ってることは筒抜けだし、愚者に関わる気もないので適当に泳がせておいてもいいし。

とりあえず、自分の席につく。他の人の席？そんなの知ってどうなる。どうせ、近くに原作キャラなんていないさ。

ちなみに、俺は学校内でも常にコートと右手の革手袋を着けている。学校にもおふくろが事情を説明して許可をもらっている。右手は刺し傷だけ言ってエニグマのアザは言ってないが。

・・・ふう。このクラスで、静寂な日常を過ごせるだろうか？あの転生者（今回は取り巻きだけだが）やらアリサやら魔王やらで、もう不安ばかりだ。まあ、すぐ近くに来るなんて、そんなご都合主義はってぬぉおおおっ！？

揺れた！地震か！？いや違う、左肩が掴まれてる！誰だ、揺らしたやつｈ・・・・・・・

・・・・・・・・・・。

「　　！　　！！」

・・・・・・・・・。

・・・なぜアリサが俺の前にいる。しかもなんか言ってきてる。聞こえないから、表情で苛立ってることと荒い口調で言ってることしかわからん。

えーと、ちょっと待って。さっき言ったことを読唇術で読み取るから。

『なんでアンタは！昨日も今日もそこまで無視すんのよ！！』

・・・・・・昨日も？

え、何？昨日、アリサが声をかけてきてたの？

「　　！　　！！」

『ちょっと！何か言いなさいよっ！！』

いや、喋れないんだが。

とにかく、会話を成立させるために、筆談用の紙とペンを出さねば。

ポケットからメモ帳とペンを出して、スラスラとって、おま、馬鹿、揺らすな！書けない！

大方無視されていると勘違いしているようだが、俺は書けないと会話ができないという事態。アリサが止まらない限り進展しないぞ・・・。

あ、なのはがアリサを止めてくれた。何だかかなり近くから視界に入ってきたように感じたが、まあ気のせいだろう。

それより、やっとこれで文字を書ける。書き始めたら、『無視すんなー！』とか言ってるようだが、俺の耳には文字通り入らない。

・・・まあ、これだけ書ければ十分か。

俺はペンを置き、メモ帳に書いた内容を目の前の２人に見せた。

：筆談

これを見た瞬間に、アリサのいがみが消えた。

そして出来上がったのは申し訳なさそうに引きつる表情。チャンネル［ｅｓ］なしでアリサの思考がわかった。まあ間違いではないと心の中で言っておこう。

引きつってるアリサとは違い、なのはは俺からメモ帳とペンを受け取って何かを書き、メモ帳を返した。

：耳、聞こえないの？

俺はその下に追記した。

：声も出せない

なのはもすぐに返しを書いた。

：ごめんね。アリサちゃんを無視していた訳じゃないんだね
私は高町なのは。右隣にいたんだけど、気づいてなかったかな?

まさかの隣人だった。

：忌束キリヲ

：じゃあ、キリヲ君でいいかな?私のことはなのはって呼んでね

：わかった

筆談って、やっぱ楽しい。
音のない俺にとっての、唯一無二の会話手段だ。

そこまでなのはと書きあっていたら、メモ帳をアリサにひったくられた。

ひったくったアリサがガリガリと何かを書き、勢いよく書き終えた
それを机に叩くように置く。音は聞こえないが。

：アリサ・バニングスよ。アンタの左斜め前
さっきのは、ごめん
あと、呼び方はアリサでいいから

なんてこった。神よ、俺はアンタに何をした？

・・・フェイトは？・・・・・・一番筆談しやすそうな人物が一番
離れていた。今年は厄年か。

：で、なんの用だ
聞きたいことあるならまとめて書け

そう書いた後、アリサとなのはが１つずつ質問を書いた。

：生まれつきなの？あと、いつまでコート着て手袋着けてるのよ

：どこかで会った？

アリサのは、当然このサイレント化についてだな。

なのはの質問は・・・まあ、無理もないな。６歳の時に１度会った

っきり。それでも「会ったかもしれない」と思えるだけでも十分すごい。

適当に答えるか。

‥耳と声については、数年前に事故に遭ってからだ。コートと手袋は怪我の古傷を隠すからずっと着けるなのはの質問については知らん

エニグマやゲス親父のことを言うのは無理があるし、なのはについても事実を教えても特に意味はない。

質問に答えると、どちらも『ごめんね』と書いてきた。アリサのは嫌なことを思い出させたと思っての謝罪、なのはのは変なことを聞いての謝罪だろう。

「　　」

『おーい、席につけー。授業始めるぞー』

先生がやってきたため、筆談はここで終わりとなった。

授業は退屈だ。俺の場合は、何も聞こえないため余計に退屈である。

授業の内容は黒板に書かれたことをノートに写せばいいので問題ない。第一先生の話は、常に先生がこちらを向き続けるなんてことが有り得ないため読唇術が役に立たない。

しかも今日の授業は全部今日が初めての授業であるがためにミーティングばかり。あまりの退屈さに寝てしまいそうになる。というか、寝た。

途中、なのはから

：音聞こえないんだよね。大丈夫？

そう書かれた紙を渡された。

：読唇術があるから余計なお世話だ

そう返しといた。

今日の授業が終わって放課後。特に残ってやることもない俺はさっさと帰る準備をし、さっさと学校を出る。

午前中はアリサが突っかかってきたが、帰りにまで突っかかってくることはないだろう。

そう思いながら靴を履き、出ようとした時、肩を叩かれた。誰だ。

‥久し振りだね

そう書かれた紙を持って、笑顔を向けてくるすずかがそこにいた。

俺はポケットからメモ帳とペンを取り出し、会話を開始する。

‥久し振り。何か用か？

‥帰ろうとしてるところを見たから、ちょっと声をかけた方がいいかなって

特に他意はないらしい。だがだからといってそうですかで終わるのも心無い気がする。

書く内容を考えていると、すずかに誰かが声をかけていた。誰か、というかはやてだった。

「　　？　　？」

『すずかちゃん、この人は誰なん？友達？』

「　　」

『友達・・・と言えば友達かな。忌束キリヲって言うの』

友達と言ってくれた（多分）。ちょっと嬉しい。

「　　？　　？」

『で、何書きあってるん？まさか告白？』

「　　」

『ううん、筆談。キリヲ君、耳が聞こえなくって』

「　？　」

『そうなん？じゃあ・・・』

：八神はやてです。よろしゅうな

何も聞こえないことを知ったようで、自己紹介を紙で書いてきた。

返事を書く。

：忌束キリヲ
特技は読唇術
好きなことはタレの二度付け

「　　！！　　」

『大阪人に喧嘩売っとんのか自分は！！・・・あっ』

やっぱり先に口が動くタイプだったか。さすが大阪弁少女。だから少し苦手だ。

読唇術ができるのと会話ができるのは当然違う。それに読唇術ができると言っても全部読み取ることなんてできない。

はやてもそのことに気づいて、しまったと思ったのか。わざわざさっきのツッコミを紙に書こうとしている。

‥読唇術ができると書いたはずだ
あと、タレの二度付けは冗談

‥そうなん？よかったぁ
もし本当だったら大阪の常識を最初から最後まで全部叩き込もうと思っとったわ

・・・危ないところだった。

さて、はやてとの会話もできたし、去るには頃合いか？

‥あと何か俺に用事はあるのか？

‥ううん。わざわざごめんね

‥たまに俺のクラスに来てくれ。俺の周囲は騒がしそうなやつばかりだから、落ち着いた筆談がしたい

‥うん、いいよ。それじゃあね

最後にすずかが書いた文字を見てから、メモ帳をしまって学校を出た。

―ｓｉｄｅ・すずか―

メモ帳を片付けた後キリヲ君はすぐに早足で帰っていった。

５年生から見てきたけど、歩くの早いなぁ。

「話せないのが変わっとるけど、結構いい人やったなー。けど聞くことも話すこともできない生徒がいたなんて初めて知ったでー？」

「はやてちゃん、サイレンスって呼び名、聞いたことある？」

「サイレンス・・・？・・・・・ああー、あるある。拓也君が一時期しょっちゅう言っとったぁ・・・」

拓也君のことを思い出したのか、少し顔をしかめるはやてちゃん。

そう、一時期拓也君はよくサイレンスという人のことを言っていた。それも悪口ばっかり。つまり陰口だ。

「え、それを今聞くっちゅうことは・・・キリヲ君がそのサイレンス？」

「うん、そうなんだよ。小学校の時は生徒の多くがそれで呼ぶし、先生も何人かそう呼んでたよ。陰口を言う生徒も結構いたし・・・」

無口（サイレンス）。わかりやすいと言えばそうかもしれないけど、訳あって言葉を発せない、言葉を聞き取れない人をそう呼ぶのは、聞こえなくっても傷つくと思う。

それだけじゃない。さらに心無い人達は、聞こえないからって本人の目の前で悪口を言ったり、キリヲ君にとっての大事な会話の手段であるメモ帳やペンを壊したり・・・キリヲはそんな、いわゆる“いじめ”を受けていた。

勿論、私はそれを見て注意してきた。けれどキリヲ君に対するいじめは一向に収まらなかった。

聖祥小学校と中学校の生徒は変わってないから、おそらくいじめはまだ続く。

キリヲ君はそれらを気にした様子を一度も見せたことがない。言葉を発せないからといっても、気にしているなら表情に出るはず。キリヲ君はそのいじめに表情を少しでも変えたことは一度もない。まれにそんなキリヲ君に苛立った子が殴りかかったこともあったけど、キリヲ君はそれを返り討ちにしてしまったりもする。

だけど・・・

「今年もキリヲ君大丈夫かな・・・少し心配だなぁ・・・・・・」

「・・・・・・ほぅ」

「？」

キリヲ君のこれからを心配してため息をついたら、はやてちゃんがこっちを見ながらにやけていた。

どうしたんだろう？という質問が頭の中でできた時に、はやてちゃんが口を開いた。

「すずかちゃん、ひょっとしてキリヲ君に気があるんか？」

「ち、違うよ！？」

はやてちゃん何言ってるのかな！？

いきなりのそれはホントにびっくりだよ！

「どうかな～？すずかちゃんの心配のしかたからして、そう思えるんやけどなぁ～♪」

「違うってばぁ！！」

「そうか？でもキリヲ君、目つきがちとキツいけど結構いい感じやったしなぁ・・・じゃ、うちがもらおっかな♪」

「だっ、ダメーーーッ！！」

「なんで？」

はっ！？な、なぜか、つい！？

ええっと、言い訳、言い訳・・・！

「えっと、き、今日初めて会ったのにいきなり付き合うとか早すぎると思うよ！ちゃんと人を選んでから！！」

「ははははっ、なんや今日のすずかちゃん、からかうの楽しいなぁ」

「もーーーーっ！！」

付き合っとるやろ。

付き合ってないよ！

じゃあキリヲ君の好きなものは？

甘いものとライトノベルと静かな場所！

やけに詳しいなぁ、やっぱ付き合っとるんやろ。

いい加減にしてーーー！！

このやり取りは、なのはちゃん達が来るまでの少しの間続けられました。いくつか地雷踏みました・・・。

私、少し涙目です・・・。

## e5．キャラてんこ盛りって、それなんてご都合主義（後書き）

今回を纏めると！！

なのは、フェイト、アリサと同じクラスです。

←

キリヲの右隣がなのは、左斜め前がアリサ。

←

すずかとは筆談友達。はやてと知り合う。

こんな感じ。

## e6．授業が退屈すぎると隣の人とこっそり話たりとかってするよね。つか、原

1週間もせずにお気に入り件数１００越えという結果に戦慄している楓です。

今までこんなことなかったので・・・・・結構恐怖を感じてます。

そんなことはお構いなく、今回もどうぞ。

後、この小説には視点説明の他にもサウンドオンリーなども含みます。

## e6．授業が退屈すぎると隣の人とこっそり話たりとかってするよね。つか、原

Q．俺にとっての授業とは？

A．退屈以外に何もなし。

どうも、忌束キリヲです。

上の通りです。退屈で仕方ない。

音が聞こえないため、黒板の文字を写す。ただただそれだけ。それ以外何もできない。

先生は俺が何も聞こえず、喋れないことは知っているため、当ててこない。楽できるからいいのだが。

だがここまで退屈だと、どうしようもなくなるのも、また事実。

・・・ドクロよ、お前が俺に課した代償は“無音”だよな？まさか、こんなことになるのを予測してやったんじゃないよね？

・・・もう無理。寝よう・・・・・・ＺＺＺ。

次に起きたら昼休みになっていた件。寝過ぎだ、俺。

まあでも昼休み開始直後に起きたとは俺もなかなかやるな。とりあえず昼飯食うか・・・ん？

：フェイト・Ｔ・ハラオウンです。はじめまして、キリヲ

そう書かれた紙を差し出し、にっこり笑顔を向ける金髪女性が目の前にいた。

俺の名前を知ったのは・・・うん、ある意味当然か。他の原作キャラ４人は俺のこと知ってんだし。つか、よく前の２年間はバレずに済んだな。

：忌束キリヲ
特技は読唇術
俺のことは誰から聞いた？

：なのはから
あと、はやてからも甘いものとライトノベルと静かな場所が好きだって聞いたよ

はやての話、それはすずか経由に間違いないな。・・・すずかよ。
お前だけは決して裏切らないと信じてたのに。

ふと教室の扉を見る。
はやてと申し訳なさそうにペコペコ頭を下げるすずかを発見。

すずかは許そう。しかし八神、てめーはだめだ。
帰ったら2、3日の間腹痛に悩まされる呪いをかけてやる。実は俺、オカルトアイテムをたくさん持っているんだぜ。

まあそれはそうとして、フェイトの字はやはり丁寧で読みやすい。

原作女子キャラの字の丁寧さを順位にすると、すずかが1位で2位にフェイト、3、4位がなのは、はやて、5位がアリサといったところか？

別にアリサの字が雑だとか言っている訳ではない。すずか、フェイトの字がふつくしいだけだ。

：まあよろしく。アリサは口が先に出そうだし、なのはについてはお話と称した何かが来そうなんだ。偶にでよければ筆談相手になってほしい

：なのはのことについては後で弁護させてもらうとして、こちらこ

そよろしくね

：というか、フェイトから筆談を持ちかけてほしい。俺は暇であればそれをラノベか睡眠に費やしてしまうから

：自分でも積極的にした方がいいと思うよ
それじゃあ、私はちょっとお昼を食べに行くから

：ああ、了解

教室を出て、はやて達と共に行ったフェイト。再び俺1人に。

さっさと飯食って、後はラノベでも読むか。

筆談相手がまた1人できた。これからに少しだけ期待ができる。

やっぱ、大した呪いじゃないかな。無音の世界というのは。神が代償の大きさをできるだけ小さくしたんだろう。感謝である。

―ｓｏｕｎｄｏｎｌｙ―

「うーん・・・」

「なのは、どうしたの？」

「うーん・・・すずかちゃぁん、寝ちゃったキリヲ君はどうやって起こせばいいの～？」

「あー、それ私も聞きたいわ。2時間目からぶっ通しで寝てたわねぇ」

「声かけても意味ないし、揺すっても起きないし・・・」

「揺するだけじゃだめだよ。逆に軽いマッサージに感じて余計に寝ちゃうから。やっぱ、ちょっと強引にやった方がいいと思うよ」

「具体的には？」

「私はよくキリヲ君の後頭部を国語辞典とか広辞苑とかで叩いてたなぁ」

「すずかちゃん、そないなことする人やったっけ？人変わってへん？」

「キリヲ君を起こすためなら変わるよ。あ、できるだけ3面の角が1つになっている箇所で叩いてね。キリヲ君、もう2面の角じゃ耐性ついてるから。もしくは思いっきり叩く・・・じゃなくて殴ってね」

「ねぇ、すずか大丈夫？すずかがそんな物騒な言い方するの、あたし初めて見たんだけど」

「同感なの。けど参考にするね」

「なのは・・・やりすぎないようにね？」

「大丈夫やない？ギャグ補正で」

「大丈夫だよ。キリヲ君、血が出るくらいに殴っても平気だから」

「2人の考えが心配だよ」

―ｓｏｕｎｄ・ｏｕｔ―

昼休みが終わって再び授業。
昼休みで上がったテンションをここで落とすとか、マジ鬼畜。
午前中に寝てしまったから、なかなか寝付けない。

ドクロよ。本当にこれ狙ってないよね？仮に狙ってたとしたらこれなんて孔明なんだよ。策士すぎるわ。

だが負けん。俺は負けんぞ。必ずや寝てみせる！
寝ることにこだわる理由？当然退屈だからだ。なのはに筆談を持ちかけるのはやりすぎると迷惑になる。

という訳で、机に突っ伏し、寝る。
眠気は来るものではない、作るものだ！

ん・・・誰かが揺らしてきた。右肩が掴まれているみたいだから、

多分なのはだ。
なのはよ、邪魔しないでくれ。今から俺は寝るんだ。この退屈でしかない授業から離脱するんぶるぉっ！！？

頭の前後に強い衝撃。１つは机の上に顔面が強打したものだとわかる。もう片方は、何か鈍器的な何かにぶつけられた感覚。

キッと右隣を見る。国語辞典片手に素晴らしい笑顔を向けてくるなのはがそこに。

‥起きた？

‥永遠の眠りにつかせるつもりかお前は
頭から血出てない？

‥出てないよ。結構本気でやったけど、確かに頑丈だね

加減というのを知ってください、魔王様・・・。

あー、頭がガンガンする・・・こんなんで寝ることなんてでき・・・な・・・。

ん・・・眠気・・・？これは、“アレ”か・・・退屈しのぎにはちょうどいい・・・。

寝た。

少ししてすぐ起きた。起きると、目の前に国語辞典が迫っていたからギョッとした。

だが国語辞典は止まることなく、俺のこめかみに直撃。

：殺す気か

：あ、起きた？

：脳震盪でゆっくり眠れそうだ

：寝る方が悪いんだよ

この眠気は不可抗力だ。

ということは、この席でいる間はどう頑張ってもこの衝撃が何度もくる。なんて乙ゲー。

・・・そうだ、それよりも“日記”は・・・？

・・・オッケ、書かれてる。どうやら書いてる様子は俺が寝ていることで死角となった場所で書いていたようだ。

――寝ている間に左手で今日の未来を綴る『夢日記』。

今日の未来はっと・・・。

４がつ１０にち

ゆうがた、おんながたいいくかんそうこでいじめられました。

いじめたのはさんにんのおとこおんなで、おんなからかみをとりあげてにたにたわらってます。

おんなはそれからだれもしんじなくなりました。

・・・放課後、体育館倉庫で女がいじめられる。

いじめるのは男女3人。絵からして、おそらく紙幣だ。それをとりあげている。

そしていじめられた女は人間不信に陥った、か・・・。

緊急事態（メーデー）か。

まあ、この日記はだいたい不幸の未来しか書かないからな・・・。

今日は特に予定もなし・・・。

なら、理不尽を正しに行くか・・・。

帰りのホームルームが終わるとすぐに道具を片付け、すぐに体育館

倉庫へと急ぐ。

夕方のどのタイミングかはわからない。だからなるべく急いだ方がいい。

・・・見えた。体育館倉庫の入り口だ。

スライド式の扉が少し開いている。覗いてみると、４人の男女の生徒がいた。

比率として１：１。１人の女子に２人の男子が迫っている。もう１人の女子は、遠巻きからその様子を恐々とした様子で見ている。

・・・なるほど、いじめられたやつの人間不信の理由はこれか。

とにかくまずは阻止が優先。スライド式の両扉を、開け放つ。

開け放った音で気づいた男子２人。ギョッとするも、俺の顔を見て余裕を取り戻す。

「　　」

『なんだよ、サイレンスか』

「　　」

『なんの用かなサイレンス。まあ、聞こえないだろうなっ』

笑う男子２人。

読唇術で読み取った言葉にため息を吐いた後、俺はツカツカと彼らに近づき――――、

まずは1人の腹に、膝蹴りを食らわせた。

くの字に折れ曲がるそいつの身体。追撃に回し蹴りを叩き込み、床に叩き落とす。

もう1人が殴りかかってきた。俺は適当に避け、ジャブを打ち込む。最後に回し蹴りで同じくKO。

ふーっ、退屈すぎる・・・。

叩きのめされた2人は起き上がるとよろめきながら逃げていった。

だいたい金を巻き上げるやつは中途半端な力で有頂天になっている奴だからな。力の差を見せつければ、勝手に逃げていく。

さてと・・・あとはこいつらだな・・・。

日記にあった人間不信。あれは、いじめグループの中にいた女子が、いじめられていた奴の友人かなんかなのだろう。裏切られた結果、人間不信に陥ったという訳だ。

まあ、ここから先は俺の行動範囲外だ。俺が入るべき話じゃない。

それでも、書き置きぐらいはしといてやるか。

メモ帳の一枚を切って、ペンで書く。
それを未だに遠巻きでビクビクしている女子に突きつける。

‥謝って、話しておけ

俺はそう紙に書いた。

その紙を無理やりそいつに持たせた後、俺は体育館倉庫を立ち去った。

今日は翠屋に寄るのは諦めるか。常連だし是非行きたいけど・・・なのは達がいるだろうし。

あー、そういやシャー芯とメモ帳が残り少ないんだっけ・・・そっち買いに行かないとな・・・。

これが帰宅途中の俺の思考だった。

ちなみに今日の晩飯は肉じゃが。おふくろの料理は美味です。

## e6．授業が退屈すぎると隣の人とこっそり話たりとかってするよね。つか、原

今回を纏めると！！

基本学校では寝てばかりのキリヲ。

←

なのははすずか直伝の起こし方でキリヲの睡魔に立ち向かう。

←

キリヲＶＳなのは。２人の壮絶なバトルが繰り広げられた！！

半分嘘です。それにこの纏め方、夢日記のことが書かれてない・・・

。

## e7．俺の仕事はこんなもん（前書き）

書くことはない・・・かな・・・。

なら前書き書くなよ、とか言わないっ。

## e7．俺の仕事はこんなもん

今日は休日。

休日の俺の過ごし方は、寝るかラノベ、後は“仕事”だ。

うーん、“仕事”でもすっかな。当たりが出るとは限らないけど。

パソコンの前に座る。

パソの電源をＯＮ。

そして、俺が経営している非合法依頼遂行屋『大火星王の宴』を開く。

『大火星王の宴』。

エニグマ原作では、数奇ケイが運営するオカルトサイト。しかし俺の場合は、上記の通りに非合法的な依頼を受け付けるサイトになっている。

非合法と言っても、犯罪ばかりではないし、犯罪を目的とするような場所ではない。合法なものもある。

早い話、警察とか政府とか――管理局では相手にしてくれないものを受け付けるということだ。

実はこのサイト、次元を超えて存在している。

というか、活動範囲は主にミッドチルダだ。そこでよく依頼をこなしている。

ちなみに、このサイトは理不尽を受けた者の悲鳴を聞き、その望みを叶える・・・そんな厨二臭い都市伝説風に書いてある。
どうでもいい依頼の牽制になればなと思ってる。

第一、こんなサイトを見てみろ。期待以前に怪しさ満天でまず依頼を書き込まねーよ。

つまり、その怪しすぎるサイトに依頼をするということは完全な冷やかしか、こんなのにすがらなければならない程の事態になってるかの2つに1つ。そうなれば判別がつきやすい。

さて、今回の依頼はっと・・・・・・。

・・・はぁ、冷やかしばかりだな・・・まあ仕方ないけど。よく書き込もうと思えるな。逆探知されても知らんぞ・・・。

・・・ん、この依頼は?

ニックネーム：R

内容：父さんが冤罪を着せられて殺人犯として捕まった。
父さんには僕と一緒にいたというちゃんとしたアリバイがあるのに、管理局は話を聞いてくれない。
報酬ならいくらでも出す覚悟はある。
父さんの無実の証明、あわよくば、犯人の逮捕のために力を貸してほしい。

ふむ・・・冤罪か。

依頼としては申し分ないな。俺が受けたいのはこういう依頼なんだよ。

返信を書く。

内容：『大火星王の宴』運営者のエニグマです。依頼を読ませていただきました。
あなたのその願いを叶えたく思います。
直接会って話を聞きたいです。本日の何時に、どこで合流するかの記述をお願いします。
参考にできる資料があれば、それも持ってきてください。

送信。

着信。

ニックネーム：R

内容：ホントですか!?ありがとうございます!
場所はミッドチルダ北西部、噴水公園で待ち合わせしましょう。できればすぐに来てください。私もすぐに待ち合わせ場所に向かいます。

返信。

内容：わかりました。私もできるだけそこへ早く行きます。
よろしければ、胸にあなたにニックネームを書いた紙を貼っておいてください。それを目印にします。
私は黒いコートと、右手だけに黒い革手袋をはめています。
それでは、現地で会いましょう。

さて、行くか。

魔導師であることともすでに知っているおふくろに一言伝えて、俺は転移魔法でミッドへ跳んだ。

待ち合わせ場所の噴水公園に到着。

辺りを見回す。R、Rはどこだ・・・？
・・・ん、誰かがこっちに近づいてくる。茶髪でスーツを着た青年だ。胸元に何か張ってる・・・Rだ。

メモ帳を出して、書く。そして差し出す。

：あなたがRさんですか？
エニグマです。話は筆談でお願いします

Rは筆談という手法に唖然としていたが、すぐに気を取り直し、メモ帳とペンを受け取って書く。

：僕がRです。依頼を受けてくださってありがとうございます。

：さっそくですが、話を詳しく聞きたいです。近くのベンチに座って話にしましょう。

そう綴って、俺とRは近くのベンチに座った。

それから、Rは具体的に、当時のことを書き始めた。

：当時の夜僕は、家で父さんと2人で酒を飲んでいました
結構な量を飲んだのでだいぶ酔ったのですが、確かに父さんと飲んだという記憶はあります
しかし翌日、管理局の人がやってきて、突然、父さんを逮捕すると言ってきたんです
父さんと飲んでいた時間に起きた、家から少し離れた場所で起きた、一般女性が刺殺された事件で、父さんが凶器であるナイフを持って襲ったのを見た人がいるというのです
私はすぐに言い返しました
父さんは僕と一緒だったって。2人でお酒を飲んでいたってでも局員は信じてもらえず、逆に酒の酔いで一緒にいたと勘違いしてるんじゃないのかと言われ、そのまま父さんは連れていかれました

何度も刑務所に行って私が無実を訴えても局員は聞いてもらえませんでした
痺れを切らした局員が、証拠を見せてやると言ってビデオを見せてきました
ビデオにはナイフを持った父さんが、女性に何度もナイフを振り下ろしている映像が入っていました
・・・愕然としました
それでも食い下がろうとしましたが、管理局の人に追い払われてしまいました
父さんは、今も刑務所にいます
裁判もまだ続いています・・・

Rの手は震え、顔は涙と鼻水でグシャグシャになっていた。

なるほど。なら必要なのは、そのRとその親父が事件当時に飲んでいたという証拠と、そのビデオが偽の証拠である証拠だな。

なら、いけるか。

‥わかりました。行きましょう

‥行くって、どこにですか?

‥無実を証明できるものが置いてある場所にです

俺達は立ち上がった。

Rの案内を受けながらついた場所は、Rの親父が収容されている刑務所だった。

‥ここに、あるんですか？

‥ええ。行きますよ

刑務所の入り口に向かって歩き出す。

途中で局員が俺達・・・というか、後ろをついてくるRを見つけてしかめっ面をした。Rはずいぶん足を運んでいたようだ。

「　　？　　！　　！」

『お前、また来たのか？何度言っても証拠は変わらないんだよ！帰った帰った！』

後ろでRが反論しているかどうかわからない。しかし俺はそれを気にせずに、警官に向けてメモ帳を見せた。

‥すみません。後ろの方のお父さんが起こしたという事件について、尋ねにきました

そう書かれた紙を見た瞬間、局員は片眉を上げた。

「　　？　　？　　？」

『はぁ？なんだこれは？お前の口は飾りか？』

‥ええ、食事の時以外はただの飾りですね

局員の口を読んで返事をすると、局員は目に見えて驚いた。

「　　！」

『なんだよこいつ、気持ち悪いな・・・！』

気持ち悪くて結構。

この世界では読唇術はあまり知られていないらしい。まあ、音が聞こえなくっても出した言葉を瞬時に文字化させるシステムもあるからなぁ。ミッドチルダは便利だ。

‥その、証拠であるビデオを見せてくれませんか？

カウンターで渡されたのは、この世界では珍しい手持ち型のビデオカメラだった。読者には、普通に俺達が使っているビデオカメラを想像してくれれば間違いない。カメラの底には、三脚と繋げるための部分を普段は隠すための蓋がある。

ビデオを再生する。

再生されたビデオには、ナイフを何度も振り下ろす男性と、何度も刺される女性の姿が映し出されていた。この男性が、Ｒの親父だろう。

・・・・・・。

‥どうだ?あんたも、これを見て信じないと言う口か?

局員が聞いてくる。俺は返答を書いた。

‥この証拠を提示したのは誰ですか?

‥ガイ・メーラーだよ
被告が働いてる会社の課長だ
何度もこのカメラで殺人現場を撮って、犯人逮捕に助力した勇敢な人だよ

‥撮影したのも、その方ですか?

‥そうだよ

殴り書きで書かれた局員の文字は読みづらい。機嫌がよくない証拠だ。

・・・さて、ぶっちゃけて、このビデオにはツッコミどころがあるんだが、今言った方がいいだろうか？

：音声がないですね

：古いやつだから、壊れてて音が拾えないんだとよ

：普通はこのようなカメラではなく、もっとちゃんとした端末があるんじゃないですか？画像も鮮明にできますし、魔力反応とかも見れますし

：そいつはこういうタイプのカメラの方が好きなんだと

こういうのが好き、ねぇ・・・。

だいたい証拠を曖昧にする言葉は好きだとか趣味だとかだ。ま、こんなオンボロカメラを使ってくれたおかげで、無実と言うこともできるんだけどさ。

：変身魔法の可能性は考えなかったのですか？

：それ、あいつも言ったけどよ。原告のガイさんの証言は具体的で、

このビデオとの食い違いはない。犯人の口調も、被告と同じだったって話だ。間違いねぇよ

この発言に異議を言いたかったのかRが乗り出そうとしたが、俺が押さえた。

まだ聞きたいことはある。

‥そのガイさんは襲われなかったのですか?

‥映像をよーく見てみな。最後に襲われそうになってるだろ。死角から撮影していたことに感づかれて、被告が口封じで殺そうとしてきたから逃げたんだよ。

確かに、映像には途中で男がこちらを向いた直後から映像が激しく揺れて、その途中で映像が終わってる。

‥わかるか?もしそれが偽もんだってのなら、逃げる必要がねえだろ。

‥そうですね
最後に1ついいですか?

‥・・・しょうがねえな
なんだ?

：そのガイさん、とても勇敢ですね。殺人現場に遭遇したと言うのにビデオを用意して、しかもこんなにブレずに撮り続けることができたのですから

：何が言いたい？

：私ならまず逃げますよ。僕が襲われるかもしれないのでね。仮に映像を撮るにしても、怖くて手元がブレてしまいますこの人にはそれがないですね僕ならこんなこと、劇の中でしかできませんよ

：お前、なんだ？ガイさんを疑ってんのか？

：そういう予定があって、襲われない確信があるならブレないでしょうね

書いた直後、局員が机を両手で強く叩いた。俺にはその音は聞こえない。局員も無意識なんだろう。

「　　！！！　　！！！」

『帰れ！！お前にこれ以上見せるものなんてねぇよっ！！』

そして興奮で顔を真っ赤にした局員が怒鳴った。

そして追い出された。

：どうするんですか？追い出されてしまったし、結局収穫は０じゃないですか

刑務所を追い出されてからしばらく歩いて、Ｒがそう書いてきた。

俺はその文字を見た後、返事も書かずにまた歩き続ける。

：聞いてますか？いや、読んでますか？

読んでるよ、ちゃんと。

移動した先は、人気がないところ。特に通りもなく、死角である。

さて、ここならよさそうだな・・・。

：あの、本当に父さんを助けてくれるんですよね？

：ええ、依頼は叶えますよ。ただし、本当にお父さんを救い出すのは私ではなくＲさん、あなたです

数十分ぶりの返事に驚き、同時に返事の内容に怪訝そうな顔を浮かべるＲ。

そんなRに、俺は右手を差し出す。手の平が上だ。
手の平の上に、小さな粒がある。

：行きましょう。真実がある場所へ

そう書いて、俺は右手に左手を被せる。
そして意識を手の中に向けた後。左手を離す。
すると、

ズズズッ・・・

粒が大きくなっていき、それ――カメラが、姿を現した。

「　　！？」

『うわあっ！？』

：静かに。私にはいろんな能力（ちから）があります。その能力（ちから）で先程のカメラをビデオごと複製、縮小していたんです

勿論使ったのはコピーと三次減算である。
カメラを見せてもらったのは映像を確認するよりも、このビデオそ

のものの入手のためだ。

：そして私の能力（ちから）でこの映像の中に入ります。そこで真実を見てきます。ここでその様子を見るのでも構いません。寧ろ入った後でカメラが壊れれば命の保障はできません。どうしますか？

ＦＬＡＴでビデオ内に侵入、真実を確認する。これが俺のプランだった。

俺の説明を聞いて、Ｒの表情が変わった。

それは、決意の表情だった。

：行きます。行かせてください！

：わかりました。では、私に掴まってください

俺に言われた通り、俺の肩を掴むＲ。

そしてＦＬＡＴを発動。ベロンと紙のようになった俺とＲは平面世界へと踏み込んだ。

「　　？」

『ここは・・・？』

‥平面世界・・・ビデオで撮られた当時の世界です

目の前では、Rの親父による惨殺が行われている。

「　！　　！」

『おい！やめるんだ！』

止めに行こうとしたRを止める。

‥ここは現実ではありません。止めに行っても無駄ですよ。それどころか、下手すればあなたが死にます
それと、私の後ろを見てください

「　？　　！」

『後ろ？・・・あ！』

やっと気づいたか。

俺の後ろに、あのカメラを構える中年の男がいた。彼がガイ・メー

ラーだろう。

だが、その彼のカメラの構え方は、この場にとっては異常だった。

「　　！　　！」

『三脚！三脚がついてる！』

そう、三脚がついてるのだ。それもしっかりと開いて、地に固定されてある。

これがブレない理由であり、かつこれが作った殺人である大事な証拠だ。

：撮影をお願いします
多少離れた場所から、殺人と撮影者が同時に入るように、写真を

：はい！

Rが携帯していた端末で写真が撮られていく。この世界では時間軸とかも同時のものを指す。それに魔力反応とかも同時の反応が再現されている。

：殺人犯の写真も
変身魔法が使われたという証拠があればいいので、同じ場所から犯人だけを

‥わかりました

さて・・・一体犯人が誰なのかについてはいずれわかるだろう。次行くか。

‥あなたのお父さんが無実である証拠も撮りましょう。自宅への案内をお願いします

親父を解放できる嬉しさで涙を流すRを連れ、道を歩いた。

そして辿り着いたRの自宅で、そこそこ酔っていたRの親父と当時の時間を記した時計を撮影した。

それから数日後。

Rの親父は無罪であることが証明され、無事に解放された。

それと共に、ガイ・メーラーとRの親父になりすまして殺人をした犯人は逮捕された。

ガイ・メーラーは殺人風景のビデオをコレクトするという狂った奴で、今回の撮影もそれが目的だった。彼の押収物から、今回のを含めた殺人の瞬間のビデオのコピーが大量に出てきたそうだ。

犯人がRの親父になりすました理由は、実行犯も課長クラスのやつだったのだが、横領や着服をする最低なやつで正義感の強いRの親父はやめるように強く何度も言っていたらしい。それで邪魔だったから、刑務所にぶち込もうと考えたんだそうだ。

これで冤罪は晴れた。Rの父親は、今新たな仕事を探しているらしい。魔力がないため管理局には入れないが、その正義感はどこにでも役立っていけるというのがR談。

ちなみに報酬は貰ってない。というか、貰うつもりはない。元々理不尽を潰すために立ち上げたこの『大火星王の宴』だ。報酬目的ではない。

だがRもそれでは引き下がらず、なんとかお礼をしようとしてくる。

そこでRの親父・・・もう面倒なので本名を出すが、カルキ・リョウがデバイスマイスターの資格を持っていて、デバイスを開発することができるそうで、その技術を伝授してもらうことにした。つーかカルキさん、デバイスマイスターの資格あるなら、それで管理局員として働いていれば良かったじゃないか。なぜにジョブチェンジしたし。

まあ、そんなこんなで、俺は週に2、3回リョウ家を訪ねてデバイスマイスターとしての勉強をしている。

ガーディアンは防御と援護魔法以外何もできないからな。攻撃ができるデバイスを、デバイスマイスターの資格を取ったら造ろうと思う。コピーをしたらなのは達から強力なデバイスが手に入るけど、オリジナルって憧れるじゃん?

そういうことで、俺は学校とリョウ家、２つの場所で勉強に勤しんでいる。なかなかに退屈しない。

いいね、こういう生活！

あ、ちなみにＲとはリョウ家のこと、Ｒの本名はコール・リョウだ。

## e7．俺の仕事はこんなもん（後書き）

今回を纏めると！！

依頼は冤罪を着せられた父親の救出。

←

才能によって無事に無実の証拠を入手。

←

依頼完了。

なんか、面倒になってきたな・・・。

## e8．転生者、神崎拓也（前書き）

他の転生者の、早い話が過去話です。

てか、そんなことより評価来すぎ！もうお気に入り件数５００超えとか、もう怖くて眠れなくなっちゃう！

# e8．転生者、神崎拓也

―ｓｉｄｅ・拓也―

俺の名前が知りたい？

そうだな。一目惚れしたのに名前も知らないというのはつらいだろうな。教えてあげよう。

俺の名は神崎拓也。転生者だ。

生前の俺については・・・いや、やめておこう。そんな過去よりも、今や未来のことの方がいいだろ？

まあでも、俺の活躍を知りたいと言うのであれば教えようか。

生前の俺は、はっきり言って容姿が地味なオタクだった。

有名な作品はほとんど知ってる。だけど地味だったから、相手にされることはなかった。

けれどあの時、あの真っ白な世界に来た時、俺の運命は変わった。

「申し訳ありませんっ！！」

そう言って土下座をする、中年男性。

この空間で、見知らない人から謝られて、すぐに理解した。

転生フラグが来たと！

「わ、私のミスで、あなたを死なせてしまいました！なので責任を取って、転生させたく思いますっ！！」

さらに聞く話だと行きたい場所を選べる上に、俺に何か漫画アニメ何でも１つの力と願いを３つ叶えてくれる！これは使わない手はない！！

「それと、生活に必要なだけの環境、物語に関わることになった場合に必要なだけの力とアイテムを差し上げます！」

「必要なだけの力ってどのくらいですか？」

「それは必要な分としか言えません。ちなみに容姿もランダムです」

チッ、足元見やがって！

だがまあ、特典があるからいいだろう。それなら・・・、

「なら、僕をリリカルなのはの世界に転生させてください！願いはＳＳＳ＋の魔力と、金髪イケメンの容姿、それから・・・・・・ユニゾンデバイス！ユニゾンデバイスをください！あと力は・・・・・・」

これでも物語に関わる分には十分かもしれないが、念には念をだ。
力は万能型がいい。

・・・あった！様々なヒーローの姿になって戦う、仮面の戦士が！

「仮面ライダーディケイドの力をください！勿論全ライダー変身可！！」

「は、はいっ！あ、ユニゾンデバイスの容姿はどうしますか？」

「あぁ・・・・・・遊戯王の『ＴＧ　ワンダー・マジシャン』の姿で！」

他のも捨てがたかったけど、これが雰囲気として一番良さそうだ。

「はい！では転生させます！能力やデバイス等については転生と同時に送らせていただきます！あ、それと同じ世界に他の転生者がいる場合もございますのでご了承ください・・・」

俺だけじゃないのか・・・。

まあいい。もしこれから俺のハーレムを邪魔する愚か者がいれば、潰してしまえばいい。

「では、転生します！！」

「え？あ、うわあああああああっ！？」

落ちることぐらい言え～！！

そんな感じで、俺はリリカルなのはの世界に降り立った。

赤ん坊からのスタートで黒歴史を見たが、ハーレムのためと我慢した。

そして5歳になり、魔法の練習を始めた。

ディケイドに変身もした。神様は変身すると身長も補正されるように設定したらしい。おかげで戦いやすい。ユニゾンデバイスも優秀だ。ちなみに、名前は姿の元ネタの通りに『ワンダー』と名付けた。

原作が始まる前にひとりぼっちだったなのはと触れ合って好感度を上げておいた。今やもう満タンを過ぎてオーバーになってることだろう。

そして原作開始直前に、転生者に気づいた。

そいつは、無印時代にフェイトが暮らすマンションに済んで、フェイトを待ち構えていた。フェイトがその転生者に毒されないようにするため、その転生者のやつの存在を消しといた。瞬殺だった。

そして原作が始まった。

立場的になのは側についた俺は、なのはがフェイトにジュエルシードを奪われるのを全部阻止した。フェイトには少し申し訳ないが、おかげでなのはの好感度は鰻登りだったろう。
海のイベントは俺も見たかったためスルーしたが、それ以外のジュエルシードは全部俺が回収したため確定だろう。

プレシアは原作以上に狂っていて、余計に嫌いになった。俺やなのは達が時の庭園に突入した時には、自ら虚数空間に飛び込んだのかどこにもいなかった。

フェイトがかわいそうだったから、慰めておいた。ニコポ・ナデポは持ってないが、これから撫でていけばフェイトも虜になるだろう。

まあ、最終話はそのままだったため結果オーライだ。

次に半年後のA’s。そのうちぶつかり合うために半年も我慢していたシグナム達と初対面した。

シグナムは原作で見た通りおっぱいがでかかった。シャマルも意外といい感じだ、ヴィータも、ロリがいい。

原作通りに何度もぶつかっていき、クリスマスイブ。闇の書が覚醒した。

予想以上に闇の書の意志・後のリインフォースは強かった。

そしてみんなで協力して防衛プログラムも破壊して、運命の別れ道。
やはりリインフォースは、自らを破壊する道を選んだ。

しかし、奇跡が起きた。

夜天の書のプログラムが、改悪前に戻っていたのだ。

いったい何が起きたのかわからない。リインフォースが旅立つ場所に着くとリインフォースは倒れてて、そこにはやてもやってきて、リインフォースが起き上がった時にはすでにプログラムが治っていたのだ。

本当に奇跡だ。他の転生者が来たとも考えたが、それなら今まで現れないはずがない。だから、奇跡だ。

リインフォースは夜天の書を抱いて、助かったこと、元に戻った喜びで嬉し涙を流していた。そこに俺は優しい言葉をかけてやった。
これで、リインフォースも落ちるだろう。

それから後は管理局で力を発揮し、エリート街道まっしぐら。ただ、エリートの階段を登りすぎて忙しくなったせいでなのは達が寂しい

思いをさせてしまったかと、なのはの負傷を阻止できなかったことは誤算だった。

学校もちゃんと行っているし、アリサやすずかを始めとした学校の女の子達にも平等に優しく接した。おかげて俺は一番の人気者。

しかしみんなに均等に接していったせいか、なのは達が嫉妬してしまったようだ。やれやれ、ハーレムも大変だな。二次創作の主人公達の苦労がよくわかった。

だがそんな学校生活の中で、変なやつがやってきた。

小5の時だ。1人の男が復学してきた。

名前は忌束キリヲ。制服の上にコートを着て、右手にだけ革手袋をはめ、左手には包帯を巻いた、無口なやつだった。

キリヲは空いた席――特に変哲もない席だった――に座った。コートも手袋も着用しっぱなしで、ずっと無言だった。そのせいでクラスの雰囲気も悪くなっていた。

ホームルームが終わってから、俺が先陣切って挨拶した。コートはコート掛けに掛けておくように注意もした。

だけど奴は俺を無視した。

微動だにせず、ただどこでもないどこかを見ているような感じのままだった。もう一度、今度は声を少し大きくして言った。また奴は無視しやがった。

A，s編ぶりに苛立った。ここまで無視されると誰か思うか？思わないだろう！

だがだからと言って復学初日のやつに怒る訳にもいかず、とりあえず肩を揺すってみた。

揺すっていた手を払われた。

キリヲはチラッとこっちを見た後すぐに視線を戻し、ポケットからメモ帳とペンを取り出して何かを書き始めた。

さすがに無視するなと怒るのもよかったが、クラスメイトだったすずかを怖がらせたくなかったため、俺は視界からキリヲを外した。

その間に何があったのか。

ちょっと視線を彼に戻すと、すずかが笑顔でキリヲとメモ帳に何か書きあっていた。自己紹介とか好きな食べ物とか趣味とか。筆談というらしい。

なんだ、障害者か。そう思った瞬間に、俺の怒りもいくらか冷めた。

だが、“いくらか”であって全部冷めた訳ではない。だいたい、耳が聞こえないなら周囲を気にするはずだ。

それに、俺のすずかと仲良くしているのも気に入らない。すずかが優しい性格なのは勿論把握してるが、あいつは絶対に鼻の下を伸ばしている。それが気に食わん。

そして思いついた。
俺を無視し続けた奴(キリヲ)に痛い目に遭わせられる手段を。

普通にやっても、聞こえないから無意味だ。だが、その性質を利用する！

俺はキリヲについて定着するより前に、学校での部下達を使ってキリヲの情報を流した。

忌束キリヲはどんな人の言葉も無視する不良だと。

作戦は成功した。奴が常にコートを着ているのも助力して、その情報はすぐに行き渡った。ついでに流した呼び名――沈黙者(サイレンス)も広まった。

そしたら予想以上に最高だった。サイレンスを見たらすぐに遠巻きにし、後ろから声をかける、メモ帳やペンを壊すといった行動に走るやつも出た程だ。先生達も一部サイレンスの呼び名を使うほどだった。俺には策士の才能もあるようだ。

だがサイレンスもタフだった。どんなことされても気に止めず、仮に奴の命とも言えるメモ帳やペンを壊されても、すぐに替えのものが湧いて出た。

さらに奴は、すずかの何かしらの弱みを持っているらしい。すずか

との筆談もやめなかった。すずかはサイレンスに、俺だけにしか向けないはずの笑顔を向けていた。いや、向けるのを強要させられた。

すずかに、奴に無理しなくていいと何度か言ったが、すずかはキリヲとの筆談が楽しいんだと言う。

ありえない・・・俺のすずかがあんな障害者との音のない会話で笑顔になるなんて、絶対に。

いや、心配しすぎてるようだ。そう、あんな障害者にすずかが虜になることはありえない。必ず俺のところに帰ってくる。信じて待つ、というのも大事だろう。

そうやって、今度はサイレンスを無視するようにした。そうしたらサイレンスを気にすることもなくなり、仲間達もそれを読み取ってか、サイレンスに対する無視で定着していった。

そして、中学。

俺は原作キャラではやて、すずかと一緒のクラスになった。

他の原作キャラ3人はサイレンスと一緒のクラスだった。いつ、どんな手でなのは達に毒するのかわからない。そのクラスにいた部下にサイレンスの監視を命じた。

まあそれよりも、少女達に挨拶だな。まずはクラスメイトから行く

か。

「やあはやて。同じクラスだね。今年もよろしく！」

「あー・・・そやね。それじゃ・・・」

そう返して、はやてはすぐに立ち去っていった。照れてるようだ。かわいいなぁ。

「すずかも、同じクラスだよね。嬉しいよ」

「う、うん・・・」

すずかも俺を避けるように立ち去った。最初にはやてに話しかけたから、拗ねたのかな？確かに任務ではやてと一緒にいることもある分、すずかとはあまり接してないかな。ちょっと調整しよう。

次は、なのは達がいるクラスだ。

「やあなのは。クラスが違っても、俺達はずっと一緒だよ」

「えーと・・・ごめん、ちょっと用事あるから・・・」

俺の言葉が嬉しかったのか・・・照れ隠しで立ち去ってしまったようだ・・・ん、視線・・・？

・・・ああ、アリサか。自分より先になのはが話しかけられて嫉妬

したのかな?

「ああ、アリサ。どうしたんだい?せっかくの綺麗な顔が台無しだよ?」

「・・・別に」

「そんなこと言わずにさ。悩みがあるなら相談に乗るよ」

「しつこいっ!!ほら、行くわよフェイトッ!」

「わわっ、アリサッ・・・」

あー、随分拗ねちゃってるね・・・さすがはツンデレのアリサ。それはそれでかわいいなぁ。

さて、と・・・、

「さっきの大声でも、相変わらずの無口無表情だな。さすがサイレンス」

アリサの右斜め後ろに座り、呑気にラノベを読んでいるサイレンス。どうやら目の前にいるのにも関わらず、シカトを強行するようだ・・・仕方のないやつだ。これだから障害者は。

俺はサイレンスが読んでいるラノベを取り上げる。サイレンスが読んでいたのは、『キ○の旅』だった。

俺にラノベを取り上げられたサイレンスはゆっくりと顔を上げた。

ふん、話を聞かないのが悪いんだ。

そう思ってると、サイレンスは突然俺の肩を掴んできた。
俺もすぐに身構えたけど、それより速くサイレンスは俺を乗り越え・・・・俺を強く踏み、その力で教室の出入り口前まで跳躍、着地後すぐに廊下に出て走っていった。

あの野郎っ・・・俺を踏み台にしやがったな・・・！

最近はなのは、フェイト、アリサの弱みも掴んだらしいし、少し灸を据えないとなっ・・・！

覚えてろよ・・・必ずお前を潰して、なのは達を救出してみせるっ！！

―ｓｉｄｅ・ｏｕｔ―

―ｓｏｕｎｄｏｎｌｙ―

：違うクラスでよかったと思ってたけど、やっぱ来たよアイツ・・・

：教室に入っていきなり声をかけて、あの台詞はないよね

：甘いでアリサちゃん、なのはちゃん

私とすずかちゃんなんてクラスも一緒やもん

‥加えてはやてちゃんの場合は、お仕事でも一緒なんだよね？

‥そーなんよー
「はやては後衛型なんだから、前衛はこの俺に任せてくれ」ってシグナム達をなめとんのかとイラッときたわー

‥まあ、拓也は力は本物だから・・・
最近、色々地位も上がってきてるし・・・

‥校内でも調子に乗り始めたし・・・
そろそろ、ガツンと言っといた方がいいかしらね

‥逆にアリサちゃんが色々危なくなる気がしてならないの

‥私もなのはに同感

‥自分で言ってて、それが自爆特攻だって自分でもわかったわ・・・
でも、どうにかしないといけないのは事実じゃない？

‥それは言えとるなぁ
何かいい案ないかな？私達、無駄に拓也君のことよう知っとるけど・・・

‥それ、拓也君の前で言ったら危険だからね？

‥「俺のこと、そんなに知ってくれているんだね。嬉しいなぁ。俺のことを本当に好きでいてくれているんだね☆」

：・・・どう思う？

：ごめんすずかちゃん。リアルに言ってきそうで怖かった

：私も・・・

：あたしも・・・

：一旦紙を捨てて、気持ち切り替えよか

ビリビリ

：さて、別の話題にしよか。できればあまり想像できないもんがえ
えなぁ

：想像できないったらキリヲじゃない？
アイツのこと、すずか以外はサッパリだし

：すずかって、キリヲのことどのくらい知ってるの？というか、す

ずかってなんでキリヲに詳しいの？

‥5年生と6年生の時一緒のクラスだったからね。互いに好きなものとか趣味とか、好きな本とか色々話し合っていたよ。あの時は拓也君達からキリヲ君を庇いながらの生活だったから大変だったな・・・

‥うわ、始まった。すずかちゃんの惚気話

‥惚気てないよ!?

‥どうだかなぁ

‥ところで、キリヲ君って5年生から復学したんだよね？最初の頃はどうだったの？

‥ああ、それあたしも聞きたかった。やっぱ筆談でも言葉遣いとか変わったりしたの？

‥うん。昔と比べると随分変わったよ
最初の頃は、ホントに周りに壁を作り気味で、言葉も固かったり荒かったりで、いじめもすぐに始まったから字ももっと荒んで・・・落ち着いた感じになったのは、今年の始めぐらいからかな

‥ほとんど最近やん

‥キリヲ君がいじめられる直前の文字はまだましで、だからかな。キリヲ君の心を表す文字を、もっと綺麗なものにしてあげたいなって思って
あと、純粋に筆談にハマっちゃって

：確かにいいよね。この筆談

：そうだね。紙とペンがあれば図書館でも気軽にできるし

：何より書く音だけやから、無駄に地獄耳な拓也君でもわからんなぁ

：だね。結構本音も言えるし

：ブームにできへんかな？

：それはやめた方がいいんじゃないかな？
ブームって、冷めたら飽きてやらなくなるし、酷い場合には時代遅れだっていじめになることもありえるよ

：あー、わかる気がする
流行語とかって、入賞した次の年は全然使わなくなっちゃうよね

：うん、なのはの言ってることと同じだよ
だからブームに乗せるんじゃなくって、あくまで会話の手段としてわかっておく。それがいいんじゃないかな

：オッケ
そういえばさ、キリヲの声って出せたとしたらどんな感じなんだろ？

：考えたことなかったなぁ。そやな・・・これこそイケメン男子の声優のような声やないか？

：あー、わかりそうな気がする。媚びすぎない美形だから、声もいい感じっぽそうだよね

：でもいつもコートに右手だけの手袋はめてるし、ちょっとドスの効いた低い声音もありかも

：あー、すずかの意見もわかるわー

：えっと、台詞の再現試してみるわ
「チッ・・・なめんなよクズ共っ・・・」
・・・どう思う？

：結構いい感じじゃないかな？
でもキリヲが普段書いてる口調には似合わないかも

：あー、そっかー・・・

：わからないものを想像するって楽しいね～

：うん

「・・・おっ、こんなところにいたのか。何の話だい？」

：やば！拓也君来た！

：はやてちゃん！書いてる場合じゃないよ！

：すずかもでしょ！ってそう書いてるあたしもね！

「隠す必要はないじゃないか。それとも、話題の本人が来たから恥ずかしいのかい？」

「そんな訳ないでしょ！」

「だったら見せてくれよ～」

「こっち来んなぁぁ！！」

「プライバシーを勝手に覗こうとするのは、どう考えてもないと思うの」

「それ、私も同感するよ・・・」

―ｓｏｕｎｄ・ｏｕｔ―

―おまけ―

ちなみに、

「ぐはぁっ！」

「ぐべぅっ！！」

「ひ、ひぃぃっ！」

バタバタ・・・

「え、あ、あの・・・その・・・ありがとうございます・・・」

「・・・・・・・・・」

キリヲは昼休みに、理不尽矯正をしていた。

ちなみに救出したのは、１年の男子生徒だった。

―おまけ・ｅｎｄ―

## e8．転生者、神崎拓也（後書き）

今回を纏めると！！

神崎拓也の話です。ナルシストでウザス。

こんなもん。

## 神崎拓也　設定

氏名
神崎拓也

年齢
１３歳

所属・学年
私立聖祥大附属中学校第１学年

出席番号
７番

血液型
Ａ型

身長体重
１６７ｃｍ　５８ｋｇ

部活動
帰宅部

特技
変身（ディケイド）

得意科目
数学、英語、美術

苦手科目
国語、理科

好きなもの
女性（特にリリカルなのはのキャラ、グラマー）、正義、女子の手料理

嫌いなもの
悪、バッドエンド、気にくわないやつ、他の転生者、忌束キリヲ、辛いもの

備考
・時空管理局での現階級は一等空尉。
・デバイスの他にディケイドライバーと融合騎を所有

神の失敗によって一度死んだ転生者。神崎拓也は転生後に設定した名前。
神から希望する力で万能型という理由でディケイドの力を、３つの願いで金髪のイケメンという容姿、ＳＳＳ＋の魔力、『ＴＧ　ワンダー・マジシャン』の姿をしたユニゾンデバイスを手に入れる。
性格はナルシストの一言で言い表される。原作介入もほぼ完全に自分のハーレム人生を送るという目的のため。女性に次々とフラグを乱立させていると思っているが、そのナルシストぶりにかなりの人数が引いているということを本人は知らない。
自分のグッドエンドのためならなんでもする。特に自分以外の転生者は、まだ転生者だとは知らないキリヲを除けば会った者は一通り抹殺、もしくは暗殺している。
原作に介入してはいるが、拓也自身は大した原作の変化に繋がって

いない。キリヲが影で介入、変化を及ぼしているが気づかず（当事者を除く全員が気づいていない）、特にリインフォースが助かったのは自分のおかげだと思い込んでいる。
キリヲについては、無視された（キリヲが聞き取ることが不可能だっただけ）のをきっかけに、なのは達の弱みを握っているなどの言いがかりをつけて目の敵にしている。『サイレンス』と呼んだりするなどの嫌がらせを今でも続けている。
校内では、数十人の男女でできている『チーム神崎』のリーダー。チームメンバーの主なやることは拓也の手伝いや女子へのアプローチ（男子）、キリヲへの嫌がらせなど、ぶっちゃけ迷惑集団。生徒会や先生方も頭を悩ませている。
魔法陣はミッド式で、魔力光は蛍光塗料のような赤。見てると気持ち悪くなるとは、こっそり聞いたなのは談。
Ａ’ｓ後に正式に管理局入りして次々と階級を登り詰めている。登りすぎて忙しすぎているのが最近の悩みらしい。
魔力リミッターがかけられていて、現在の魔力はそれでもＡＡＡ＋。

その他設定

・グルナード

レイピア型のインテリジェントデバイス。刀身は魔力でできている。魔力によってリーチを伸ばすことが可能。最大限のリーチは約１０ｍ。
見た目としては、遊戯王における『ライトロード・レイピア』が形としてしっくりくる。鞘はない。

レイピアの性質上、突く攻撃、魔法に長けている。
待機状態は金色のコインをあしらったブレスレット。
バリアジャケットは聖騎士をモチーフにした純白の鎧。魔力光とあまり似合ってない。
カートリッジシステムはついている。

・ディケイドライバー

大体性質は同じ。しかしW以降のライダーにも変身できる。

・ワンダー

ユニゾンデバイス。防護服を纏った姿は『TG　ワンダー・マジシャン』そのもの。
リインのように小人サイズになれるが、通常のサイズでずっと過ごしている。通常のサイズはヴィータと同じぐらい。防護服のとんがり帽子のおかげでヴィータより背が大きくみえる。
ユニゾンデバイスの定義を崩すことはなく魔法陣はベルカ式。魔力光は、元ネタの方ではチューナーだったのを意識してか、緑色。

## e9．常連の場所に誘われるって、ぶっちゃけどうよ？（前書き）

グダグダです。何を書きたかったのやら。

## e9．常連の場所に誘われるって、ぶっちゃけどうよ？

今日も退屈のみの授業は寝て終了・・・に、ならずなのはに殴り起こされ。（誤字にあらず）

やっとの思いで放課後。今日は夢日記の記述もない。なら帰るのみ。

ホームルームが終わる。

バッグにものを詰める。所要時間１０秒。
立ち上がる。所要時間０．５秒未満。
右向け右。所要時間０．５秒未満。

走り出す。

後ろから腕を掴まれる。

走るベクトルはそのまま。引く力でバランスを崩す。

机の角に後頭部直撃。←今ここ

‥ちょっと待ちなさい

俺の腕を掴んだのはアリサ。

俺が後頭部強打したことに表情を１つも変えないとか、図太すぎる。

というか最近、原作キャラに絡まれるのが多い気がするのは俺だけか？

‥殺す気か

‥そんなダッシュで教室出ようとしたアンタが悪いのよ

‥早く帰ることに罪はない

‥早く帰ることを決断したアンタが悪い

その発想はなかった。
だが解せぬ。

‥で、何の用だ

‥アンタ、甘いもの好きでしょ？帰りに寄り道して喫茶店に寄るんだけど、アンタも来る？

‥茶店？

凄く予想ができるんだが。

‥喫茶“翠屋”。あそこのケーキおいしいのよ？

ドンピシャだった。

というかこいつら、翠屋以外のケーキ屋に行くのか？

しかも翠屋っつったら、俺常連だし・・・。

：常連である店に招待されてもさほど嬉しくないんだが

：ちょっと、初耳よそれ！

：キリヲ君常連なの！？

言ってないからな。あと、いきなり割り込むななのはは。

：でも、今まで翠屋で会ったことなんてないよ！？

：偶々じゃない？

嘘です、意図的です。

正確には原作キャラ自体避けているんだが。

：じゃあ一緒に行こう！すずかちゃんとはやてちゃんを誘っておくね

‥まあいいけど

こういうのがきっかけでリインフォースと遭遇するのが怖い。

鬱ＥＮＤ臭のする別れ方だったからな・・・。まあ、ドクロのことがバレなければ、ごまかしは効くはずだ。

そして翠屋にやってきた。見慣れた場所だ。

メンバーは原作女子５人勢揃い。神崎は管理局の仕事でいないらしい。ざまぁ。

店の前で長々と棒立ちすることもなく、なのはから入店、俺は最後尾。

お邪魔しまーす。

「　　！　　！

？　　！」

『いらっしゃいませ・・・あ、なのは！みんなも・・・キリヲ君！？いらっしゃ～い！』

出てきたのは美由紀さんだった。

俺の名を言ったことに、なのは達は微妙な顔をして何か言っている。

美由紀も何か返しているが、美由紀サイドだけだと文字通りに話が見えない。

あ、美由紀さんが紙寄越してきた

：注文はいつも通り？

：それで頼みます

さて、席に座るか。

いつも頼んでいるのはシュークリームとコーヒー。どちらもとてもうまい。さらにシュークリームについてはよくお持ち帰りもする。

：ホントに意外ね。アンタがここの常連だったなんて

：ホントだよー。店で会ったこと一度もないし。お父さんもお母さんも・・・というか、家族全員と仲良くなってるし

：悪いか

：そういう訳じゃないと思うけど・・・でも私も驚いたな。私にも今まで教えてくれなかったから

：教える教えないは人それぞれだろ

士郎さん達と仲良くなったのは、俺が筆談を使うようになってからだ

今では店に来る度に話し相手になってくれている。今回はなのは達がいる分、十分足りてるだろうと見てこっちに来ないが。

：ところで、キリヲ君は学校終わったら普段何してるん？いつもここに来てるの？

：いや、翠屋に来るのは週に1、2回ぐらいだ。それ以外の日はすぐに家に帰ってラノベを読んだりオカルトの検証をしたり。あとは図書館に寄ったり病院に寄ったり。これらのいずれかだな

：ツッコんでおきたいことがいくらか出てきたから、順番にまず1つめね。オカルト検証ってどういうことよ

：まんまの意味だ。オカルトサイトを運営してな。あといわく付きの物もだいぶ持っている。呪いの人形、死を呼ぶ水晶玉、呪われた人骨、あとは

：いい！それ以上はいいから！！

例を上げている途中でなのはの書き込みに割り込まれた。

まだまだあるのに・・・死霊の首飾りとか、不吉を呼ぶ指輪、あとは呪いの御札とか。さがせばもう数十は出てくるぞ。

‥必死だねなのは・・・そう書いてる私もちょっと怖いけど・・・

‥ちょっとで済むんだ・・・キリヲ君、怪談にも詳しいんだよ。狂気の電話の話を聞いた日には携帯を見るのも怖かった・・・

‥すずかちゃん、ええから。無理に言わんくてもええからな

‥一応書いとくが、不幸に導くものしかない訳ではないからな。例えば藁人形は人を呪い殺す道具だって言われるけど、本来は願いを叶える道具だって説もあるからな。

‥意外だけど使いたくない知識をありがとで、もう1つ、話に出てきた病院って？

‥アリサには言ったよな？俺がコートを着てるのは怪我を隠すためだって

‥ええ。右手の手袋もそうなんでしょ？

‥ああ。で、この傷は何年も前のものだけど、まだ出血することがあるから、たまに診てもらってるってこと。

才能の関係上、古傷の出血が止まることはないとわかってはいるが、おかげで何枚服が犠牲になっていることか・・・。

エニグマ原作のタケマルとは違って手足にもでかい古傷があるからな・・・動きは鈍いわ、出血はするわで堪ったもんじゃねぇ・・・。

：大丈夫なの？痛かったりしない？

：というより、なんでそんな怪我を負ったのよ？

：心配する気持ちはありがとよフェイト
そんでアリサの質問だが、小さい頃に暴力団だった、血縁上の親父からの虐待のせいさ。だがあんなイカレゲスを俺は親父だとは言わんと2人ぐらしだ

：虐待！？どうしてそんな酷いこと・・・！

：その腐れ野郎はもうとっくに事故死してる。今は優しいおふくろ

：それで・・・怪我ってどんな感じなの？

：いや、見ない方がいい
お前らが見て、何かできるようなものじゃないから

：確かに、キリヲ君の痛みを全部わかることはきっとできないでも、それでも。キリヲ君が、1人で背負う必要もないんじゃないかな

なのはのその言葉に、少しだけ迷った。

理不尽は俺が破壊する。そしてその理不尽は俺が背負い、犠牲になる。それが、エニグマになった時から持ち続ける信念だ。

だけど、誰かに支えてほしいと思わなかった訳ではない。俺も、心のどこかで助けを求めてきたかもしれない。

だけど――――、

‥悪い、見せたくない
同情されるのは、俺にとって一番嫌いなんだ

俺はその受け入れを拒否する。

同情ではないとはわかってる。特にフェイト辺りは、自分の経験から一番わかってくれるはず。

カッコ悪いところを彼女達に見せたくない。
俺の理不尽を、不幸を背負わせてしまうのが怖い。

・・・そういうのがあったのかもしれない。

‥同情って
大丈夫だよ。そんな目で見たりはしないから

‥いや、ごめんねキリヲ君

‥なのは？

‥無理に見せてもらうのは良くないよ
つらい話だって、本人が話したい時に話してもらった方が、気持ち的にはスッキリするし

話したい時に、ね・・・

いつか来るのかな。この古傷のつらさも、才能のことも、怪物（エニグマ）になってしまった話も、全部打ち明けられる日が。

‥そうだね・・・
ごめんねキリヲ

‥気にしなくていい
この古傷はもう俺の一部みたいなものだからな

‥はいはい
気分が落ちるこの話題もうやめましょ
長々と話しても飽きてくるし！

アリサの言葉でこの場の雰囲気が少し払拭された。

アリサもなんだかんだで、俺のことを思ってくれている。書いたら殴られそうだけど。

だけど少し嬉しい。

‥そやな、暗い話よりも明るい話や！
キリヲ君の話をたくさん聞かせてもらったから、次は私達の話をするな

それから、なのは達の話・・・互いの出会いや仲良くなったきっかけを（当然、魔法の話は伏せていた）話してもらった。

一通り話したら結構な時間になったので、そこで解散とした。

特に忘れ物をした訳ではないけど・・・なんか忘れたような気がする・・・。

家に帰ると、おふくろが出迎えてくれた。
まだ仕事には行ってなかったらしい。

：お帰りキリヲ。今日は翠屋に行ってきたの？

：ああ。ただいま

ちなみにおふくろの仕事とはキャバクラだ。売り上げの首位を独占しているらしい。

・・・最初に知った時、アンタはスミオのおふくろかと内心でツッコんだのは内緒だ。

：それにしては意外と遅かったわね。いつもは食べて買ってで終わ

りじゃない？

：友達・・・と言っていいのかな。その人達と会話をしてた

：へぇ～
その人達って、男の子？女の子？

：全員女

：あらあら
キリヲも隅に置けないわね

何先走ってんだ。

・・・ん？翠屋では食って買って終わり？

：・・・今思い出した

：どうしたの？

なんか物足りないと思ってたが、どうやら会話を楽しみすぎて忘れてたらしい

：お持ち帰りのシュークリーム買うの忘れてた・・・

## e9．常連の場所に誘われるって、ぶっちゃけどうよ？（後書き）

今回を纏めると！！

翠屋の常連であることがバレました。

←

ついでにキリヲの過去が少しなのは達に知られました。

こんなん、かなぁ。

ぶっちゃけ、これ飽きてきた。

## ｅ１０．バレるの早っ！？

今日の夢日記。

４がつ２３にち

ひったくりがうしろからはしってきました。

ひったくりはないふをもってぼくをきりました。

すごくいたかったです。

予言はもう終わった。

登校中、バッグを奪ったひったくりが後ろから走ってきた。

予知で気づいていたため、ナイフで襲いかかってきたのを避け、適当に蹴って投げ飛ばす。

そして奴がひったくった物を奪い取り、被害者に渡した。聖祥中の女子生徒だったが、その辺は別にどうでもよかった。

そういや今日、おふくろは昼から色々あっていないんだっけ・・・
晩飯も自分でなんとかしなくちゃなんないし、何作っかな・・・。

今日はよく動く日だった。

朝のひったくりの一件に加え、午前から体育があった。

先生方は古傷のことは知っているが、だからと言って体育を全面的に休むことはできない。無理しない程度に抑えながらやった。

昼休みに弁当を食べ終えると今日の夢日記のもう1つの記述、男子生徒のカツアゲを阻止した。

そして、昼休みも終えた午後の授業の時だった。

―ｓｉｄｅ・なのは―

午後のキリヲ君は少し様子が変だった。

授業が始まったのに授業道具を取り出そうとせず、席に座ったまま

ピクリとも動こうとしなかった。

‥キリヲ君、もう授業始まってるよ

そう書いた紙を、先生にバレないようにこっそりキリヲ君の机の上に置く。授業中にキリヲ君と筆談するのは、たまに・・・結構やってる。少し自重しないと・・・。

って・・・あれ?

キリヲ君が全然反応しない・・・寝てるのかな?普段なら机に突っ伏すからすぐ寝てるとわかるのに・・・・・・コートのフードを被っているから表情が見えない。

こういう時、辞書で叩き起こすけど、その前に必ず一度揺する。揺すって起きる可能性があるし(起きたことないけど)、確認もなしに叩くのは危ないし、失礼だから。寝てるキリヲ君が悪いんだけど。

肩を軽く揺すってみる。

キリヲ君の身体が左右に揺れる。けどそれだけ。寝てるみたい・・・退屈だからって、ちゃんと授業は受けないとだめだよ・・・・・・そう思って、いつものようにバッグから国語辞典を取り出そうとした時、

ガタガタ、ガタンッ!

机や椅子の鉄パイプ同士がぶつかったり、椅子の脚と床がこすれあう音がして、それが一瞬大きな音になった。

いきなりの音に慌てて音源を見る。音源は自分のすぐ横・・・キリヲ君がいた場所。

そこでは机が少しずれ、椅子・・・そして、キリヲ君が横になって倒れていた。

「キ、キリヲ君!?」

今までにないことに、私は驚いて席から離れて、キリヲ君のそばに寄った。

フードを取ってみるとキリヲ君は苦しそうに、細かい息をしていた。そしてよく見てみると、キリヲ君の身体のどこかから、酷い出血をしているのが見えた。

「ちょ、ちょっとキリヲ!?なんでこんな出血してるのよ!?」

続いて事態に気づいたアリサちゃんも近寄ってくる。

虐待の傷から、今も血が出てくるって話は前に聞いたけど、この出血は想像できていなかった・・・。

その後、キリヲ君は先生と保険委員の子によって保健室に運ばれた。

授業が終わってからキリヲ君が運ばれるのを見たすずかちゃんがやってきて、その時に聞いたけど、2年前にも同じようなことがあったみたい。

キリヲ君、大丈夫かな・・・放課後見舞いに行こう。

放課後、私とフェイトちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん、はやてちゃんは保健室に立ち寄った。
唯一はやてちゃんはあまり事を知らなかったけど、慌てたようすで道具をまとめるすずかちゃんの様子が気になってついてきたらしい。
今は事情を説明している。

一応すずかちゃんに聞いてみたけど、キリヲ君の傷がどのようなものなのかはすずかちゃんにもわからないらしい。

保健室の扉を開け、私から入ってみる。
保健室には先生と、そしてベッドの上にキリヲ君が、いた。

キリヲ君を見た瞬間、言葉が出なかった。
キリヲ君は頭以外の全身に隈無く包帯が巻かれていた。冗談とかギャグなんてふざけたことじゃない。本当に服を着たミイラのような状態だった。
そんな状態のキリヲ君が、静かに寝息を立てている。

「あの、先生・・・キリヲ君の様子は・・・」

私達のほとんどが息を呑んだ中、すずかちゃんが先生に尋ねた。

「色々動いて、背中の古傷から出血したみたいね。他も少し出血してたみたいだから、全身に巻いちゃったけど。安静にするのが一番

ね」

先生はそう答えた。

その時、キリヲ君がムクリと起き上がった。目が覚めたみたい。

「あ、キリヲ君、目が覚めたの？」

すずかちゃんがキリヲ君のそばに寄る。

キリヲ君は私達を見た後、首を動かして辺りを見回した。

一通り見回した後、キリヲ君はベッドから立ち上がろうと動き出した。

：だめだよ、動いちゃ

安静にしてて

：気にしなくていい

すずかちゃんの説得を無視して、キリヲ君は立とうとする。

：安静にしてなさい

アンタ自分の状態がわからないの？

：自分のことは自分でわかってる

だからどけ

私達が全員でキリヲ君を抑えようとするけど、キリヲ君は無理して動こうとする。説得の文は、敢えて見ないほど。

だけど次の瞬間、キリヲ君はビクリと反射したかのように表情を歪め、背中に手を回した。一瞬だったけど、見逃すことはなかった。

そこに先生が紙をキリヲ君に見せた。

‥ほら、無理しないの

‥よくあることだ
だからもう関わるな

‥意識が朦朧とした中運ばれてきたというのに・・・

「月村さん」

「え、はい？」

キリヲ君の回答に肩をすくめた先生は、次に私達、というよりすずかちゃんに声をかけた。

「聖祥小学校の保健乗務員から聞いたんですけど、以前同様のことがあった時、月村さんが送っていったと聞いたんですけど」

「はい、一度・・・」

「よかったら、また頼まれてくれないかしら?忌束君のご家族は仕事で夜遅くまで帰ってこれないそうで・・・」

「はい、わかりました」

「あ、それならあたしも手伝っていいですか?」

「そう?ならお願いね」

「なら、私も・・・」

アリサに続こうと私も手を上げようとした。
けれどその手は途中で降りることになった。

「なのは達は、帰って“用事”があるんでしょ」

「用事?・・・あっ」

アリサちゃんに小声で言われて、少し間を置いて思い出す。今日、夕方から管理局としての任務があるんだ・・・。
小声なのに用事なんていう遠回しな言い方をしたのは、キリヲ君の読唇術があるからだということも理解した。

「大丈夫よ。すずかは一度送ったことがあるみたいだし」

「うん・・・ごめんね」

一言謝って、私とフェイトちゃん、はやてちゃんは先に出ることにした。

キリヲ君、こういう痛い思いは何も言わずに抱え込んじゃうんだね・・・なら、お隣としてできるだけ気づいてあげないと・・・。

―ｓｉｄｅ・ｏｕｔ―

―ｓｉｄｅ・アリサ―

リムジンに乗った後眠りこけたキリヲを起こさないように、両肩をすずかと担いで家に運ぶ。

そういえば、ご家族・・・というか、お父さんが暴力団でもう亡くなってるって話を聞いたからお母さんか。仕事でいないのよね。それってつまり・・・。

ガチャガチャ・・・

・・・やっぱり。

鍵・・・どうすんのよ・・・。

というかすずか、アンタコイツのコートのポケット探って何してんの？まさかそこに鍵なんてことは・・・。

「あ、あったあった」

・・・あるのね。

適当に探ったのか、知ってるのかはわからないけど、知っていたんだったらある意味怖い気がする。

とりあえずその鍵で家に入る。コイツの部屋は2階らしい。なんとか上に上がっていく。

で、部屋に入ったんだけど・・・。

そこは、おどろおどろしい空間だった。

部屋全体が薄暗く、人骨模型が置かれたり棚の1つの段には所狭しと人形とかわら人形が並べられている。他の段には説明するのも億劫になりそうな不気味な物体が多数。

他にも怪談や心霊現象、都市伝説とかがかかれた本とかもあった。

「アリサちゃん、ベッドはこっちだよ」

すずか、アンタはこの部屋に抵抗とか感じないの？

「気にするからいけないんだよ。気にしない内に、早く」

正論かもしれないけど、気にするなと言う方が無理があるわ。

とりあえず、キリヲをベッドに寝かせて（ベッドもオカルトに改造されていた）、疲れた私達もその場で休憩。

・・・そういえば、コイツのお母さんは夜遅くまで帰ってこれないのよね。

だったら・・・仕方ないわね。無理させて傷を開かせる訳にはいか

ないし、私達でキリヲの夕飯を作る他はないみたいね。後で家に連絡しなきゃ。

・・・でもその前に、この部屋、どこまでオカルトに染まってるのよ。見てるだけでこっちが呪われそう・・・。

・・・・・・ん？

あのもの入れ、扉が開いてる・・・なんか入ってるのかな？せっかく来たんだし、もう来ないかもしれないから（というか、もうこんな部屋に来たくない）、どんなものがあるのかぐらい見ても・・・いいわよね？

近づいて、もの入れの扉を開けてみる。

「・・・木箱？」

そこには、木箱が入っていた。
木箱を取り出してみる。重さ的に、これの中になんか入っていそうな感じ。

「ちょ、アリサちゃん？だめだよ。この部屋に置いてある呪いの品って、検証中のものだってあるんだからね」

「ちょっ、怖いこと言わないでよ！わかったわよ、今元に戻・・・あっ」

いきなりのすずかの声に驚きつつ戻そうとした時、手を滑らせて、その箱を落としてしまった。
その拍子に木箱の蓋が外れ、中身が飛び出した。

出てきたのは、ドクロだった。

下顎の骨が入れ替わって、頭の上部がバッカリ開いた気味の悪いドクロ。その辺にあったドクロの小物とかアクセサリーとかではなくって、私達の頭と同じぐらいの、本物のようにリアルなドクロが転がってきた。

ドクロの、目の部分が、私達の視線とかち合った・・・気がする。

私はすずかを見た。あ、すずかもこっち見てた。

もう一度ドクロを見る。

もう一度すずかと見つめ合う。言いたいことはわかるよね？じゃ、言うわよ？

せーの、

「「ギャーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッッ！！！？？」」

思いっきり叫んだけど、当然と言うべきかキリヲは寝たままだった。

ある意味、キリヲが耳が聞こえなくって助かった。

―side・out―

## e10．バレるの早っ！？（後書き）

今回を纏めると！！

動きすぎでキリヲの古傷が悪化。
←
すずかとアリサに家に送ってもらうことに。
←
キリヲの部屋でアリサがドクロを発見。
←
大絶叫。

久々にわかりやすく書けたと思う。

最後のは一応伏線のつもり。使われるのはいつになることやら。

## e11. 人が喰われた話（前書き）

今回からシリアス。

ストックとしてはこの長編は完結してるけど、クオリティが低い・・・。

その辺に注意して、どうぞ。

## ｅ１１．人が喰われた話

４がつ２４にち

ぼくのしっているかみのながいおんながくろいふくろにいれられてすてられました。

はんにんのかみのながいおとこはたべながらぼくのものをさがしています。

かくさなきゃ！

俺が倒れた翌日、起きたら夢日記にこんな予知が記されていた。

・・・訳がわからん。

ひらがなで読みづらい上に明確な人物名が書かれることが少ない夢日記とは言え、ここまでよくわからない内容だとさっぱりだ。

わかることと言えば・・・、

俺の知っている女性の身に何かが起きること。

犯人はロン毛の男で、俺が持っている何かを狙っていること。

そんぐらい。

俺の知っている髪の長い女性っつったって、範囲が大きすぎる。聖祥で髪の長い女子生徒なんて結構な人数がそうなので特定は難しい。俺のおふくろもそうだが、事前にこの予知のことはもう伝えてある。まあ、おふくろが被害者で、これで阻止に成功したのであればそれが一番なんだがな・・・。

それに、俺の持つ何かって、なんだ?

うーん・・・何か忘れてる気がする・・・。

・・・おっと、早く登校しないと。

そうして現在昼休み。アリサが朝からなぜかぐったりと、かなり眠そうにしていた。

‥どうした?

‥アンタのせいよ

とんだ言いがかりだな!?

読む話によると、昨日の夜寝る時に俺の部屋のオカルトグッズが頭

に浮かんで眠れなかったらしい。

‥それでアリサちゃんとすずかちゃん、すごく眠そうにしていたんだね

‥そういやすずかも眠そうだったな。そしてなのは、またいきなり割り込みやがったな

‥気にしたら負けなの

お前からその台詞が出てくるとは思わなかった。

‥どうしてあんなもの集めてんのよ

‥俺が集めてるんじゃない。おふくろが俺の口や耳をなんとかしようと集め出したんだ

‥どういう発想なの!?

そういう発想、としか言いようがない。
おふくろ、地味に考え方がずれている。普通に考えても治療法とかだろ。俺の場合は無理だけど。

‥で、アリサちゃん、どんなものがあったの?

：色々あったけど、最後に見たドクロがヤバかったわ・・・

・・・ドクロ？

いやいや、ないない。うん、大丈夫だ。あれは、ちゃんと木箱に入れてもの入れの中に保管していたし・・・

：ちょっと扉が開いたもの入れに興味を持って探ってみたら出てきたのよ。木箱に入ってて、顎の骨が入れ替わってたから不気味だったわ

やっぱそれかいっ！！！

つーか！！

：お前何勝手に人の部屋漁ってんの！？

：そんなに漁ってないわよ！大体、微妙に扉を開けっ放しにしたアンタが悪いんじゃない！！

：言いがかりもいい加減にしろや！

筆談がデッドヒート。おかげで右手の傷が痛んじまった。

そのうち、アリサにシャーペンをノックするときに誤ってシャーペンの上下が逆のまま押してしまう呪いを見つけてかけてやると俺は心の中で誓った。

時は過ぎて、放課後。

いつものように玄関までダッシュ・・・は、怪我のせいでそこまで走れず、早歩きになった。
そのまま靴を履き、学校を出る。

昨日はすずかに家に送られてそのまま寝ちまったからな・・・今日病院に寄るか・・・あと、薬も貰った方がいいかな・・・。

薬とは、幼少期のあの虐待の映像がフラッシュバックしてくるのを防ぐための薬だ。今でもあの記憶で飛び起きることがあり、2年前も傷の出血で気絶した俺を介抱しようと、すずかが出血箇所を見ようとした時にフラッシュバックで飛び起き、すずかに襲いかかろうとしたほどだ・・・。

この記憶と傷は消えない。もし消せるとしても、それは俺の理不尽への復讐の誓いも消すに等しい。だから消したくもない。
だから薬でフラッシュバックを防ぐようにしてるんだが・・・最近フラッシュバックが起きることも少なくなってきたな。先生にそのことも言ってみるか？

そう思いながらも次の曲がり角を曲がった、その瞬間。

それが、俺が今までの日常と決別するきっかけになった。

目の前に立つ、1人の長髪の男。

その男の腹にはガラスケースが埋め込まれていて、中には――、

人の形をした、パイが1つ入っていた。

サイレント化のせいもあって、驚きの声は出ない。

だが俺は、その存在に驚愕し、畏怖してしまった。

俺は――この存在を知っている。

「

!」

『忌束キリヲ・・・お前にドクロは相応しくない・・・・・・ドク

ロをよこせっ・・・！』

人喰い――――カニバル！！

すぐに、走り出した。

全身の傷の痛みなどどうでもいいっ・・・早く、安全な場所へっ・・・！

俺は、適当に開きそうな扉を探し、その扉に手をかける。

すぐにその扉を開け、扉の先へと踊り込んだ。

扉は民家の玄関だったが、飛び込んだ先は民家ではない。

俺が魔法の練習や力の制御などで何度も使用してきた世界――模写（コピー）世界（ワールド）だ。

・・・この世界に来れば安全だ。今この世界は俺以外の人の侵入は許可していない。

座り込む。安全だとわかっているのに、恐怖で身体が震える。俺が

抑えようとしても、震えは酷くなる。

でも・・・なんでだ？なんで、カニバルがこの世界にいる？

カニバルとは漫画エニグマにおける存在で、自身の頭がエニグマの証明のドクロとして使われ、その後エニグマの力によって復活させられた咬田シメイのはず・・・俺が所持するドクロが仮に奴の頭だとしても、この世界に来ている理由にはならない。これは、神がこっちに送ったものなんだから。

それにあいつ、ガラスケースの腹の中に・・・・・・パイを入れてなかったか？

パイ・・・カニバルは人を喰らう時、捕喰対象の人の骨髄を抜き取ってパイにし、それを喰らう。そうしてその人の姿と能力を得る。

つまり・・・あいつに捕喰された被害者がどこかにいる・・・！

それはまずいっ・・・捕喰された被害者は骨髄を抜き取られているから長く生命維持ができない。それに、カニバルの腹に入ったパイは時間をかけて消化されていく・・・！消化されたら、そいつは元に戻らないっ！

模写世界を出て、被害者を探す必要がある・・・・・・ここに入った場所から離れた地点に繋げて、そこに出れば、すぐに襲われることはないはず・・・。

有言実行しかない・・・！

再び扉に手をかける。扉をくぐると、入った時とは全く別の場所に出た。

・・・有言実行って言っても、どこ探しゃあいいんだよ・・・。

早速難題にぶつかった。被害者の居場所がわからない。

くそっ、どうすりゃいいんだ・・・！グダグダしている暇なんてないぞ・・・！

・・・・・・っ！予知！

運がよかった・・・！予知が起きる・・・起きたまま記述し、未来の動きを予知する夢日記だ！

すぐに日記帳を取り出す。左手が勝手に動き、記述されていく。

４がつ２４にち

ごみすてばでかにばるにたべられたひとをみつけました。

記されたのは、ゴミ捨て場と黒い物体、そして俺と思しき人の絵。

なるほど・・・ここに被害者が・・・・・・！？

何かが日記の中に入ってきた・・・！？人・・・！？

そしてソイツが、俺を・・・捕まえた！？

行ったら、俺が捕まる未来・・・！？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・・・・行こう。

助けを待ってる奴がいる。なら、助けに行こう。

俺は、走り出した。

夢日記にあったゴミ捨て場、それは俺が唯一知っているゴミ捨て場であった。

金網が組まれたゴミ入れがある、よく見るであろうゴミ捨て場だ。

そして、見つけた。

ゴミ入れのすぐそば。そこに黒いゴミ袋が置かれていた。ガサガサと、ゴミ袋が動いている。

・・・被害者は、一体誰なんだ？

だけど、予知がある。俺は確認せずにそのゴミ袋を手にとって走り出した。

そしてすぐ近くの扉に手をかけ、模写世界の中に逃げ込んだ――。

―ｓｉｄｅ・シャマル―

おかしいわ・・・反応がいきなりロストした・・・。

ヴォルケンリッター全員と、はやてちゃんとなのはちゃんにフェイトちゃん、アースラスタッフも協力して貰って捜索してるのに・・・。

確かにこの辺りに魔力反応があった。なのについさっき、いきなり消えた・・・。

どこなの・・・・・一体、祝福の風のあなたの身に何があったの・・・・・？

―ｓｉｄｅ・ｏｕｔ―

模写世界の、病院内に降り立った。

できるだけ早めに、生命維持の緊急処置をしなければならない・・・。

でも、その前に。

確認しないと・・・・・被害者は、おそらく予知にあった俺の知

人で髪の長い女性・・・。

袋を、開けてみる。

――すぐに閉じた。

骨髄を失った、人間だったものがグニャグニャと不気味に動いていた。

そして――見えた。

綺麗な銀髪と、黒い羽根が。

知人と言えば、確かに知人だった。

よりによって・・・・・・お前だったのかよっ・・・・・・・・！

祝福の風――――

――――リインフォースッ・・・・・・・！！

## e11．人が喰われた話（後書き）

面倒になってきたので、後書きちでの纏めはやめにします。

その代わり、今回とか次回の話をちらほら。

冒頭の夢日記は、読んでの通りリインフォースがカニバルに喰われる予知です。まあ、読んでたらわかりますよね。

カニバルに喰われた被害者が入れられるゴミ袋。その中身を確認してキリヲが気づいた訳ですが、これを書いてる時何を元に気づかせるかで悩んだんですよ。

リインフォース・・・デバイスを持つ訳じゃない（そもそも彼女自身がデバイス）ので、どうしようか悩んだんです。あまり思い浮かばず、しょうがないので銀髪と黒羽にしました。黒羽って、スレイプニールのことね。

さて、次回はキリヲがカニバルと戦闘を。またもや低クオリティになりますがあしからず。

ではでは。

## e12．沈黙者対人喰い（前書き）

カニバルとの戦闘回。

またクオリティが低いですが、ご了承を。

ではどうぞ。

# ｅ１２．沈黙者対人喰い

―ｓｉｄｅ・すずか―

「はぁ・・・」

ため息が漏れる。ため息しすぎると幸せが逃げるってよく言うけど、現在進行形で幸せとは正反対のことが起きている。

今日はクラスにはやてちゃんと拓也君の姿はない。正確には、管理局に勤めている４人が学校を休んでる。

理由は、はやてちゃんの家族、リインフォースさんが昨日から失踪したからだ。

今も、リインフォースさんからの連絡はないらしい。

はやてちゃん達が捜索に当たっている間私にもできることをしようと、こういう事例・・・神隠しの話はないのかキリヲ君に聞こうと思った。

けれど・・・、

「どうしてこの日に限って休んでるのかな・・・」

キリヲ君は今日学校に来ていないらしい。

まあ、本当に神隠しなんてことはほとんどないと思うんだけど・・・。

「はやてちゃん達・・・大丈夫かな・・・」

小さく呟く。

今は授業中で、先生が話しているけど、心配で話が耳に入らない。

本当に、なんでこんなタイミングよくキリヲ君は来てないんだろ・・・。

・・・・・まさか、キリヲ君も何かに巻き込まれてるって訳じゃ・・・ないよね・・・？

―ｓｉｄｅ・ｏｕｔ―

特に何もない空き地。

人気はない。

そんな場所にいるのは、木箱を抱えて立つ俺という存在ただ1人。

今日は学校がある日だが、それを無視してここに来た。

木箱の中身は当然、エニグマの証明。災いを生み出すドクロ。

奴が欲する代物。

早い話が、俺はカニバルを誘い出す囮としてここに来た。

付近の扉の場所も確認した。

後は、カニバルが現れるのを待ち、模写世界に誘い込んでから一騎打ちで奴を倒してリインフォースを救出するのみ。

当然怖い。

一歩間違えれば俺が喰われるからだ。

だが・・・気づいている俺が、リインフォースの助けの求めを見捨てる訳にはいかない。

木箱を抱える腕に力が入る・・・。

俺は・・・ここにいるぞ。

俺は・・・忌束キリヲは、エニグマは、ドクロは！ここにあるっ！！

出てこいっ・・・カニバル！！

――ゾクリ

来たっ・・・！

後ろを振り返る。

誰もいなかったはずのそこに、奴がいた。

「　　！」

『ドクロ・・・・・・ドクロをよこせっ・・・！』

身体が震え上がる・・・・・死よりも恐ろしいような恐怖が迫ってくる。

だけどっ・・・ここで潰れる訳にはいかない・・・！

俺は走り出した。

そして事前に確認したすぐ近く空き家の扉に手をかける。

後ろを確認する・・・よし、奴は追ってきている・・・！

模写世界（コピーワールド）への扉を、開く！

・・・勝負だ、カニバル！！

模写世界の海鳴市でカニバルと向かい合う。

「　　！！」

『ドクロッ・・・ドクロォォオオオッ！！』

突っ込んでくるカニバルの、特に“手”に注意して攻撃を避ける。

奴の手で頭を掴まれたら終わりだ。骨髄を抜かれ、パイにされて捕喰される。

奴の手をかいくぐり、俺の手が腹のガラスケースについた。

・・・・・死ねっ・・・三次減算解放っ！！

極限まで縮小して持っていた電柱に削った数字を全部加え、元の大きさに戻す！

電柱は元の大きさまで拡大、ガラスケースと手が密着状態だったため、拡大の力でカニバルが押し出され、吹き飛ぶ。

祀木がｅ－ｔｅｓｔ内で使っていた手段だ。狭い空間よりも大きなものを三次減算によって入れ、中で拡大させて押し出す。

・・・直接持っていた分、衝撃がこっちにも来たが、予想の範囲内だ。まだいける。

で、カニバルは・・・・・・

・・・だめか。

カニバルのガラスケースは、“無傷”だった。

どうやらあのガラスケース、物理的攻撃には効かないらしい・・・。

「　　！」

『ドクロッ・・・！』

！？カニバルが黒・・・いや、濃い紫の魔法陣を・・・！？

ッ！！ガーディアン！！

次の瞬間、俺の四方八方から紅い刃――ブラッディダガーが襲いかかり、俺は爆発に包まれた。

っ・・・やはり、本人と同じ能力とだけあって重いなっ・・・！ガーディアンのセットアップが間に合わなかったらどうなっていたことか・・・！

煙が晴れる。俺の姿はいつものコート姿ではなく、学ランで両手両足に枷がつけられた姿になっていた。俺の、魔導師としての姿である。

チッ・・・物理攻撃は効かない・・・だからと言って無限回廊にぶち込むのも対した意味がないだろうし、時間がかかりすぎるとリインフォースが消化されちまう・・・！

「　　！！」

『ドクロォォオオオッ！！』

砲撃が俺に襲いかかる。俺はそれを防御魔法で防ぐ。

幸い、ガーディアンの強さは異常な程の硬さだ。おかげで奴の攻撃で墜ちることはまずない。

考えろっ・・・あのカニバルから、リインフォースを救出する方法を・・・！

「　　！！」

『ドクロを・・・よこせぇぇえええっ！！』

黙って・・・リインフォースを解放しやがれ！！

俺が走る。

カニバルが追ってくる。

カニバルが魔法陣を展開した。
すると、俺の周囲を無数の魔力球が囲う。

「　　！！」

『ドクロッ！！』

カニバルの手から、魔力球から、砲撃が俺一点に群がってくる。

俺は自分自身をクリスタルゲージに閉じ込める。
クリスタルゲージが俺の全面の防御壁となり、砲撃の嵐を凌ぐ。

砲撃が収まったところでゲージを解いて、透明化。
透明化で接近し、カニバルの顔面を蹴り飛ばす。
倒れたカニバルの上に立ち、小さくした鉄骨を投げる態勢をとる。

・・・解放っ！！

カニバルの顔面に、元の大きさに戻った鉄骨がぶち当たった。

・・・チッ、全然効かねえ・・・やっぱり、コイツは頭も腕や脚も、物理的攻撃が効かないようにできてやがる・・・。

カニバル自身が、そもそも死人みたいな存在だからか？それとも、何か別の理由でもあんのか？

「　　！！」

『穿てっ・・・！！』

・・・しまった！！

視界全体に現れる紅い短剣。それが殺到し、俺に襲いかかる。
ガーディアンのおかげでダメージはない。しかし、衝撃は別物。あらゆる角度から短剣に突かれ、衝撃で俺の動きが止まる。

「　　！！」

『喰らえっ！！』

そこにカニバルが砲撃を仕掛ける。防ぐことができず、衝撃でカニバルの上から吹き飛ばされた。

地面を転がり、摩擦の影響で止まっていく。

デバイスでもある、俺のバリアジャケットはもうかなりボロボロだ。
本来の夜天の書の力が凄まじく、その力を得たカニバルの攻撃をだいぶ受けてきた。まだ機能があり、俺本体へのダメージがまだほとんどない分まだマシだ。

・・・戦闘が始まってから、何時間経ったんだろうか。

場所は変わり、周辺は瓦礫だらけになり、辺りには物が散乱している。

そんな中俺とカニバル、両者ともに傷は少なく、しかし、俺だけが片膝をつく有り様だった。
古傷からの出血、そして疲労。それが俺から体力を奪っていた。

もう・・・戦う力はない・・・・・・・限界だ・・・。

「　　」

『ドクロ・・・ドクロォッ・・・・・・・』

カニバルが近づいてくる・・・・・・。

幸いなのが、奴の盲目さか。もう俺の手元にドクロはない。現実世界に放り込んで隠しておいた・・・。

・・・俺は奴と戦っても勝てない・・・それでも、リインフォースを救出するには、これしかない・・・！

メモ帳とペンを出し、ガリガリと書き綴る。
そして書いた内容を、カニバルに見せる。

：喰えよ、俺を

俺は自分から、喰われることを選んだ。

方法はただ1つ。奴の腹の中に入り、リインフォースと一緒に腹から脱出するしかない。

危険は大きい。まず、腹の中で俺の精神が目覚めることができるかどうかだ。目覚めることができなければ、そのまま消化される。
それに、コイツが原作と同じカニバルかも謎だ。脱出の方法が原作

と同じである保証はない。

・・・だけど、時間を使いすぎた。ケースの中にパイがあるのを見る限りリインフォースはまだ無事のようだが、どこまで消化が進んでしまっているのかわからない。ここで何もできずに、ただ逃がしてしまうのはもうできない。

∴必ずリインフォースを救出してみせる・・・そのために、俺を喰え、カニバル!!

俺の感情をカニバルにぶつける。

「　　!!」

『ドクロッ!!』

奴の手が俺の顔を掴んだ。

俺の何かが引き抜かれる――。

ズルズルッ・・・

ドシャッ――――

――ガサッ

ガサ・・・ガサッ

ガサガサガサ・・・・・・

ガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサ
ガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサ
ガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサ
ガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサ
ガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサ
ガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサ
ガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサ
ガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサ
ガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサ
ガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサ
ガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサ
ガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサ
ガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサ
ガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサ
ガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサ
ガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサ
ガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサ
ガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサ
ガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサ
ガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサ

ガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサ

ガサガサガサガサガサガサ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ドクロォ・・・ッ

ドクロォォォオオオォオオオオォォオオッッ！！！！

ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛
ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛
ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛
ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛
ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛
ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛
ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛
ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛
ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛
ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛
ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛
ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ツッ！！！」

## ｅ１２．沈黙者対人喰い（後書き）

喰われました。

仕方ないです。そもそもキリヲの力は才能もデバイスも戦闘のために存在するものなんかじゃないし。三次減算をバリバリ使ってるけど。

カニバルに物理攻撃が効かないのは、後の話でわかるようにします。まだ謎にしますが。

今回使った才能はコピーと三次減算、そして消える呪い。
消える呪い・・・結構用途が限られるんですよね。消えることのできる時間も限られますし。というか、透明化程度なら魔法でもできますし。そうなると、ホント魔力を使わずに奇襲か、特定のものを消して透視する程度にしか使いようがないんです。

さて、次回はカニバルの腹の中。腹の外の様子も少し語られるけど、基本は中です。
果たして、キリヲはリインフォースと共にカニバルの腹から脱出することができるのだろうか？お楽しみください。

あ、最近書いてるところでリインフォースがヒロインな感じです。
脳内構想でもすっげーヒロインです。もうヒロインやっちまえよ。
今作ではヒロインの称号取れるって。活躍できるって。

## e13．人喰いの部屋（前書き）

リインフォースをヒロインにという声が多いです。

ぶっちゃけもはやヒロインです。

ただ、なかなか救われないです。少なくとも、３０話ぐらいまでは確実にリインフォースは鬱な状態でいます。（え

それでもいいなら、このままついてくればいいさ！無理だったら？

そんな奴のことなんか知るかーっ。（待て

そんな感じで、どうぞ。

# e13. 人喰いの部屋

―side・はやて―

今日のリインフォース捜索は開始からすでに、何時間も経っていた。

反応がロストした地点を中心に手分けして捜索していて、うちは、リインフォースがなぜかうちとユニゾンできなくなったことから新たに生まれた新しい融合騎、リインフォース・ツヴァイ、略してリインと捜索しとる。ちなみに、初代の方はリインフォース・アインスとなってる。

「リインフォース・・・一体どこに行ったんや・・・？」

「はやてちゃん・・・」

家族を失うのはもう嫌や。リインフォースに何かあったら、私・・・・・。

――ドガァンッ！！

「っ！？」

突然の後ろからの轟音。

振り返ると民間の扉が壊されていて、ボサボサの長髪の男が出てきた。

「八神はやて・・・リインフォース・ツヴァイ・・・・・・ドクロをよこせ・・・！」

・・・!?私達の名前を知ってる?
それにドクロって何のことや・・・？

「一体誰です?それにドクロって何やねん?」

「ドクロ・・・ドクロをよこせっ！」

「っ!?」

男が展開している、濃い紫色の魔法・・・これって、リインフォースの・・・!?

「よこせぇぇえええっ!!」

「っ!!リイン！」

「はいですっ！ユニゾン・インッ!!」

高速で飛来してくるブラッディダガーを、セットアップとリインとのユニゾンをして回避する。

でも、なんでや・・・あの魔法陣の色もブラッディダガーも、リインフォースのものやで・・・？

「あなた、一体何者なんや!?なしてリインフォースの魔法を！」

「アゞアゞアゞッ！！」

聞く耳持たんかコイツ！

ロン毛男の砲撃――やはりこれもリインフォースの魔力と魔法やった――を魔法陣を展開して防ぐ。

なら、こっちも反撃や！

足下に魔法陣を展開し、夜天の書の頁が開かれる。

「クラウ・ソラスッ！！」

白銀色の砲撃が男めがけて撃ち出される。

男は防ぐ動作すらせずに、砲撃に呑み込まれた。

・・・やったか？

「ドクロッ・・・」

「・・・！！」

砲撃で舞い上がった砂煙の中から、男が出てきた。

――無傷やった。

両手両足にやけにデカい枷をつけたそいつは、身体どころか服にも傷1つついてない姿で出てきた。

なんて硬さや・・・全力でなかったにしても、硬すぎる・・・。

「ドクロォッ・・・」

その時やった。
男の全身が黒くなっていった。

そして、その黒が剥がれ落ちると、男は別の姿になっていた。
よう知ってる人物・・・自分達が今探してる人物になっていた。

「主・・・」

「――リインフォース！？」

男が、リインフォースになっていた。

どういうことや？こんな相手の目の前で変身魔法を使うのは意味がない。なら変身してなんの意味があるんや・・・？

けれど、その考えはいとも簡単に覆された。

「主、申し訳ありません・・・私は、この男にパイにされ、捕喰されてしまいました・・・」

「な・・・！？」

パイにされ、喰われた・・・そないなことが、現実としてありえるんか！？

うちと中にいるリインが驚愕しとる間にリインフォースの身体が黒くなり、またあの男に姿が戻った。

「この女を助けたければ、ドクロをよこせっ・・・！」

男が見せた自身の腹にはガラスケースが埋め込まれていて、中にパイが２つ入れられていた。

人質や・・・自分の目的を達成するために、リインフォースを人質にっ・・・！

せやけど・・・！

「ドクロを、ドクロをよこせっ！」

「せやから、ドクロって何やねん！」

『っ！はやてちゃん！！』

リインの声に気づいた時には、うちの周囲に黒い魔力球が大量に浮かんでいた。

「ドクロ・・・ドクロ、ドクロッ、ドクロォォオオッッ！！！」

次の瞬間。

私の視界を、紫色の砲撃が埋め尽くした。

―ｓｉｄｅ・ｏｕｔ―

・・・・・・・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・・・ぐっ、うっ・・・・・・・・・！

・・・・・・どこだ、ここはっ・・・・。

・・・そうだ、俺はカニバルに喰われたんだったな・・・・・・・だとしたら、ここは奴の精神世界か・・・？

棺から起き上がる。殺風景な部屋だ・・・。

まずは身体チェック・・・よし、まだ消化はさほど進んでない。才能も全部、まだ使える。それぞれ2回ずつといったところか・・・身体が全体的に重いが、まだ動ける。

・・・そうだ、この部屋に来たってことは、リインフォースは・・・？リインフォースは無事なのか・・・？

周りを見渡して、すぐに別の棺を見つける。立ち上がってその棺の中を見てみると、甲冑姿のリインフォースがいた。

だがまずいな・・・だいぶ身体が透けて骨が見えている。消化が進んでる・・・早く、安全な場所に避難させないと・・・！

俺は近くの壁に手をかけ、念じる。少しして壁の一部が動き、隠し扉なってこの部屋のコピーと繋がった。当然、コピーした部屋の方はカニバルの腹とは別物。消化はされない。

コピーが完了して、俺はリインフォースを抱えて・・・とは身長的にうまくいかず、背負ってなんとかコピー部屋まで入ることができ

た。

リインフォースの様態はあまりよくない。腕や脚はほとんど透けてしまっていて、頭部も口だけでなく結構な面積が透けている。長時間消化されて、危ないところまできていたようだ。息も細かい上に荒く、かなりうなされているようだった。

逆再生の力を使って平常な状態まで巻き戻そうかと少し考えた。しかし、ここで無闇に力を消費する訳にはいかない。それに、巻き戻して目覚めた時への不安もある。

3年と少し前のサイレント化の一件。完全にサイレント化したところまでは見ていなくとも、リインフォースはおそらく俺のサイレント化はもうわかっているはず。今ここで目覚めさせたら、言葉を発せない俺を、3年前の俺だと気づかれる可能性がある。気づかれなかったとしても、重ね合わせて重く見るのが目に見えている。

だから巻き戻さず、現状維持という形にした。

後は・・・脱出のための手がかり探しだ。この部屋から出るために、奴の記憶を再生させなければならないはず・・・。

・・・あった、パソコン。しかも電源が入ってる・・・。

近寄って調べると、こんなことが書かれていた――。

《記憶復元プログラム、パスワード入力》

あなたについて、次の文の【】に当てはまる言葉を記入してください。

氏名：【　　】

願望：【　　】

――なんだこれ・・・！？

あなたって、この部屋の持ち主・・・カニバルのことだよな・・・。
願望はわかるけど、氏名？原作でこんなのあったか・・・？プログラムを開くシステムそのものが違うぞ・・・？

・・・・・ちょっと待てよ、この部屋って・・・！？

この部屋の周囲を見回す。
そして見つけた人骨模型や、棚に飾られた人形を見つけ駆け寄った。

・・・ある！？この部屋、全部の人形に頭部があるぞ！？
どうなってんだ・・・カニバルは、咬田シメイが頭部の骨を引き抜かれて、その後復活させられた存在のはず・・・・・そして自身の頭を取り戻すためにカニバルになって、精神世界にある人形は全部頭部だけがない状態になっているはずだ・・・！

・・・・・ということは、この部屋・・・・・いや、奴は・・・

カニバルは、咬田シメイじゃない・・・？

・・・第3の手で本棚の上を調べる・・・ここには、シメイがカニバル化した一部始終が撮影されたカメラがあったはずだ・・・。

・・・・・・ない。

あるはずのカメラが、ない。脱出の手がかりがない・・・。

・・・出られない・・・・・・・！？

## e13. 人喰いの部屋（後書き）

キリヲ、脱出不可能を突きつけられるの回でした。

勿論このまま終わりにはしませんよ。脱出させますとも。
その際は若干ご都合主義が混ざっていますのであしからず。

さて次回、キリヲが少し鬱モードになります。

だがだからって気構えるなよ？これは予行練習だから。（え
本気を出したら胃に穴が開くから。・・・俺のが。（ええ

ではまた今度。

## ｅ１４．罪と希望（前書き）

今回のは、これからひどくなってくる鬱展開の予行練習だと思ってください。

この小説・・・主人公もヒロインも鬱ってるからさ・・・（キリヲとリインフォースのこと）。

# e14．罪と希望

―ｓｉｄｅ・なのは―

「ディバイン・・・バスターッ！！」

ディバインバスターが放たれる。桜色の砲撃は、狂うことなく男に直撃した。

「ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ッッ！！！」

けれど男はその砲撃が直撃しても、傷１つなく起き上がってくる。

リインフォースさんの捜索中、はやてちゃんが襲撃に遭い、みんな駆けつけてからずっとこんな感じ。

どんな攻撃を受けても、お腹にガラスケースを埋め込んだ男はまるで効いてないかのように起き上がる。拓也君が変身したり、ユニゾンを使っても、それが効いた様子はない。

ただ魔力が減ってきている、あまりよくない現状。それどころか、事態は悪い方だ。

はやてちゃんが言うには、リインフォースさんがあの男に捕らわれているみたい。

捕らわれていたリインフォースさんが一瞬出てきて、パイにされて食べられたこと、そしてそのパイがあの男のガラスケースの中にあ

ることをはやてちゃんは言っていた。けれど、今のガラスケースは空っぽ。何にも入っていない。

・・・一体どういうことだろう？はやてちゃんが嘘をつくなんて考えられないし・・・・・・。

それに、奴が言うリインフォースさん解放の条件・・・ドクロっていうのも気になる。私達のことも知っていたし、一体何者なの・・・？

・・・なんでもいい。あいつをなんとかして、リインフォースさんを解放させれば！

状況としては、私とフェイトちゃんとはやてちゃん、ヴォルケンリッターのみんなに拓也君の８人がいる。相手は翻弄されている。大丈夫、十分いける！

待ってて、リインフォースさん！今、私達が助けるから！

―ｓｉｄｅ・ｏｕｔ―

・・・脱出不能という現実を突きつけられた俺は、自暴自棄になってリインフォースの隣で座り込んでいた。

最悪だ・・・カニバルが咬田シメイでない以上、俺達に脱出の手立てがないっ・・・・・・。

脱出するためには、本物の部屋のパソにカニバルの本名と願望を打ち込む必要がある。このコピーの部屋だと意味がない。だからと言って腹に再突入して検証していくなんてことをすりゃ、確実に消化される・・・第一、パスの入力が何度もチャンスがある保証はない。

・・・どうすりゃいいってんだよ・・・。

ここにいれば消化される心配はないにしろ、永遠にこのままだ。そのうち発狂して終わる。精神世界だから空腹を感じないかもしれないが、解放されたいという欲に負けるか、その希望が折られてしまう。・・・詰んだ。

結局俺は、半端者か・・・・・・何にもできず、ここで終わるのか・・・。

――クイッ

・・・？

何かに引っ張られた感じがして、その方を見た。
そこにいたのは、相変わらず苦しそうに細かい息をして眠るリインフォース。俺に寄りかかって、俺のコートの袖を弱々しく掴んでいる。

「　　！」

『ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・！』

・・・うなされてる・・・？
何かに謝り、眠りながら涙を流している・・・過去の主の夢でも見てるのか・・・？

・・・さすがに、起こしてやった方がいいか？

バレる可能性はあるが、3年も前の人だ。姿の記憶などほとんどあてにはできない・・・運がよければバレずに済む。そもそも、起こさなければ済む話だし・・・・・・。

そう思って逆再生を使おうとした時、リインフォースの口が再び動いた。

「
　　！」

『私のせいで・・・・・・私が、早く私を壊さなかったから・・・・・・！』

・・・・・・っ。

・・・・・・だめだ、できない・・・。

もし、巻き戻したことによって起きたら、そうして俺のことに気づいたら。
リインフォースは・・・自身の罪悪感に、自分に課した罪に耐えき

れるのか？
耐えきれるという確信もなしに・・・壊れてしまうかもしれない可能性を振り切って、目を覚まさせるのか？

・・・俺には・・・できない・・・・・・っ。

最低な野郎だよ・・・俺は。

理不尽をぶち壊すとか言って、救済するとか言って、俺は彼女に重い罪を着せたんだ・・・。

思えばプレシアの件だって、俺は確かにプレシアの病を治し、アリシアを蘇生させてプレシアを救済した。

でも、そのためにコピーの時の庭園に避難したためにフェイトは、自身の思いをプレシアに伝えることができなかったってことだ・・・きっと今も、引きずってる。

結局は理不尽を壊せていない。それどころか、俺が理不尽を作り出している。
俺は、救世主になんかなれない・・・とんだ極悪人だ。
きっとこれは、そんな俺に対する罰なんだ・・・俺はそれに、リインフォースを巻き込んじまった・・・。

何か・・・刃物はないかな・・・・・・あったら原作のキリヲのように喉を切り裂いて無理やり願望を唱えて、リインフォースだけで

も脱出させて、代償を俺に回すことができるかもしれないのに・・・探すか。

立ち上がろうとすると、クイッと、何かが俺の袖を引っ張る。

リインフォースだった。

うなされながらも、弱々しい握力で、俺の袖を引っ張っていた・・・。

「　　！」

『行かないで・・・・・・私に、謝らせて・・・！』

・・・・・・・・。

・・・最低な奴だよ。俺は。

ここで目覚めさせることはできない・・・彼女が抱える罪を、俺が晴らすこともできない。けれど・・・・・・。

俺は再びリインフォースの隣に座る。リインフォースの身体を自分に寄せて、頭を優しく撫でる。

けれど・・・こうしてそばにいてやる、いや、そばにいるのは・・・いいよな。

・・・しばらく撫で続けると、謝罪の言葉は止まった。涙は出てるし、まだ苦しそうだけど、さっきよりはマシになった気がする・・・ただの妄想か。

・・・脱出しよう。

妄言だとしても構わない。それでもこれ以上リインフォースが罪を負うことはないようにしよう。

もう一度、部屋を見渡す。

部屋自体は原作と大した変わりがない。変わってることと言えば頭のある人形と、パスが違うパソと、後はシュレッダーがあることぐらい・・・・・・。

・・・ん？シュレッダー？

そういえば、パソと人形に目が行き過ぎて、あのシュレッダーは調べてなかったな・・・手動式で軽そうだ。あれくらいなら第３の手でも運べるか・・・。

第３の手を伸ばし、シュレッダーを手元に手繰り寄せる。

何か紙屑が入ってる・・・文字も書かれてるみたいだ。

・・・これが、最後のチャンスかもしれない。

俺はシュレッダーの蓋を開け、紙屑を取り出した。
そして背中の古傷の皮を剥がす。剥がれた背中の皮が一部裂けて、人型の式紙のような形を取る。
そしてその皮が紙屑に張り付き、カウンターと巻き戻しのマークが現れる。

この紙屑をシュレッダーに掛けられる前まで、巻き戻すっ・・・！

次の瞬間、カウンターの数字が巻き戻り出し、同時に紙屑達が動きを見せた。
細切れにされ、クシャクシャにされた紙屑が伸び、切断面同士がくっつきあう。

そうして、数枚の紙の束が出来上がった。
俺はその紙の束を手に取り、見る。

氏名
炎田浩人（ほむらだひろと）

出身
日本〇県△市

血液型
B型

寿命
７８歳

好きなもの
甘いもの、辛いもの、漫画・アニメ・ゲーム

嫌いなもの
苦いもの、バッドエンド、恐怖関係、梅干し

好きな二次作品
リリカルなのは（無印、Ａ’ｓ、Ｓｔｒｉｋｅｒｓ、Ｆｏｒｃｅ、ＶｉＶｉｄ）、エニグマ、遊戯王、他

・・・

炎田・・・浩人・・・・・・・！？

馬鹿な・・・これって・・・！

“俺”のっ・・・

“転生前”の名前っ・・・・！

## e14．罪と希望（後書き）

キリヲの転生前の名前が明かされるの巻でした。

このカニバル攻略編ではとっても重要な手がかりになります。

次回でカニバル攻略。このカニバル編は後2話・・・事後処理も含めたら3話、今後も大いに引きずります。

## ｅ１５．正体と願望（前書き）

脱出回。

ご都合主義成分が含まれているかもだから気をつけてねー！

## ｅ１５．正体と願望

炎田浩人・・・・・・それは、俺が忌束キリヲになる前の、転生前の俺。
転生前の俺はとにかく内気で、なんでも自分１人で抱え込んで、ネガティブ思考の止まらない奴だった。

・・・いや、今もそうか。

そんなことよりもだ。その転生前の俺の書類がなんでここにあるんだ？
それにこの書類、浩人（おれ）の寿命なんてのも書いてあるし・・・でも、俺って神のせいで心臓麻痺で死んだんじゃ・・・。

・・・神？

・・・そうだ、この書類はおかしい。出身地とか血液型とかならまだしも、寿命とか好きな二次作品とかが普通の書類に書かれている訳がない・・・！

つまりこれって・・・・・・神が間違ってシュレッダーにかけてしまった浩人（おれ）の書類・・・！？

・・・まさか、この部屋の持ち主は・・・カニバルの正体って・・・！

――――浩人（おれ）・・・！！

・・・でも、それだとカニバルになって望んだことってなんだ・・・？浩人（おれ）が死んだ理由は心臓麻痺。何も引き抜かれてなんかいない。それにこうして、俺は転生している・・・・・・。

・・・・・・ひょっとして・・・・。

俺は第3の手を伸ばし、棚に飾られている軽そうな人形1つを取って、手元に寄せる。

・・・やはりだ！人形の服や髪によって隠れていたけど、この人形、“額”と“胸”の中枢辺りで穴が貫通してる・・・！
いや、重要なのはそこじゃない・・・その穴がある場所にあるはずの臓器“脳”と“心臓”がない・・・！
他の人形達も全てそうだ・・・この2つだけがない・・・！

・・・わかったぞ・・・問題の答えが・・・アイツの願望が・・・！
アイツは、ドクロの王になりたかった訳でも、ましてやドクロが欲しかった訳でもないんだ！

後は、本物の部屋・・・カニバルの腹に再突入してパスを打ち込むのみ・・・！

・・・・・・・・・。

リインフォースはかなり限界に近い。消化に耐えきれない可能性も

ある・・・けど、脱出するには避けては通れない道だ・・・。
巻き戻すしかかない。

古傷をもう一度剥がし、リインフォースに貼り付ける。

リインフォースの状態を、消化が始まる前まで巻き戻す・・・。

・・・巻き戻しが始まれば、もう大丈夫なはずだ・・・腹に突入しよう。

本物の部屋に入り、リインフォースを近くの壁に寄りかからせる。
まだ袖を掴み続けていたいた彼女の手を、そっと、離す。

そして俺はパソの前に立つ。パソに映し出されているのは、脱出のための問題。

キーを叩く。

――この部屋の持ち主・・・炎田浩人の願望っ・・・。

アイツは“俺”が転生するために、浩人（おれ）にあった転生に必要なものを引き抜かれた・・・！

“脳”と“心臓”・・・それが意味するのは・・・・・・

“記憶”と“魂”っ！！

そして、何らかの形で復活させられた後・・・記憶を引き抜かれた後、唯一覚えていた記憶・・・エニグマのドクロを、“記憶の情報源”として欲していた！！

おそらくリインフォースを捕喰したのはほぼ同じ原理・・・リリカルなのはのことを覚えていたからなんだ・・・！

つまり、コイツの願望・・・コイツが欲するもの・・・・・・それは！

氏名：【炎田浩人】

願望：【記憶と魂の返還】

これが――――、

――――答えだっ！！

エンターキーを、叩いた。

―ｓｉｄｅ・なのは―

変化は突然だった。

何度吹き飛ばしても起き上がる男が突然苦しみだし、頭を掻きむしった。

「ギッ・・・ア〝ア〝ア〝ッッ！！！」

「っ！なんだ・・・何が起きている・・・？」

突然の男の異変に、拓也君までもが動きを止めた。

――ピシィイッ！！

「っ！ケースにひびが！」

「ホントや・・・なして!?」

割れるような音がして、フェイトが男の変化に気づく。よく見ると確かに、男のガラスケースに大きなひびが入っていた。

「お、俺は・・・俺はっ・・・・・・・!?」

頭を抱えて呟きながら、男がこっちを見た。
そして男は目を見開いた。

「高町、なのは・・・フェイト・テスタロッサに八神はやて・・・ヴォルケンリッターも・・・!?・・・ここは・・・・・・俺は・・・!?」

私達の名前を呟いて驚いた様子の男・・・さっきも私達の名前を口にしていたのに、どういうこと・・・?

疑問に思っていると、男は突然私達に背を向けて逃げ出した。

「あ!逃げんなテメー!!」

『シュワルベフリーゲン』

ヴィータちゃんが鉄球を弾いて追撃する。
鉄球は男に当たって吹っ飛ばした。

「ヴィータちゃん、捕まえるのよ!吹っ飛ばしてどうするのよ!?」

「う、うっせー!怯んだところに捕まえればいいだろーが!!」

シャマルさんの言うことは尤もだなぁ。

うー、砂煙が舞っていて見えない・・・。

――バタンッ

扉が閉まる音がした。

「っ!?魔力反応が、消えた・・・!?」

えっ、それって・・・!?

『反応・・・ロスト・・・・・・!』

「そんな・・・!」

エイミィさんから、追い討ちのような言葉が告げられる・・・。

そんな・・・リインフォースさん・・・・・・!

―side out―

・・・俺を消化していく感覚が止まった・・・正解だったみたいだ。
もうすぐ、俺とリインフォースは解放される・・・。

リインフォースを見る。俺がリインフォースの手をほどいたせいで、
またうなされているようだった。

俺はリインフォースのそばに寄って、また頭を撫でてやる。

・・・もう、会うことはないかもな・・・。
俺は、大罪人だ。俺から彼女に会う資格なんてない・・・。

「　　」

声は、出ない。

まったく・・・最悪だよな。この呪いは。
最低だよ・・・俺って奴は。

彼女にひたすらつらい思いをさせてしまった。
それなのに・・・謝罪の言葉も出せないのかよ・・・。

「　　」

もう一度、今度は別の何かを言う。

何も聞こえない。音も出たとは思えない。

・・・意識が遠くなる。精神が肉体に戻ろうとしている・・・。

気のせいだろうか。

祝福の風の、涙の跡に・・・大粒の涙が流れたように見えた。

再度腹に突入したことによって一時的にケースにパイ・・・力が戻ったカニバルは、扉を経由して海鳴市の模写世界に逃げ込んでいた。カニバル化によって伸びた髪の毛は、もう元の長さまで縮んでいる。

「はぁっ、はぁっ・・・お、俺は・・・何をしていた・・・？」

頭を抱えて、自分の行いの記憶を呼び起こす。

「何かを・・・喰った・・・・・・？パイ・・・・？いや・・・・・・・人を・・・・・・・・・！？誰を喰った・・・？・・・・・・・俺は、誰を喰ってしまったんだ・・・・・・・！？」

その場に座り込むカニバル、いや、炎田浩人。

「あ・・・あぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあっ・・・・・・・・！」

今、粉々に砕け散ったケースから、人型のパイは姿を消していた。

・・・そうだ。

浩人（おれ）は、あんな奴だった・・・。
いっつも内気で、ネガティブで、何かあったら自分のせいだと責めて、1人で抱え込んで、何の力も度胸もない、ヘタレで臆病者だ。

・・・いや、それは今の俺もそうか。
転生して力を手にしても、結局人は変わらないんだな・・・。
それなのに俺は、1人でカッコつけて、自分勝手なことばかりしていた・・・。

俺は結局、浩人（おれ）のままだ。

助けを求めたくても、助けを求めようとしないで抱え込んで、誰かが気づいてくれるのをただ待つ。そうやって、虚栄を張り続ける馬鹿者さ。

そんな浩人（おれ）を知っているのは、俺でしかない。

だから――――、

‥筆談をお願いできますか？

話そう。

どっかのライダーみたいな、２人で１人とは真逆だ。

１人で２人。

俺と浩人（おれ）だけの筆談を始めよう。

## e15．正体と願望（後書き）

カニバルの正体発覚、そして脱出するの回でした。

次回はカニバル改め炎田浩人との会話回となっております。

ちなみにリインフォースは解放された後、現状を調べようと適当に開けたドアから元の世界に脱出しました。キリヲが脱出許可をちゃんとしておいていたので。

こんな感じ。←

ガチャ（扉を開ける音）

リインフォース
「・・・あれ？」

はやて
「・・・リインフォース！？」

リインフォース
「我が主・・・それにお前達も」

はやて
「リインフォース・・・リインフォースゥッ！！」（リインフォー

スに抱きつき）

ヴィータ
「ったく、どこほっつき歩いてんだよオメー」

拓也
「ま、リインフォースが無事だからよかったな」

なのは
「まあ・・・それは同感だね」

リインフォース
「・・・・・・・・・」

ザフィーラ
《リインフォース》

リインフォース
《・・・ん、どうした？》

ザフィーラ
《何をしていたかは後で聞くとして、何かあったのか？》

リインフォース
《何か・・・とは？》

ザフィーラ
《時折見せる、思い詰めた表情をしていたからな・・・》

リインフォース

《そうか・・・》

ザフィーラ
《無理に教えろとは言わんが・・・頼るということも覚えろ》

リインフォース
《そう、だな・・・すまない》

リインフォース
（なぜだろう・・・覚えてないが、懐かしい人に会った気がする・・・）

こんな感じだったそうな。

ではまた次回。

## e16. 俺2人（前書き）

カニバル編ラスト。

・・・と、言いたいけどその後の説明とか影響とかで、意外にも当分長くまで続きます。

ではどうぞ。

## e16．俺2人

―ｓｏｕｎｄｏｎｌｙ―

：私は忌束キリヲと言います
あなたの名前を教えてくれますか？

：炎田浩人
・・・キリヲってまさか

：あなたの想像しているキリヲとは別ですので、気にしないでください
早速ですが、何か質問はありますか？

：とりあえず、ここはどこなんだ？

：ここはあなたの知っている世界から遠く離れた場所、とだけ言わせていただきます
他に何かありますか？

：ならもう1つ
アンタ、さっき俺の想像したキリヲがわかってるような素振りだったけど、なんでわかるんだ？アンタは、俺を知ってるのか？

：わかりますよ。いや、私があなたのことがわからなかったら、私ではないので

：そうなのか？

‥ええ
他はありますか？

‥いや、もういい

‥そうですか
ではこちらからも質問しますね
ここに来るまでの経緯を話してくれませんか？

‥街中で突然胸が苦しくなったのが、始まりだった気がする
気がついたら、知らない街にいて
そこから何かが足りない感じがした
その何かを探して歩き回った
途中、腹が減って何か食べた気がする
それでも何かは見つからなくって、躍起になった
それで気がついたら、頭に何かが流れ込んできて
同時に目が覚めたような感じもして
そして目の前には、知ってる人達がいた
でも怖くなって逃げた
それでここまで逃げてきた

‥そうですか
まだ、その足りないものは探している途中ですか？

‥いや、今はもうある
気がついたらすでにあった

‥そうですか

‥けど、見つかっても俺のものじゃないな

‥どういうことですか？

‥だってお前、俺の生まれ変わりかなんかなんだろ？

‥違うか？

‥なぜ、そう言えるのですか？

‥わかるんだよ
それにお前、ついさっき俺のことがわからなければ私じゃないって
言ってたじゃないか

‥ありがとう

‥はい？

‥俺を救ってくれて
お前が、記憶と魂を、俺を思い出させてくれたんだろう?
すごいよな。生まれ変わった俺、いや、お前は。強くて、憧れる

‥・・・強くなんかありません
何にも変わってないですよ。内気なのも、ネガティブなのも、何でも1人で抱え込もうとするのも、1人でカッコつけようとするのも、何もかも
そして私は、自己満足のために他人に悲しい思いや、苦しい思いをさせてしまった

‥確かに変わってないな、そのネガティブ思考
でも、お前が救った何かもあるんだろ?
それだけでも、お前はすごい。そして強い
後、今更だけどその丁寧語もつらいんじゃないか?楽にしていいんだぞ

‥・・・俺は

‥俺が言うのも何だけど、そのネガティブ思考は少しなんとかした方がいいと思うぞ。せっかく、お前は強いんだから
俺は、そんな強いお前魂が同じなんだよな。お前の中で、俺は生きているんだよな

‥・・・ああ

‥お前は、これからも誰かを救うんだろうな
同じ俺なのに、羨ましいよ

：じゃあな。そろそろ時間だ

：え？

：もう、身体が保たない
お前のおかげで記憶を取り戻せた
けれど俺はもう生きた亡霊。ここにいるべき人じゃない

：死んだら、あの世に行くのか？

：魂がないからな。あの世にすら行かないさ
強いて言うなら、お前の中に生き続けるんじゃないか

：浩人、いや、俺・・・

：ありがとう、俺
おかげで、やっとこの身体も休める
そして、さようなら

―ｓｏｕｎｄ・ｏｕｔ―

海鳴市の模写世界に1つ、模写ではない墓標が立った。
簡素で小さな手作りの墓。墓石には『炎田浩人』と書かれている。

墓には花や供え物の代わりに、俺と浩人(おれ)での会話が綴られたメモ帳が供えられている。
短い対話だった。伝え足りてないこととか、今更思いついた話とかがたくさんある。俺は、本当にアイツを救えたのだろうか。

でも・・・ありがとう。

お前のおかげで、弱い俺に気がつけた。そして、俺が犯した罪にも気づけた。
罪は消えない。アイツらの悲しみ、苦しみ。それを着せた俺は大罪人だ。
もう、逃げることはできない。

なら、償ってやる。

どんな方法かはわからない。俺にできることは何か、まずできることがあるのかもわからない。
けれど俺は必ず、アイツらへ贖罪し続けてやる。

左手が動く。

日記帳に、届いた悲鳴が綴られる。

これが俺にできること。俺の贖罪の方法なのか。

――――緊急事態（メーデー）だ。

## e16．俺2人（後書き）

個人的にいい最終回だった。（違う

会話の内容がうまく思いつかなかったのは、もはや僕の才能がないからだと言わざるを得ないです。

それと感想を見て気づいた、前回言い忘れていたことですけど。

カニバルの腹の中で（キリヲだけ一方的にだけど）再会した2人。本当の再会をするのはこれからかなり先の話です。まだストックとしても『本当の再会編』とでも言えばいいのかな？それを最近作り始めたところ。めっちゃ先です。

といっても、邂逅事態は何度かするんだけどね（笑）。

つまりそれまでの間は2人とも鬱を抱え、悪化させていくということさ！（え

はい、ネタばらししました。

ではまた次回。

## e17．神さん久しぶり。そしてはじめまして

翌日。

俺はホームルームが終わってすぐ、昨日の無断欠席について先生から説教を受けた。

カニバルとの危険な決闘のためおふくろにも内緒にしていた故の無断欠席であり、責任は全部俺にある。やっていたことが非日常的なためそれを言う訳にもいかず、説教を黙って聞くほかなかった。正確には筆談なため読むほかなかっただが。

リインフォースについてだが、無事に解放されてその日の内に八神家に戻ることができたらしい。

おかげで、登校中にはやての姿がチラッと見えたが、いつもの通り・・・少しテンションが上がっていた。他の原作組も表情が明るい。

・・・だがそろそろ、原作組との接触頻度をある程度落とすことも考えた方がいいかもと思ってる。あんまり接触頻度が多すぎると思いもしないところで俺の正体がバレるかもしれない。

ただでさえ以前にアリサとすずかにドクロを発見されてバレるのではないかヒヤヒヤしてる。俺と接触頻度、２つの意味で。

・・・やっと説教から解放された。のそのそと席に戻る。

‥何の話だったの？

・・・さっき関わらないようにしようと思ったばかりなのに・・・。

：無断欠席したことについての説教

：そういやアンタ、なんで昨日来なかったのよ

：色々あるんだよ色々

：ロクな理由には見えないわね・・・

：ほっとけ

さて、寝るか。

・・・という訳にもいかずなのはに殴り起こされ。

さらには昼休み。すずかにも昨日休んだ理由を問い詰められ、誤魔化すのに苦労する羽目になった。

・・・なんだ？原作組（コイツら）と関わっていくのは、もう確定事項なのか？これが何かの補正力というやつなのか？そうなのか？

：今朝思った理念が早速砕けそうな件について

‥意味わからないよ

あっさり斬られた。

ようやく学校が終わり、帰宅。

昨日の疲れもあってか、やる気が起きずに夜になったらすぐに寝た。

駄菓子菓子。

気がついたら、すごく見覚えのある真っ白空間にいた。

そしてそこには、すごく見覚えのある中年男性が、すごく見覚えのある低姿勢っぷり・・・土下座を敢行していた。

・・・とりあえず、顔上げてほしい。読唇術も使えない。

あ、顔上げた。

「　　！！」

『申し訳ありませんっ！！』

いきなり謝られた。

そいつは例の神だった。

ポケットを探る。筆談道具はちゃんとあった。

：とりあえず説明を
謝られるだけだと訳がわからん
つーか、俺また死んだの？

：はい、了解しました
内容については、先日遭遇したぶんあなたの方が詳しいかと
あと、私がここに呼んだだけです。死んでません

俺の生死がついで扱いとか。
でも・・・なるほど。

：カニバルについてか
俺も情報が欲しかった

：では、説明します

読む話によると、転生した後の死んだ肉体のカニバル化は神にもよくわからない存在――イレギュラーということらしい。

神のミスによって死んだ奴らの死因は全員心臓麻痺。身体の欠損は

ないのだが、転生の際に記憶や魂を抜き取り、それらが本体から欠損したのがカニバル化の原因らしい。
だが本体には微量ながらも抜き取った記憶などの残りカスができる。言わば残留思念だ。それが、生きた亡霊、カニバルとして復活、記憶の残りカスを頼りにさまよい歩く。さらに言えば記憶や魂を抜き取る際に使った神の力――神力と言うらしい――の残像がカニバルに残り、その神力の欠片で他の世界に来たとか・・・こんな感じだろうということだ。正確にはまだ謎だそうだが。
そもそも、神のミスで人を殺め、転生させるということすら異例の事態だったらしい。神力が外界に及ぶこともまずないことらしく、何も起きずに済むという保証は元からなかったそうだ。
カニバルに物理攻撃が効かないのも、まだ謎らしい。ただ、すでに死んでしまった身体だからではないかとのこと。

‥ホントに申し訳ありません
我々は直接干渉してはならないことになっていますので・・・

‥別にいい。むしろアイツには感謝してるけど、話の中でまさかと思ったんだけど

‥ええ。あなたの予想は合ってます
カニバルは複数存在します

そのことに気づいたのは話の途中。

神はカニバルについて“俺の名前”ではなく、“転生前の本体”という面倒な言い方をしていた。浩人（おれ）1人で済むのならそんな言い回しの必要はない。

：あと何体・・・リリカルなのはの世界には何体のカニバルがいるんだ？

：カニバルは自分の転生者の元へ行く傾向があります
あなた達リリカルなのはの世界へ転生した方は全員で１３人
つまり、カニバルは１３体です

俺のカニバルはもう活動停止したから、１２体か。

：いえ、カニバルはその本人の魂が消滅した場合でも活動停止するみたいです
すでに４人程リリカルなのはの世界で亡くなった転生者がいますので、現在カニバルの数は８体です

：なにチャンネル［ｅｓ］使ってんだ

：読心術は神のデフォルトですので

知らんかった。

：で、どうするってんだ？
攻撃が効かないカニバルにどうやって対処するんだよ？
わざと喰われて腹の中からなんとかしろってか？それとも転生者を抹殺するのか？

‥いえ、どちらも非効率的すぎますので
こちらから対カニバル専用の転生者を送ります

対カニバル用転生者ってなんぞ。

‥カニバルは先ほど言った通り生きた亡霊ですので
浄化プログラム・・・成仏させるためのものです。そのプログラム
をデバイスに組ませた転生者をそちらに飛ばします。
カニバルについて最もよく知るあなたが現地でうまく扱ってくださ

‥ちょっと待て
ようはカニバル対策をした転生者をこっちに送るってことだろ?
俺が扱うってどういうことだ。そいつらに任せればいいんじゃない
のか?

‥言ったでしょう?
カニバルを一番知っているのはあの世界にいる転生者でもあなただ
けなんです
それに転生者の方は魂と記憶の破損が酷かったので
色々手を加えてユニゾンデバイスにしたんですよ
というか、その人自身にカニバルの浄化プログラムを組み込んだん
です

人にプログラムを組み込むって、正気かアンタ。

：存在がプログラムなので。見たらわかりますよ？

：で、そいつとユニゾンしてやってけと

：ええ

面倒になってきたな・・・。

：すみません
お詫びとして、あなたが今受けているサイレンス化を

：いや、サイレンス化の解除はいい

：なぜ、です？

：俺は、自己満足って言う罪を犯したんだ
これを解いたら、その罪もなくなっちまう
罪は罪として、償いたい

：わかりました
では代わりにこれを

少し悩んでから俺の主張を受け取った神は、そう書いて小さな笛を渡してきた。

：これをあなたが吹けば、私の元へ来れます。必要になったら使っ

てください
ちなみに使い捨てです

なるほど。つまりは願いをもう1個叶えられるってことだな。

‥では、そろそろ戻しますね
ユニゾンデバイスは直接あなたの元へ送るので、説明は彼女らに聞いてください

ん?彼女“ら”?複数形なの?

‥はい
では、送りますね

ん?覚えのある浮遊感。

ってか、また落下オチかよぉぉぉおおおおっ!!

畜生あの神!!帰ったら変な語尾をつけてしまう呪いをかけてやるからなぁぁぁぁぁ!!!

・・・っ！！

・・・・・・・・・・。

・・・・・・・。

・・・・。

気がついたら俺の部屋。
時計を見る。朝だ。

・・・・・・夢？

いや・・・何か持ってる・・・？・・・・・・・あの神からもらった笛だ・・・。

てことは・・・現実か。

現実ってことは、俺はこれからカニバル狩りをしていかなきゃなんねぇってことだよな・・・あ、神からカニバルの現在地がわかるようなものがあるか聞いて、あったら貰っとけばよかったかな・・・くそっ、しくったな・・・早速笛使うか？
でもな・・・ここで使って、必要な時に使えなくなるのもなぁ・・・。

うーん・・・まいった。

・・・つか、起きてから思ったんだが、おふくろが俺の髪を引っ張ってやがるな・・・おふくろ、まだ時間はあるんだし、そんな起こし方すんなよ・・・・・。

「　　　　！　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　！！」

・・・・・・は？

えっと、待て待て。予想外すぎて読唇術での読み取りに失敗した。

・・・なんで、闇の書の闇の欠片である闇統べる王・・・ロード・ディアーチェがここにいる？

なんで、ロードがねんどろいどサイズにまでちっさくなっている？

なんで、俺はそんなロードに怒られている？

「　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　！！」

『いい加減聞かんかこの戯け！！』

なんで俺の額を蹴るし。

・・・ん？

「　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　？」

『ねぇ、こんなのでいいかな？』

「　　」

『伝われば問題ないかと』

いや、問題大ありです。

なんで星光の殲滅者・・・シュテル・ザ・デストラクターと雷刃の襲撃者・・・レヴィ・ザ・スラッシャーまでもがねんどろいどサイズになっている？

サイズの割には俺のシャーペンを持ってるし、紙になんか書いてるし。

そしたらシュテルとレヴィが、そのなんかを書いた紙を2人で持って運んできた。

：神の使命によってカニバル対策のためにやってきましたよろしくお願いします

紙には、そう書かれていた。

――――はぁぁぁぁぁあああああっっ！！！？？

## e17．神さん久しぶり。そしてはじめまして（後書き）

カニバルのことが一部わかったのとなぜかのマテリアルズ登場の回でした。

カニバルの謎についてはまたしばらくして判明・・・する予定です。

次回はマテリアルズの解説回。なんでねんどろいどサイズになってるかもわかるよ！

うーん、この展開についていってくれる人っているのだろうか・・・？オリキャラって、あんまり出しすぎるとついてきてくれる人がいなくなっちゃうっていうしなぁ・・・。

ではでは～

## e18．マテリアルズ（ぷち）

‥シュテル・ザ・デストラクターと申します
これからお世話になります、ノゾミ様

‥レヴィ・ザ・スラッシャー
よろしくねー！

‥我はロード・ディアーチェと言う
この我の下で働けることを光栄に思うがいいぞ

‥何偉そうにしてんだよ

書いた後ロードにデコピンを加える。
ねんどろいどサイズのため、デコピンですら車に跳ねられるような強さになるようだ。よく飛ぶよく飛ぶ。

ちなみにシュテルらプチマテリアルズ、筆記用具にはシャー芯に紙を巻いてのりでくっ付けた俺特製のミニ鉛筆を使ってる。太さ0．5ミリで長さが自身の身の丈近い特製鉛筆を持っていっぱいいっぱいに書くシュテル達の姿にちょっとかわいいと思ったのは内緒だ。

おふくろはプチマテリアルズを見て最初は驚いていたものの、すぐに受け入れた。適応力だ高いと言うべきか、それとも特に考えてないのか。

「　　♪」

『忌束ノゾミよ。よろしくね、かわいい妖精さん達♪』

「「　　」」

『『よろしくお願いしまーす』』

吹っ飛んだロードが戻ってきて『何をする貴様ー！』と言ってきてるのを読み取ったが敢えて無視。

さて、そろそろこの謎なプチマテリアルズについての解説をしよう。

前回のラストでわかってると思うが、彼女達は神によってカニバル対策のために転生させられた、ユニゾンデバイスに生まれ変わったマテリアル達である。

で、なぜねんどろいどみたいなちっさい状態なのか。

それは、持ち運びである。

まあ早い話が、いつどこで遭遇するかわからないカニバルに対して、いつでも戦えるようにということらしい。確かにこのサイズならば、制服のポケットに入れて運ぶことができる。ちなみにこれが素の大きさということで、これ以上大きくはなれないそうだ。

前述のようにユニゾンデバイスであり、マテリアルが俺にユニゾンし、それぞれの力を得る。

射砲撃に長け、遠距離戦闘に特化したシュテル。

速攻性が高く、近距離戦闘に向くレヴィ。

そして広域魔法に優れるロード。

これらを状況にあわせてうまく活用しろとのことだ。
ロードの出番が一番なさそうだと素直に書いて、色々怒られたのはついさっきの出来事。

しかし制約じみたことがあり、マテリアルとのユニゾンはそれぞれ一度ユニゾンしたら解除後丸1日時間を置かないと再度ユニゾンすることができないらしい。ユニゾンすることがまずないだろうとは言え、乱用は禁物である。

まあざっと書けばこんなところか・・・？あ、ちなみにユニゾンしている間は融合騎が使っていたデバイスを扱えるとのこと。ガーディアンとの重複も可能なようで、そう考えたら結構強い。

ちなみにおふくろには、依頼で預かっているユニゾンデバイスだと説明している。

：キリ、早く食べよーよー
学校遅れちゃうぞー

：会って初日、というか、キリと呼ばれるのは今までの中で初なんだが

：それより、早く食べましょう。遅刻しますよ？

：つーか、ここに来たばっかりのお前らが学校の時間を知ってんだ

：お前ら転生者の行動はいくらか神が観察しておるからな。我らにも教えられたのだ

見てたのかよ。
って、転生者には女性もいるだろ多分。それってストーカーと言わないのかそれって。

あと、サイズ的なこともあるんだと思うが、米粒2粒で食事が済むって、お前らどんだけハイブリッドなんだ。経済的すぎて感動するぞこのやろう。

って、やべっ、もうこんな時間じゃん！

で、なんとか遅刻することなく登校できたのだが。

今、俺の頭にワシャワシャと違和感を感じています。
原因はシュテルとレヴィとロード。レヴィとロードは家を出る直前にそれぞれ、

『バレないように隠れながら潜入する。ス〇ークみたいでカッコいいじゃん！』

『我はいついかなるときでも、頂点に立つ者なのだー！』

とアホなこと言って髪の中に潜り込んだ。シュテルはそんな2人のストッパーである。ツンツクヘアーの上にフード被ってるからおかげでバレてない。

だけど違和感がすごい。なんていうか、頭の上に何かを乗せてバランスを取る芸をやってるような感覚。勝手に注意が頭に行ってしまう。

頼むからお前ら、目立つ真似はすんなよ・・・。

授業中。あいつらが余計ガサガサやってる。そして前に出ようとしている。

・・・あ、そうか。コイツらにとって当たり前の日常すら新発見の連続なんだな。コイツら、闇の欠片として生まれて1日も経たずに消されたんだし。

・・・でもだからってフードの中から飛び出すなよ。

特に、身を乗り出しているであろう1名！

――が、視界に飛び込んできた。

瞬間、俺は素早く左手でキャッチ。

‥どうしたの？

‥ハエがいたから捕まえた

なのはに誤魔化す。バレてない。

なのはは理解したようで授業に意識を戻す。

‥何してんだお前はぁぁぁ！！

そしてキャッチしたそいつを睨みながら八つ当たりするように書いた。

案の定、落ちてきたのはレヴィだった。

声を出す訳にもいかず、かと言って筆談のために出る訳にもいかないレヴィは、そのちっさい両手を合わせて謝るしかない。

ったく、ヒヤヒヤしたぞ。割とマジで。

‥袖から入って、今度は落ちないようにしろよ

コクコクと頷いて、レヴィはコートの袖に潜り込んだ。

後はマテリアルズがガサゴソしてること以外はいつもと同じ。夢日記の未来を変えて、そのまま帰宅。

で、帰宅後に転移魔法で適当な無人世界へ転移。
ここで何をするのかと言えば、ユニゾンのテストである。
連続使用はできないっつっても、さすがに1回ぐらい試しをした方がいい。

そうだな・・・試しにユニゾンするのは・・・。

‥シュテル、いけるか？

‥はい、問題ありません

シュテルを選んだ。射砲撃は早めに慣らしといた方がいいだろう。

ガーディアンをセットアップ。俺はこれで準備完了。

シュテルは元からバリアジャケット姿なので常に準備万端。

シュテルが光って俺に入り込む。
『ユニゾン・イン！』とか言ってるんだろうけど、何にも聞こえないまま身体にめり込んできたからかなりシュールに見えた件。

光が収まる。

身体確認。バリアジャケット、変化なし。髪の色、ちょっとだけ茶色っぽくなってる、それだけ。目の色、鏡忘れた・・・。

・・・何か変化した？

：瞳の色がシュテルと同色になっているぞ

そうなの？
あ、言い忘れてたけど、普段の俺の瞳は黄色。

：では魔法のテストをするぞ
まずは杖を出せ

どうやって出すの？
イメージすりゃいいのか？

イメージしてみる。シュテルの元であるレイジングハートはこんな感じだったかな。それの色が変わってこんな感じで・・・。

出てきた。

取る手がないので落ちる。

シーリングモードの、杖の先っちょのとんがった部分。あれが足に刺さる。

超痛ぇ・・・。

「　　！」

『何をしてるのだこの馬鹿者!』

痛いのには変わりないよ・・・でもユニゾンしたのがロードじゃなくって助かった。
杖の先の剣十字が刺さったらどんだけだったのだろうか・・・。

：それより早くテストやろーよー

そうだった。

じゃあ早速アクセルシューター・・・じゃなくて、なんだっけ?

：パイロシューターだよ
殲滅華球の方がカッコいいと思うけどなぁ

その考えを人は厨二病と呼ぶのだろうか。
というかレヴィ、アホの子の癖によく漢字を多様するのな。

まあいいや。それよりテストの方に集中・・・。

・・・待て。そういやコイツらのデバイスって、思うだけで簡単に魔法使えるっけ?
音声入力とか、その辺必要じゃね?ガーディアンじゃないんだし。

：どうやら魔法が発動されるのか不安のようだな

：なぜわかる。よく考えたらレヴィの時もそうだが

：シュテルがおぬしの考えを読み取って言ってくるのでな

ユニゾンって便利だな！？

：だから余計なことを考えずとも、使う魔法を思い浮かべるだけでよい

りょーかい。じゃあ頼むぞシュテル。

魔力を込め、魔法をイメージする。

パイロ・・・シューターッ！！

次の瞬間。

３０近い魔力弾が飛び出した。

唖然とした。

しかもシュテルがコントロールしているため、勝手に複雑な軌道を描きながら、最後に一斉に衝突して爆ぜた。

えーっと、シュテルさん。

試し撃ちで３０も一気に出しますか？

ん、レヴィがなんか書いてる。

‥シュテルが
「コントロールは基本私ですので、言ってみれば私の練習です」
だって

さいですか。

でもねシュテル。練習のために消費する魔力が俺のだっていうのは、
どうかと思うんだ。

その後はブラストファイヤーを数発撃ったりして、ユニゾンテスト
は終わった。

というか結局、ユニゾンすること以外は一方的に俺の魔力が吸われ
るだけだった気がする。

## e18．マテリアルズ（ぷち）（後書き）

マテリアルズの解説とマテリアルズ学校に潜入するの回でした。

ぶっちゃけて、連続使用不可の制約は大した影響しません。３人いるし。

本文の通りにロードの出番が少ないなんてことがないようにしたいです。

マテリアルズがそもそも出番が少ないとか・・・言えない。

## e19．サイレンス対チート（前書き）

お気に入り登録数が１０００件を超えるようになりました。

うーん、何か祝いのものをしたい・・・。

考えるか・・・。

## e19. サイレンス対チート

マテリアルズが家に来て約1週間。

GWはもっぱらリョウ家でデバイスマイスターになるための勉強に費やした。

原作キャラと関わらないようにするには一番いい過ごし方だったから、というのが理由の1つである。

だがおかげで、勉強は随分先まで進んだ。今ならアドバイスありでなら、簡単なストレージぐらいなら作れる。

そんな感じの連休を過ごし、連休明けの学校。

授業が退屈なのは変わりない。だが寝ることはなかった。ここ最近は授業中でも寝ていない。

理由は2つある。1つはなのはという脅威。時々管理局の仕事で休むなのは達だが、そんなの稀だ。それに、なのはが休みの日は変わりに左斜め前のアリサが睡眠の妨害に入ってくる。そのせいでロクに眠れない。

それともう1つはマテリアルズの存在、筆談相手ができたことである。

マテリアルズもただ見てるだけでは飽きがくる。しかしだからと言って遊ぶとかは色々タブー。

なので、彼女らを机の中に潜り込ませ、その中で筆談させることにしたのである。俺も筆談に参加する。何も見ずに、しかも左手で書き込むという無駄スキルがあるんだぜ俺には。さすがに内容はちゃんと見なきゃならないが。

この2つの要素によって、俺は授業中も起き続けるようになったのである。授業?見てもいないけど何か?

そんな感じで、校内での生活が僅かに（ホントに僅かだが）充実してきた昼休みだった。
飯も食い終えて、マテリアルズの話相手になってやろうかと机の中に手を突っ込んだ時に、そいつは来た。

バンッ！という音がしただろう。特に机の中にいたマテリアル達の被害は甚大なはず。
その、机に手を叩きつけて音を出したのは・・・神崎だった。

「　　！」

『サイレンス。屋上に来い！』

・・・コイツ、俺が音が聞こえないのを知ってて、わざと口で言ってやがるからな。
ってか、まだサイレンスなんて呼び名使ってんだ。なんつーか、哀れに見えてきた。

なのはやフェイトらの心配するような目。かわいそうな人を見る目。
それもコイツは自己解釈で『不良のサイレンスと話なんて拓也大丈夫かな、心配しちゃう』なんて思ってるとか考えてそうだ。チラッとなのは達を見た神崎（バカ）の顔がそう主張してる。

コイツがなぜここまで低脳なのか、検証したくなってきた。

‥別にいいけど

右手で回答を書いてその紙を神崎に見せる。そして左手は机の中で紙に『少し待っててくれ』と書いておく。

さてと、面倒だがついてくか。シカトしたら余計に面倒臭いことになるし。

で、屋上。

昼食の時間はすぎてるからなのか、コイツが統制する『チーム神崎』とか言うグループの部下が入らせないようにしたのかは謎だが、誰もいない。

‥で、何の用だ?

そう書いたメモ帳を見せると、神崎はそれを奪い取って書き始めた。そして書き終わったそれを俺に見せてきた。

‥なのは達の弱みを握り、会話や笑顔を強要させるな!!
俺はそんなこと絶対に許さないぞ!!

・・・はあ?
何書いてんだコイツ。いよいよ頭が終わったか?

だいたい、弱みってなんだよ。そんなのあって俺が握ってたらなのはの暴力を封じるのに使ってるわ。

‥色々意味がわからん。俺は何もなかったらずっと黙ってるし。アイツらから話しかけてくるんだよ。笑顔なんてしてる人の勝手だろそもそも、弱みってなんだ弱みって

‥とぼけるな！
俺に惚れているなのは達が、お前みたいな不良に話しかける訳がないだろう！！特にすずかなんて呼び出してまで強要させているじゃないか！
お前が何らかの弱みを握って、なのは達に脅しかけている証拠だ！

まあ、不良なのは認めるよ。許可貰ってるとは言え現在進行形でコートを着続けてるし。たまに無断欠席するし。
だが意味のわからん言いがかりをつけられるつもりはない。
それにさ・・・自分から惚れているって、よくそんなこと堂々と言えるな。
それに字が超汚い。読みづらすぎる。

‥とりあえずその被害妄想？と馬鹿げた自信ですでにお前は世紀末早急に病院へ行くべき
というか、病院が来い

‥それはこっちの台詞だな
障害者は音のない病院で、ただ字だけを読んでればいいのさ

・・・これにはプッツンときた。

俺は神崎（バカ）の右手を素早く引き、右腕を両手で掴んで背負い投げをした。確か、背負い投げの中の1つ、一本背負いだったか。

神崎（バカ）は呆気なくぶっ飛ばされ、地面に叩きつけられる。

だがバカはすぐに起き上がってきた。

「　　！」

『何をする貴様っ！』

：全世界の障害者に対する不適切な発言だ阿呆

次同じこと言ったら処刑な

無限回廊にぶち込んで、静かに廃人にさせるぞ。

「　　」

『む、確かにはやても足に障害があった頃もあったしな・・・こんな発言をしたら好感度が下がってしまうか』

丸聞こえだぞ。

好感度って、恋愛ゲームのつもりか。マジで引くわー。

ホントに病院が来ないかな。

「　　」

『いやぁ、すまない。おかげでいいことを思い出した。よって今回のはチャラにしよう』

触んなという意味を込めて、肩を掴んでくるバカの手を払う。

‥おっと、書いた方がいいんだったな

君のおかげでいいことを思い出した。よって今回のはチャラにしよう

わざわざ書き直してきた。

読唇術があるの忘れてんのか？

それから神崎は上機嫌で屋上を去って行った。

何だったんだ結局。

そう思いながら、俺も教室に戻ることにした。

俺が教室に戻ると、なのは達5人が待っていた。

シュテル達に待っててくれとは書いたが、コイツらに書いてはないハズだ。

：キリヲ、大丈夫だった？

：アイツの言ってることが馬鹿馬鹿しすぎて病院が来ないかと思った。

：具体的になんて言われたのよ？

：俺がお前らの弱みを握って、会話とか強要してんじゃねえかとか言われた

：やっぱそないなことやったんか

私達にも似たようなことでキリヲ君に笑顔向けることを強要されてるんじゃないのかって言うてきたんよ

お前らも言われてたのか。

となると、アイツ本気でなのは達を守ろうとしてんのな。よくない方向性に向かってそうだが。

：特にすずかがよくこっち来るのが気に食わない様子だった

：そういえば、すずかちゃんがよくキリヲ君とお話するのって、なんで？

：あー、それはななのはちゃん

多分すずかちゃんはキリヲ君のことが

‥何でもないよ!!

すずかがはやての書き込みに割り込んだ。顔真っ赤で。
え、なに?まさか、そういうことなの?

・・・まっさかぁ。うん、ないな。だって俺だし。フラグなんて立てた覚えもないし。神崎は立てようとして失敗の上に気づいていないみたいだけど。

‥まあそれはいいとしてだ
お前ら、しばらく俺に話しかけるのを控えてくれないか?

‥え、なんで?
私達はキリヲ君との会話は楽しいと思ってるよ?

‥そうじゃなくて
神崎に突っかかれるのが嫌なんだよ
できるだけ面倒になりたくないし、だから原因であるお前らとの会話を控えてほしいってことさ

これは嘘ではないが、理由はもう1つある。

前から思ってたなのは達との接触頻度の調節。この期に実行しようと思う。

・・・正直、もう手遅れな気がしてならないが。

：なに、そんなこと？
ならあたし達がキリヲを守れば解決じゃない？

予想の斜め上を通過する回答がやってきた。
手遅れとかそういう次元じゃない。

：そんなことになったら、俺がカッコ悪さでマッハなんだが

女子に守られる男って・・・カッコ悪っ。

：問題ないわ
あたし、腕っ節は強い方だから

どういう理論だ。

・・・あれ？そういやコイツらの強さってどんだけだっけ。

・・・・・・。

通称“悪魔”“魔王”のなのは。

転生前に読んだ二次小説では“金色の死神”なんて呼ばれることもあったフェイト。

“歩くロストロギア”のはやて。

その辺の男子より圧倒的に強いアリサ。

過去に俺の睡眠妨害のため幾度となく広辞苑をハンマーとして扱ってきたすずか。

・・・1名変な気がするが、それを考えてもコイツら強すぎる。

というか、俺が弱いのか？

若干鬱になった。

結局俺が説得して、守りの話をなしにする代わり関係はこのままということになった。

・・・どうやらもう、俺と原作キャラは切っても切れない状態になったようだ。

## e19．サイレンス対チート（後書き）

自分でも何が書きたかったのか不明な回でした。
何書きたかったんだ俺。

さて、ありがたーい指摘をたくさんいただいているこの作品。

しっかりと読んでくださっている証拠であり、こちらの未熟な部分がよくわかる、ホントにありがたいものです。批評というのは。
勿論、ちゃんとした主張のあるものや的確な指摘のあるものに限りますけどね。
これを糧にして、より向上できたらいいなと思います。

ただ、自分の耐性が紙なゆえに批評を読むたびに鬱っていきます・・・。

なのでできるだけ、批評は来ませんように！

主張がある場合には遠慮なく言ってくださいね！
遠慮はいりませんよ！ただ僕の鬱が悪化していくだけだから！

ではまた次回！

# e20．マテリアルズの1日

―ｓｉｄｅ・シュテル―

皆さんはじめまして、シュテル・ザ・デストラクターです。

あの神を名乗る男性から使命を受けて転生されてからまだ日は浅いですが、とりあえずこの小さな身体には慣れてきました。

最初は大変でした・・・この身体単体では飛行と念話とユニゾン以外の魔法は完全に無力なので。それに小さくなった分周りが広くなりすぎて、移動に手間取ったり。

まあ、そういうのとこんな身体で外に出ることは不可能なこともあって、私達マテリアルズは基本常に忌束キリヲ――私キリヲと呼んでいます――と一緒にいます。

さて、朝です。

私達は小さすぎるために私達のベッドはありません。代わりに、バスケットの中にタオルを敷いた場所。そこが私達の現在の寝床です。意外と快適ですよ？ハンカチを掛け布団にしています。場所はキリヲの部屋です。

・・・ふぁ。

私達の中では・・・というか、この部屋の中でも私が一番早起きです。続いてキリヲかロード、最後は決まってレヴィという形です。

バスケットから出て、飛行魔法で部屋を飛びます。ちなみに、現在の私の服装は防護服ではなく、ノゾミ様が私達のために手作りしていただいた特製パジャマです。洋服とかも手作りしていただいて、ノゾミ様は本当に優しい方です。

少し眠気が残る、フラついた軌道を描きながら窓へと進みます。ちょっと眠気で危ないですが、私の日課です。
窓の元に辿り着き、閉まっているカーテンは私の力でどうにかできるものではないので、くぐっていきます。

そうしたら今までの暗い空間から一変。急な変化に少し眩しさも感じます。

「んぅっ・・・〜〜〜っ」

その明るさを前にして軽く伸びをする。
これが私の朝一番の日課です。これで眠気をスッキリさせます。

さて、眠気もスッキリしましたし、キリヲ達を起こすとしましょう。

身体の小ささに比例して、力も小さな私にとって、身体が大きなキリヲを起こすのは一苦労です。普通に起こそうとしても、まず無理です。
ですから、私は普通とは少し違う起こし方をします。

必要なのは、どんな家にもあるティッシュ。
それを一枚取り（その一枚を取るのも一苦労です）、そのティッシュの角を捻って尖らせます。

完成です。

これを持ってキリヲの顔に着地。
そして、キリヲの鼻の穴にティッシュの先端を向け・・・。

「ほっ、はっ、とぅっ」

穴の中を突っつきます。

早い話、くしゃみを誘ってます。これが限界なんです。
くしゃみされて私が吹き飛ばされないように、いつでも離脱できる態勢をとってます。

・・・この無駄な駆け引きに、楽しいなんて思ってませんよ?思ってませんからね?

・・・!そろそろですね。
離脱します。

直後、キリヲが勢いよく起き上がってくしゃみしました。

無音の呪いを受けたというキリヲが、数少ない音を出す瞬間です。
どうやら、声帯が動かなくなったのではなく、本当に呪いの一種みたいなのです。
ちなみに、あと音を出せる瞬間と言えば、ため息や欠伸・・・は未検証でした。とにかく、息と共に勝手に出てくる音は出るようです。

：おはようございます。キリヲ

私がそう書かれた紙を持ってキリヲの前に飛ぶと、キリヲはだるそうに頷きました。

さて、このくしゃみでロードは起きたでしょうし、後はレヴィを起こしますか。レヴィったら、私とロードの2人がかりでも起きるのがギリギリですからね。

さて、全員が起きて、朝食です。

私達マテリアルはプログラムなので、食事を必要としないのですが、ノゾミ様やキリヲのご好意でいただいております。
と、言っても、私達のサイズがサイズなので、米粒を数粒いただいただけでもう十分ですが。

今回は米粒2粒に、ふりかけの粉を数粒いただきました。

はむっ・・・このふりかけ、卵味なのですが・・・あむ・・・なかなかいけますね・・・モグモグ。

ロードも私と同じく2粒。しかし、レヴィはなんと4粒も食してます。その身体のどこに4粒も入るんですか・・・。

ごちそうさまでした。美味しかったです。今度、また別のふりかけでも食べてみたいですね。

さて、朝食も終わってキリヲは学校へ登校です。私達も、いつ出現するかわからないカニバルに備えてキリヲについていきます。

レヴィ、ロードはいつもキリヲ髪に潜り込みます。コートのフードのおかげでバレる心配は少ないですが、不安要素がないとは言い切れません。2人のストッパーとして、私もそこに潜り込みます。

・・・決して、意外とあったかいとか、髪の毛のフサフサが気持ちいいとか、そんなことは思ってませんからね。本当ですからね？

とにかく、出発です。

さて、授業ですが。

最初はレヴィやロードも興味津々で見ていた授業も、その次の日から飽きたと言い出すようになりまして。

現在、私達はキリヲの机の中で筆談をしています。

案外広いです。適当な紙と、私達専用の特製鉛筆をもらって筆談したり、たまに机の中に入れられるプリントを解いてみたりします。

筆談をせずに個人で自由にしている時は、私はフードの中に戻って授業を見たりします。ちなみにレヴィは絵を書いたりロードと共に遊んだり。ロードはレヴィの遊びに付き合う他は寝ることが多いです。

《ロード。この問題はどう解くのですか?》

《む?ふむ・・・・・主人公はこのように申しているのだろう?ならその後の、ここからここまでの文を使って・・・・・このように解けば、２０字に収まるであろう》

《なるほど・・・》

今国語のプリントの問題を解いているのですが、正直、文系はあまり得意ではありません。特に何文字以内に収めて~みたいな問題が苦手です。なので念話でロードに教えてもらいながら問題を解きます。

《大体この手の問題は、問題となる文の前後に答えとなる言葉が入っておる。そこを注視すればよい》

《はい、わかりました》

ちなみに、ロードは私とは逆に理系が、レヴィは全般的に苦手です。ロードはともかく、レヴィには少し勉強を教えた方がよろしいでしょうか・・・。

昼食。キリヲは弁当を食しますが、米粒単体を持ち運ぶことができないため、私達はキリヲの弁当から少しだけ分けてもらっています。前述の通り私達はプログラムですので、その気になれば昼食を抜きにすることぐらい可能な訳なのですが、「それはないだろう」というキリヲとノゾミ様のご好意により、こうして昼食もいただいています。

しかし、ここで問題となるのが、その昼食の確保です。こんなんなりですので、誰かに見られてはなりません。だからと言って、キリヲに渡してもらっては、キリヲの行動を疑われてしまいます。

ですので、誰にも気づかれないように、昼食の米粒を手に入れる必要があるのです。

私達3人揃って、コートの袖口の中でスタンバイ。

《準備はいいですね？》

《うん！》

《うむ》

レヴィとロードに確認を取る。後は、弁当を開いたらできるだけすぐに弁当箱の元に行って米粒を回収するのみ・・・。

しかし弁当の包みを開けるキリヲの手は、開ける前に止まりました。

《あれ？》

《っ！袖に掴まるのだ！》

直後、私達のいる袖口が急に揺れ出しました。
私達は袖に掴まって、なんとか振り落とされないようにしてますが・・・正直キツいです。
ロードがいち早く気づいてなければ・・・おそらく、外に飛び出されてしまいました。

外の方を見ると、袖口は床を向いていて、その床がスクロールされていきます。どうやら移動しているみたいです。
途中からスクロールしていく物体が階段に変わっていることを見ると、おそらくは屋上に向かっていると思われます。

キリヲが自ら屋上に向かうとは思えませんし・・・アリサ・バニングス辺りの人が屋上に引っ張り出そうとしているのでしょう。

ガチャリ、という扉の開く音。
そして、風や小鳥のさえずりの音が聞こえはじめました。

「キリヲを連れてきたわよー」

バニングスの声が聞こえます。どうやら予想は当たりのようです。

しかし、困りましたね・・・・・・これでは、昼食を食べれません・・・。

《どーしよー！？このままじゃご飯食べれないよー！》

《ええい、うるさい！我だって早く食したいのだ！今日のふりかけはすき焼き味なのだぞ！》

すき焼き味・・・すき焼き味・・・！

ああ・・・このままでは、本当に食べることが・・・・・・！？

《レヴィ！？どこ行ったのですか！？》

いつの間にかレヴィの姿がありません。まさか、我慢できずに飛び出してしまったと言うのですか・・・！？

《ん？呼んだ？》

《・・・あれ？》

・・・と、思ったらレヴィが先ほどの場所にいたままでした。

《おぬし、もう行ってきたのか・・・？》

《何言ってるの？僕はずっとここにいたじゃんか》

・・・・・・？

おかしいですね・・・確かにさっき、レヴィの姿はなかったのですが・・・・・・。

《・・・！シュテル！おぬし、身体が！》

へ？

・・・・・な、なんですか!?身体が、消えて・・・!

・・・って、そういえば。

《って、なんだ。キリヲの才能がありましたね》

《ああ。そういえばそんなのがあったな・・・》

《あ、わかった!それで消えている間に取りにいこうよ!》

なるほど、それは名案です。
というか、今までそれを利用してこなかったのが変でしたね。
キリヲもおそらくそのつもりでしょうから、次に消えた人が行くということで・・・・・あ、ロードが消えました。

《今です、ロード!》

《言われずとも、行ってやるわ!》

そう言い残して袖口から（多分）出て行ったロード。
お願いしますよ・・・!

少しして、ふりかけがついた米粒がこっちに来ました。
袖に入ってきたところで才能の効力も切れたみたいで、ロードが米粒を持つ形で姿を現しました。

《やったー!ご飯ー!》

《フンッ、この我に感謝するのだな》

《はい、ありがとうございます、ロード》

私とレヴィはロードから米粒を貰います。

ああ・・・すき焼き味の茶色い粉がついている・・・・・・はむっ・・・美味しい・・・。

《ちょっと、そっちの方が粉多くでずるいよ！取り替えてよー！》

《何を言うか！我が取ってきたのだぞ、米粒を選ぶ権利は我にある！》

暴れないようにしてくださいよ、せっかくの昼食なのですから・・・・・モグモグ。

それから何事もなく、今日の学校は終了し、キリヲが下校。私達もフードの中に入ってついていきます。

なにもない日には、キリヲはよく翠屋という喫茶店に足を運んでいたそうですが、最近それも控えているそうです。なんでも、夜天の管制人格に見せる顔がないため、遭遇するようなことは避けているとか・・・。

私達はキリヲの生活を神に見せていただきましたが、転生する前日からしか知りません。

ですが、その話を聞かせてもらった時のキリヲの表情・・・罪悪感

に満ちたその表情が、何かを物語っていたのは確かです。おそらく、高町なのは達魔導師のみならず、誰に対しても避けるような行動を取る理由でもあるのでしょう・・・今日はバニングスに無理やり連れていかれましたが。

家に帰ってからは、夕食とお風呂以外はほとんど自由です。キリヲの仕事があった時はついて行きますが、仕事があることが稀なので。

夕食にカレーが出たので、米粒につけて食べました。

夕食を終えたら、入浴です。

「「「ふぅ～」」」

3人揃って息をつきます。

さすがに私達用の浴槽は作れないため、石鹸のケースが浴槽の代わりです。

そんな私達の前では、キリヲが身体を洗っています。

私達が入浴する時、キリヲも一緒に入ってもらってます。理由はいくつかあり、1つは一応の安全のため。

2つめは頭を私達の洗ってもらうため。私達では手が、頭に届かないんです・・・。

3つめ。ノゾミ様と一緒に入ったこともあるにはあるのですが・・・。

まあ、なんて言いますか・・・理想の身体を現実にしたみたいです

ね、っていうことです。え?意味がわからない?嫉妬したと言ってるんです。あの完璧ボディに嫉妬したんですよええ。
どうせ、私は一生チビのままですよ。発育しませんよ。・・・鬱になってきました。
それで、４つめ。今現在私が見ているものです。
キリヲの体中にある傷痕・・・話では、今は亡き父親から受けた虐待の痕だと聞かされましたが、むごいものです。
そしてこの傷と共に刻まれた、理不尽への憎悪・・・初めて見た時、それを背負う彼の姿が、その、カッコよく見えまして・・・それから、できるだけそばで見ていたいとも思いまして・・・。

ん、んんっ!と、とにかく、そういった理由があって、私はキリヲと一緒に入浴しているのです。レヴィやロードは知りません。

ちなみに、キリヲは身体を洗う時には傷を痛めないようにこするものは使いません。手で石鹸を泡立てて、それで塗るようにして洗います。浴槽には入りません。

自分の身体を洗った後のキリヲに私達の髪を洗ってもらい、入浴終了です。

さて、最後は就寝となるのですが。

今日、ノゾミ様が私達のために模型の家を買ってきてくれたみたいなのです。

ノゾミ様・・・あなた、最高ですっ。
で、現在キリヲがその模型の家を組み立てています。
とりあえずベッドは先に組み立てられたので、今日からベッドで寝ることができます。
ですが問題なのは家の方。組み立てが大変そうです。

：何をもたもたしておる！
早く建てんか！

：早く家に済みたいよ～！

急かす2人に拳骨を入れておきます。

：すみません。2人の言葉は気にしないでくださいよかったら手伝いますか？

：気持ちは嬉しいけど、無理だろ

・・・そうでした。こんな身体じゃ、材料を運ぶことさえ大変ですね・・・。

：すみません
組み立てはおまかせしますけど、無理に今日作りきろうとしないで

くださいね？

模型は本格的なもので、まず今日中に作り終えることはできないでしょう。しかし、キリヲならそれを徹夜してでもやりそうです。返答はなし。果たして、言葉は届いているのでしょうか・・・？

ふぁ・・・・・眠くなってきました。
レヴィやロードもいつの間にか寝てしまってますし、私も寝ることにしましょう・・・。ああでも、しっかり見ておかないとキリヲが無理を・・・。

あぁ、でも・・・無理・・・・・・・。

気がつくと朝になっていて、模型の家は完成してました。

キリヲは当然と言うべきか、すごく眠そうで、目元には隈ができてしまってます・・・。
まったく、だから無理に作りきろうとしないでくださいって書いたじゃありませんか。

でも・・・・・ありがとうございます。
この家は、大切に使いますね。

さて、今日も1日が始まります。

## e20．マテリアルズの1日（後書き）

タイトルそのまま、そしてマテリアルズがマイホームを手に入れたの回。

でも多分マイホームの出番はないだろうという悲劇。

やっぱりシュテルがしっかり者。ロード、レヴィと順に駄目っ子になっていくというテンプレな感じ。

## e21．因果応報と言うべき、かな・・・

皆さん、突然ですが大変です。
え、何が大変なのかって？
いや、とりあえずは俺の頭の上なんだが。

「♪」

すごく上機嫌で俺に抱き付き、俺の頭に頭を乗っけてくる、金髪の少女。

近くでマテリアルズがその頭をどかすよう言うが、この子は聞く耳を持たず。

で、そんな俺達の前では・・・、

「　　」

「　　」

話し合う、おふくろと紫の髪の女性。

え、なんて言ってるのか読み取れ？

まあ待て。その前に一旦説明しようと思う。
こうなった理由を、さ・・・。

それは・・・ほんの1時間ほど前のことだった・・・。

今日は休日であり、俺は買い物に出かけていた。

母さんはキャバ嬢として基本夜はいない。よって晩飯は俺1人だし、今までおふくろの作り置きだったが最近は自分で作るようになっている。結果として、こうして食材の買い出しも結構俺1人でやるようになっている。

さて・・・今日の晩飯は何にすっかな・・・。

そんなことを思いながら歩く。

・・・・・・ゴフゥッ。

誰かにタックルされた。誰だ。

・・・・・・・・・ん?

おっかしーなー。俺の目が悪くなったのかなー。

9歳児のフェイトがいるよー。
フェイト（？）が顔を上げた。
「　　！」
『久し振りだね、キリヲお兄ちゃん！』
・・・ホワッツ？
え、お兄ちゃん？え、待て待て。お兄ちゃんって、どういうこと？
え、俺、フェイトのお兄ちゃんになったっけ？同い年なのに？
いや、待て。なんか思い出しそうな気がする。なんか随分前の何かが・・・・・・。
・・・・・・・・・・・・・・・あ。
理解したかも・・・・・・・。
ゼンマイ巻かれたロボットみたいに、ゆっくりこの子の後ろを見る。
「　　」
『久し振り、キリヲさん。４年振りかしら』
すっげー見覚えのある女性が、笑顔で会釈してきた。
同時に、将来のバッドエンドが半分以上は確定的だと思った。

な・ん・で！プレシアとアリシアが海鳴市に来てんだぁぁぁ！！
言葉が出ない。言葉は出せない？違う違う。言葉が出ない。
あまりの展開に愕然としていると、プレシアの方からやってきた。
「　　」
『ふふっ、驚いたかしら。私達も、あなただとわかった時は驚いたのよ？でもアリシアはすぐに喜んで駆け出したんだから』
そんなプレシアの言葉は耳を通過するのみだった。
そして俺はメモ帳を取り出して、手早く書くことを書く。
で、見せる。
：少し訳ありで耳が聞こえないため、筆談でお願いします
そして聞きます
なんでここにいるんだぁぁぁぁぁ！！！
筆談というワードにあらあらと少し驚いているプレシア。
プレシアに見やすいようにしたため、未だに俺に抱き付くアリシアからは高さ的に見えない。

プレシアはそのメモ帳とペンを受け取って書き出した。

：虚数空間に落ちたってことになってはいるけど、犯罪者だから管理局を避けながら生活していたの。
でもアリシアを学校に通わせた方がいいし、だから管理局が手出ししづらい管理外で、かつあなたがいる地球にしたのだけれど、海鳴市にいるだろうって見当以外であなたの居場所の手がかりがないから、運がよかったわ

・・・長文乙と言いたい、いや、書きたい・・・。

管理局が手出ししづらい、ねぇ・・・。

：残念ながらこの世界のこの街、管理局員がめっちゃいるぞ
フェイトもいるんだが

そう書いて返した時、プレシアの表情が少し歪んだ・・・気がした。
多分、フェイトの存在のところを読んだ辺り。
最初は失敗作への、偽物への憎悪だろうかと見たが、なんか違う。
悲痛そうな表情にその考えは消えた。こういう時にチャンネル［ｅｓ］が使えたらなぁ・・・。

まあそれは後の祭。

俺は買い物は中止にして、とりあえず話を詳しく聞くために家に連れて行った。

で、今。

居間では、おふくろとプレシアが談笑している。
最初こそプレシアとアリシアを不思議そうに見ていたおふくろも、
俺が知り合いだと言ったらすぐに警戒心を解いた。不用心すぎないか？

アリシアはさっきから胡座をかいている俺に背中から抱きついている。頭を俺の頭の上に乗せ俺と2人で母親2人の会話を眺めている。
マテリアルズはアリシアに頭をどかすよう奮闘中。アイツらにとって、俺の頭は鳥の巣みたいな感じで落ち着くらしい。もう俺はそれについて何も言わないことにした。

で、おふくろとプレシアは何を話しているのか。

全部ではないが、軽く読み取ったんだが、現在プレシアとアリシアはこの世界で住む場所を探しているらしい。
だが、庭園の損失と4年間の生活で資金は0に近い状態。
色々困っていたところで、俺と再会し、現在という流れになっているようだ。

で、おふくろの導き出した答えは・・・、

「　　♪」

『なら、ここで一緒に住みましょ♪』

予想通りとは言え、なってほしくない答えが来た。

どうやら、俺に死亡フラグが立ったようだ。

「　　」

『ええ!?いいのですか?』

「　　」

『キャバクラで働いていると、キリヲを1人にさせてばっかりでね。できれば一緒にいてくれる人がいたらな～って思ってたのよねぇ』

まさに好条件。断る理由がない。

だがプレシアはまだ悩んでいるようだ。まあ、人の家で厄介になるのには後ろめたさがあるようだ。

あ、おふくろがアイコンタクトしてきた。俺が説得しろってか。・・・道理だけど。

・・・うーん、だからって直接ここに住まわすのを誘うのはだめだな。死亡フラグの回避は諦めるとしても。

つまり、プレシア自身がはっきり言い切るような何かをすりゃいいんだな。よし、思いついた。

メモ帳にガリガリ書く。

：アリシアはどうしたいんだ？

これをアリシアに見せる。

直後頭に振動が来る。アリシアが何か言ってるみたいだ。

「　　」

『それじゃ、これから厄介になります』

「　　」

『いえいえ、こちらこそよろしくお願いします』

うちに居候ができた。

やっぱ親バカプレシアには、アリシアの言葉が判断基準になるようだ。

もう・・・どうでもいいか。元からリインフォースの件で死亡フラグかＢＡＤエンドフラグは立てているだろうし・・・・・と、遠い目をする俺であった。

## ｅ２１．因果応報と言うべき、かな・・・（後書き）

新たにキャラ加わりすぎな気がすると自分でも思えてくる。

でも、なかなか日常編というのを作れない。今書いてるのもシリアスだし。

日常編のネタ・・・結構切実に欲している最近のこの頃。

## e22. 情報は戦の結果を左右する

家に居候が2人できてから数日後。アリシアはおふくろの勧めで聖祥小学校に通うようになった。学校では自身の明るさからすぐ友達ができて楽しく過ごしているようだ。

俺は今日学校をサボり、ミッドのリョウ家に来ていた。
マテリアルズもいる。リョウ家とマテリアルズは何日か前に対面させており、仲良くしている。

だが今は、そんな空気ではなかった。

原因と言えるのが、俺達の目の前に展開されたモニター。
そのモニター内に記された文が問題だった。

‥どう思います？

コールが聞いてくる。

俺はその回答をメモ帳に綴った。

‥ああ
こんな被害、奴にしかできねえな

コールが依頼人だった時とは違い、現在は普通に話している。

で、俺達が見ているモニターには、最近のニュースが書かれている。
そのニュースの中で、最も大きく書かれているのがこれだ。

『無差別襲撃事件―被害者が軟体化。レアスキルか―』

5月15日、ミッドチルダサードアヴェニューの公園にて民間人、管理局員問わず無差別に襲われる事件が発生。
被害者は全員骨髄がなくなり黒いゴミ袋に入れられた状態で発見され、生命維持が困難なため現在聖王病院で延命されている。
目撃者の証言によると、犯人は黒い長髪の男性で、コートを羽織っている。年齢は20歳程。
犯人が被害者の顔を手で掴んだ瞬間、被害者が軟体生物のようになって崩れ落ち、その後ゴミ袋のような物が現れてそれに包まれたとのこと。
管理局地上本部はこの事件をレアスキル保有者による極めて凶悪な犯行として捜査している。（ニュースの内容を抜粋）

・・・この被害を見たら、確実にカニバルだな。
被害者がパイにされて喰われたことが書かれていないが、目撃者がそんなことを見ている余裕がなかったのだろう。

‥どうします？すぐにカニバルの調査、捜索しますか？

：いや、でたらめな捜索は意味ないな。こんなミッド全域の捜索なんでできる訳がない

：言われてみれば、そうですね

：だけど、調べたいことはある
案内を頼めるか？

：はい、喜んで

調べること・・・まずはあれかな。

事件のあった、サードアヴェニューの公園に来てみた。

だが当然のごとく公園には局員がいたため、俺は立ち入ってない。
道案内として車の運転を担当したコールも同じく。俺達2人は公園から少し離れた場所にいた。
そう、“2人”はな。

・・・お、来たか。

「　　」

『全く、小さいからって遊んではいけませんよレヴィ』

「　　」

『うぅ～・・・』

「　　」

『ほれ、撮ってきたぞ。感謝せよ』

各々言いながら戻ってきたマテリアルズ。

そう、ねんどろいど程度の大きさしかないマテリアルズに公園の風景を撮影してもらった。小さいから気づかれずに済んだようだ。レヴィについては後で説教しておくか。

さて、それよりも撮影した映像だな。

サードアヴェニューは今まで来たことはないし、覚えがない。しかし、公園で1つ心当たりになりそうなものがあった気がする。そのためにシュテル達に行かせてまで調べてみた。

さて、映像はっと・・・。

映ったのは、事件当時に戦闘があったのか荒れた状態の公園。所々、局員の姿もある。

‥どうですか？何か情報が入りそうですか？

シュテルが聞いてくる。

うーん・・・・・だめだ。アニメでミッドの公園が出たような気

がしたんだけどな・・・思い出せん。転生してからだいぶ経つし、随分知識が抜けてきたからなぁ。公園なんて、覚えてる訳がないか。

まあ仕方ない、もっと直接的な情報を探ろう。主に次に狙われる奴の限定・・・とか。

‥コール、また案内頼む

‥お安い御用で

次に訪れたのは、首都クラナガンからだいぶ離れた、廃れた街。その一角にひっそりと佇む、一軒の酒場だった。

‥あの、本気で行くんですか？

‥ああ。コールはここで待ってろ。シュテル達もだ。危ないからな

‥その危ない所に、キリ1人だけで大丈夫なの！？

この酒場はただの酒場ではない。

なんでもここには、世界一の情報屋がいるだとか。常連みたいで、常にこの酒場にいるらしい。取り扱っている情報は合法非合法関係なく、ほぼ全て。管理局の未公開情報なんてのもあるとか。

ここを使うのは初めてだが・・・一般公開されている情報だけだと限界があるからな。カニバルの発生範囲を特定するにはやむを得ん。

俺はコールとマテリアルズを待たせて、扉をくぐった。

酒場の中に入ってすぐ目に入ったのは、いくつも置かれてある円テーブル。円テーブル1つにつき椅子が4つ程備え付けられていて、酒を飲む客の姿が見える。どいつもこいつも柄が悪い。奥のバーカウンターでは、オーナーだろう人がコップを拭いている。

新たに入ってきた客――俺に、他の客が注意を向けてきた。中には殺気を立てる者もいる。

・・・さてと、いくか。

俺は適当にスキンヘッドの男に近寄り、前もって書いておいた紙を見せる。

‥筆談をお願いします
調べたいことがあるのですが、情報をお願いできませんか？

スキンヘッドだけでなく、その紙を見た円テーブルにいた者の視線がこっちに向かって来た。

「　　？」

『なんだお前。その口は一体何のための口なんだぁ？』

「　　」

『どうでもいいじゃないか。おいガキ』

スキンヘッドの向かい側に座っていたモジャ頭が言ってきた。

「　　？」

『人からものを乞う時には、相応の態度ってのが必要だ。わかるか？』

ニタニタ汚い笑みを浮かべるモジャ男。

俺はそれに対する回答を書き綴った。

：知識までなら

「　　」

『なら、やってみろよ』

言われて、俺はテーブルの中央に片手を置いた。

その手には、あるものが握られている。金？違うね。そんな釣れるかどうかわからないものではない、もっと確実なものだ。

・・・解放。

そっとその手をテーブルから離した次の瞬間、床から天井までを、1本の何かが貫いた。

テーブルを粉砕し、床と天井を貫通したそれ、鉄骨。廃ビルから三次減算で持ち込んできたやつだ。その鉄骨の1本に数字を戻し、元に戻しただけ。

男どもは、粉砕されたテーブルと突然現れた鉄骨に固まっていた。他の席の奴らも呆然としている。

‥こんなところです
どうです、情報をくれませんか？

俺は何事もないように尋ねた。

まあ、俺のやってることは簡単に言えば脅迫だ。力を見せつけて相手を怖がらせ、「こうなりたくなければ言う通りにしろ」。こういう場所での、典型的態度だ。

オーナーの男性がこちらを見ているが、その目には店のものを壊されたことに対する怒りとか、危険人物に対する恐怖は感じない。どうやら、『喧嘩酒場』とかって言う噂は本当らしいな。情報屋の噂も信用できそうだ。

・・・さて、奴らは・・・？

ああ、キレてるキレてる。
宣戦布告に等しい態度をとられて、このテーブルのみならず、他の野郎どももそうだ。デバイスを取り出している。

「　　」

『テメェ・・・いい度胸してんじゃねぇか・・・』

スキンヘッドが大斧型のデバイスを握る。

・・・めんどくさい。全部解放。

投げる。

瞬間。

数十の鉄骨が至る所に突き刺さった。

1つは他のテーブルを粉砕し、1つはデバイスを粉砕。いくつか人に裂傷を負わせたものもあるし、肩を貫かれて吹っ飛ばされた奴もいる。だが、死んだ奴はいなさそうだな。
スキンヘッドの方は、デバイスを砕かれた上に目の前ギリギリに鉄骨が突き刺さっていた。

ふぅっとため息。

辺りが阿鼻叫喚に包まれ出した中、ようやく思考が動いてガタガタし始めたスキンヘッドの顎を持ち上げ、紙を突きつけた。

：情報をお願いできますか？

「　　」

『ひ、ひぃぃぃぃっ！！』

スキンヘッドは口から蟹のようにブクブク泡を吹かせ、失神寸前。

・・・だめだ。コイツは使えそうにないな。

他の奴らも逃げちまったみたいだしな・・・情報屋ももういないか。

・・・・・・ん？

誰かが俺の肩を叩いてくる。俺は後ろを振り向いた。

振り向くと、ニコニコとした表情で拍手をする、オーナーがいた。

：これが、あなたが頼んだ一通りのデータですかね

：ありがとうございます

ガーディアンにデータを転送してもらい、礼を書く。

予想外だったな・・・オーナーがその情報屋だったとは。しかし、

それならここに常にいるという話も頷ける。

‥損害については気になさらなくてもよろしいですよ。ここでは強者が正しく、敗者に責任というのが決まりですから

‥すいません

『喧嘩酒場』と言われてるここは、力による格付けで成り立っている。弱者が強者の言いなりとなり、損害賠償も弱者が支払う。そういうルールだ。どうやらこのオーナーも、強者にだけ情報を公開するようにしているらしい。

‥喉が渇きましたね、水を一杯いただけませんか？

‥かしこまりました。

水一杯を飲んで、いくらかチップを置いて店を出た。

店を出てすぐ、コールに心配されたのは、まあ当然か。

## ｅ２２．情報は戦の結果を左右する（後書き）

２回目のＶＳカニバル。次回戦闘で決着です。

ここで書くことが思いつかない・・・結構悩む。

## e23．やっとマトモな戦闘になった・・・のか？（前書き）

カニバルとの戦闘回。

戦闘描写がヘタクソな件についてはご了承ください。

## e23．やっとマトモな戦闘になった・・・のか？

オーナーからもらったデータを見ながら、モニターに展開した地図に点を打っていく。

酒場のオーナーに頼んだ資料は、ミッドにいる転生者の住所だ。
まあ、そのまま転生者って言葉を使う訳にはいかないから、ここ５年程の間に管理局に入隊した魔力ランクが高いもしくは強力なレアスキル保有者の住所と尋ねた。転生直後が全員赤ん坊であれば、この問いが妥当だろう。

ふむ・・・。

万年人員不足とだけあって、案外答えがはっきり出てきたな。
なのはやフェイト、はやて、神崎の名前もあったが、それはどうでもいい。
それで残った人数は神が言っていた元の人数１３人から俺、神崎、あとすでに死んだ４人を覗いて７人・・・。
そのうちの５人であろう人物がヒットした。残る２人は、まだ入隊していないとかじゃないか？

その５人の住所を地図に点を打っていく。
そのそれぞれ住所から大体・・・２、３ｋｍ範囲の円を描いて・・・。
で、その円を含むようにさらに大きな円を１つ。

うーん・・・だいぶ範囲が広いな・・・魔力保つかな？

カニバルは自分の記憶や魂を求めてさまようから、その転生者の近

辺に網を張っとけば当たるというのは、粗方ハズレではないと思うんだけどなぁ・・・。

・・・しゃーない。これでいくか。

えっと、このでかい円の中心は・・・。

じゃ、行きますか。

円の中心となった場所・・・某高層ビルの屋上に立つ。

さて・・・ガーディアンに探索魔法をセット・・・発動っ。

グングン範囲を広げていく。魔法の使用は許可なしでやると罰則ものだから、この一発で見つからなければ面倒だ。魔法の無許可使用はもう何度もやってるが。

・・・・・・・・・。

・・・・・ビンゴッ！

場所は・・・少し遠いが大丈夫だ。転移魔法でいける。ガーディアンは攻撃系の魔法がからきしな代わり、補助系は豊富だ。

よし、行くか。転送！

転送先に着地。

前方約１０ｍにコートを着た長髪の男・・・カニバル１体を確認した。

腹のケースに、大量のパイが入ってる・・・被害者だな。結構多い・・・。

「　　」

『敵・・・・・・敵ぃっ・・・・・・・！』

・・・いくらか予想はつけていたが、やはりそうだ。

このカニバル達が欲するのは記憶と魂、あと“それらの情報源となり得るもの”だ。俺がエニグマとか、そういうのは関係ない。

そしてカニバルの行動に支障の出るものならば、それが力を持っていようがなかろうが関係ない。無差別に敵として排除する。カニバルは、そういう風にできている。

結界を展開。これで、下手な奴が来ることはないだろう。

さて・・・。

‥いくぞ、レヴィ

‥オッケー！

レヴィが俺と一体化する。

俺の髪の毛が青く変化し、俺からは見えないが俺の瞳も黄色から濃いピンク色に変化する。

手をかざし、出現させたバルディッシュに酷似したレヴィのデバイス・・・バルフィニカスだったか。それを手に取り、鎌の形態にする。

レヴィとユニゾンしたため雷の魔力変換ができるが、魔力光は変わらないため灰色の魔力刃が出現。

・・・いくぜ、レヴィ。

「　　」

『邪魔・・・するなぁぁぁぁぁっ！！』

雄叫びを上げながら、こちらに突っ込んでくるカニバル。

だが・・・遅いな。

まずカニバルの右ストレートを左に避ける。そしてバルフィニカスを横に突き出す。突っ込んできたカニバルは、勝手にバルフィニカスの刃にぶつかってくれる。

その状態で踏み込みを入れ、バルフィニカスを振り抜く！

カニバルは吹き飛び、地面を転がっていく。

そして起き上がるカニバル・・・・・・よし。

ひびまでは入ってはいないが、ケースに傷がついてる。前回の戦闘と比べれば、効いてることがわかる。

すかさず追撃。魔力刃を引っ込めた斧形態でケースに連撃を叩き込む。

反撃は許さない。高速の連続攻撃をカニバルの腹に叩き続ける。その度にケースには傷がついていく。

連撃の締めとして魔力刃を出し、振り抜く。振り抜かれたカニバルは数メートル先まで叩き飛ばされる。

そこそこ効いてもいいと思うんだが・・・やっぱ、浄化プログラムを効かせるには魔法によるダメージの方が効きやすいのか？

起き上がるカニバル。その腹のケースには、ひびがいくつか入っていた。

・・・よし、効いてはいる。このまま押していけば・・・・・・・・・・っ！魔法陣！？

「　　」

『邪魔だ・・・邪魔するなぁぁぁぁっ！！』

大量の魔力弾が俺に飛びかかってくる。俺はそれらをシールドで防ぐ。

なるほど・・・喰った局員の魔力か・・・にしても重かったな。ひょっとして、複数喰った分魔力は重複によって大きくなっているのか？

だとしたら面倒になるな・・・俺の魔力はＡＡ程度。重複がありなら魔力の強さからしたら大幅に不利になる可能性がある。
強力な魔法を使われる、防御が堅い、捕縛されない、もしくはすぐに抜け出されるなど・・・魔力ランクと実力はイコールでないにしろ、魔力が強さに直結することも多い。

やり方を工夫する必要がありそうだな・・・ならば！

俺は三次減算で小さくした鉄骨を取り出す。１つや２つではない。十数本。

・・・解放！
数字を戻した鉄骨をカニバルの頭上に投げる。カニバルの頭上で大きさが戻った大量の鉄骨がカニバルに降り注ぐ。
カニバルは鉄骨をよけようとするが、それを俺は電刃衝で阻害。カニバルに鉄骨が直撃した。

才能は魔法とは違うためユニゾンによる浄化作用の付加はされてない。俺も、元から攻撃手段としては期待していない。目的は別だ。

いくら打撃に強いカニバルでも・・・物の重量には耐えられないよな。

鉄骨の下敷きになるカニバル。外に出た奴の手が、もぞもぞと足掻いている。
状態からしてうつ伏せだ。うまく周囲が見えない今なら、一撃が入れやすい。

通常よりでかい魔法陣を展開する。

大剣形態にしたバルフィニカスを振りかぶる。

これで・・・終わりだっ！！

雷神滅殺・・・極光斬っっ！！！！

雷を纏う魔力の刃が鉄骨を、そしてカニバルを叩き斬った。

カニバルがいた場所を覆う灰色の爆煙が晴れてくる。

でかい一撃をモロにくらったんだ。相当なダメージを負ったはず・・・あわよくば、これで終わってくれりゃいいんだけどな。

・・・起きてる。

カニバルは生きてた。だけど、ケースにはでかい亀裂と、無数のひびが入ってる・・・もう少しだな。

もう一押し・・・光翼斬っ！！

鎌形態の魔力刃を、ブーメランのような回転で飛ばす。

カニバルはそれをシールドで防いだが、その間にカニバルの後ろを取る。

カニバルを蹴り倒し、手に魔力の雷を纏わせる。

いい加減・・・・・・死ねっ！！

カニバルの背中に、雷の拳を叩き込んだ。

拳を押し付け、電撃を当て続けると、最初は痙攣していたカニバルの動きが止まった。

カニバル自身の身体にも変化が起き、髪が短くなっている。

カニバルの身体を仰向けにする。

腹のケースは粉々に砕かれ、中のパイはなくなっていた。

確かパイが被害者の入ったゴミ袋に取り込まれることで元に戻るはずだが・・・離れている場合でも元の場所に戻るようだ。

これで、なんとかなったかな。カニバルのデータも採取できた。これでカニバルの反応検知をすることができればかなり楽になる。

・・・ん、管理局・・・手早くやったと思ったんだが、さすがに管理世界だと、来るのが早いか。

捕まるのは御免だし、撤退するか。

その後ニュースで、被害者全員が元に戻ったのを確認した。
浄化した後のカニバルの死体も発見されたが、現時点では関連は不明になっている。だが、魔力痕を調べられカニバルは何者か（俺）によって殺害されたものとされ、殺人事件として局は捜査しているようだ。

さて、これで俺は完全に犯罪者か・・・。

まあ、犯罪紛いのことは今までに何度もしてきたし、そのことを考えれば大した問題じゃねぇな。
これから一層、なのは達との接触は控えないとな・・・何が起きるかわかったもんじゃないしな。

――活動中のカニバル。

残り、7体――。

## e23．やっとマトモな戦闘になった・・・のか？（後書き）

カニバルを1体狩り、犯人はバレてはないけどキリヲが犯罪者になったの回でした。前書きの通り、戦闘描写のド下手さについてはご勘弁を。

一応、言い訳をば。

カニバルの能力は所詮、人を“パイにして喰らう。そして能力を吸収する”ことであり、喰らう目的は“自分の本来の願望を叶える”こと。元から戦闘を考えている訳ではないし、脳、というか記憶の類がないため戦術知識なんてのもありません。

つまり、戦闘に使える力があっても、有効に使える手段がないため宝の持ち腐れ。とにかく突撃思考なカニバルが魔法を使うと言えば弾幕とか、やたらめったらに乱発するぐらい。いかに強力な力を手に入れても、その場で高度な戦略を立てれない。それがカニバルであり、あっさりと負けてしまった理由・・・って考えてみましたが、なんか変だなと途中で思ってしまった。だって、原作ではスミオの持つドクロを狙って仲間に化けて色々騙してたし。

うーん・・・とりあえず、カニバルは戦闘についてはほぼ完全に突撃思考である。これを理解してくれれば嬉しいです。

残りのカニバルは後7体。うち2体はすでに処刑法が固まっているから、残りの5体をどうするかな・・・。

長文かつ駄文を最後まで読んでいただきありがとうございましたー。

ではではー。

# ｅ２４．テスト勉強・・・色々ヤバス（前書き）

鬱話注意。

## e24．テスト勉強・・・色々ヤバス

さて、ここ最近アンビリーバボーなことがたくさん起きた訳だが。

実を言うと、あと1週間もしたら中間テストなのである。

転生してからだいぶ経って、生活に関係ない知識もだいぶなくなってたり、あと英語と社会科は普通に苦手なんだよなぁ・・・つか、テストの範囲ってどの辺まっだっけ・・・あれ、意外とやばくね？

‥ねえ、キリヲ君

‥なんだ？

またなのはから話しかけられた。

また翠屋に行こうとかだったら断るかな。今まで何度も翠屋に訪れたけど、はやて以外の八神家に遭遇しなかったのは奇跡みたいなもんだし。

それに俺、バレてないとは言えもう完全に犯罪者だし。

犯罪者と親しくしていたなんてこと、仮にそれがバレたら局内でのなのは達の信頼はおそらく下がる。組織とか世論っていうのはそういうもんだ。特に、闇の書事件のこともあってはやてや夜天の騎士達の風当たりが厳しくなる。

それが原作に悪影響を及ぼさないという保証は1つもない。だから目立つようなことは避けないとな・・・。

・・・で、なのはの話はっと・・・。

∴今日、はやてちゃんの家でテストに向けて勉強会しない？

何・・・だと・・・！？

待て、落ち着け。落ち着くんだ炎田浩人・・・じゃなくて、いや、あってるけど。落ち着くんだ忌束キリヲ。

状況を整理するんだ。

なのはが誘ってるのは勉強会だ。うん、そこまでならまだわかる。
そこまでなのは達と仲良くなった覚えがないのは置いとくとしてだ。
問題は場所だ。なぜに八神家。

考えろ。八神に行った場合に最も確率の高いシュミレートを・・・。

八神家に入る。
←
夜天の騎士達とエンカウント（リインフォース込み）。
←
終始無言な俺を見てリインフォースが気づく。
←
色々バレる。
←
リインフォースの鬱が悪化。俺は犯罪者として収容所行き。

・・・最悪だぁぁぁ！！
これ以上ないほど最悪だよ！これだったら翠屋に行く方が何万倍もマシだよ！！

いや、まだだ！まだ諦めてはいけないぞ忌束キリヲ！！突破口を開くのだっ！

まずは色々聞かなきゃな。

‥なんではやての家でなんだ？というか、それ以前になんで俺？

‥キリヲ君、筆談をするから国語には強いのかなって。私とフェイトちゃん、国語がちょっと苦手だから教えてほしいんだはやてのウチを使うのは、私んちもフェイトちゃんのウチもちょっと忙しくって。あ、メンバーは今のところ私とフェイトちゃん、はやてちゃん、すずかちゃん、アリサちゃんだよ。

筆談イコール国語力ではありません。確かに国語は得意だけど。

忙しいって話は高町家は翠屋だとして、ハラオウン家は・・・ああ、カニバル事件の方か。

だ、だが、俺もここを譲ることはできないんだ！

‥図書室ではできないのか？

：図書室はよく満席で使えないの

つか、図書室使えるなら確かに使ってるね。普通に考えて。

け、けど！

：家の人に迷惑は

：大丈夫だよ

それにはやてちゃんの話だと、この筆談に家族がハマって、一度キリヲ君との筆談もしてみたいって

シャマルさんとかヴィータさんのことだよね、それ！？

だ、だがしかし！

：残念だが、俺には用事が

：先に場所を聞いた時点で、今日キリヲ君が用事なしなのは明白なの

詰んだ！！

結局断る要素を全部叩き斬られ俺はなのは達5人に連れられ、八神家もとい、懺悔の地に来てしまった。
ちなみに、シュテル達はいつもの通り俺のフードに隠れて一緒にいる。俺達運命共同体。

‥何この世の終わりみたいな顔してるのよ

‥俺、この勉強会が終わったら告白するんだ

‥誰に!?誰に告白するの!?

なぜここで突っかかるんだすずかは。

‥というかそれ、死亡フラグやない?

‥もう俺は怖くない

‥マミるよ!?

なのは知ってるんだ。というか、この世界にあるんだ、ま○か☆マ○カ。俺はこれっぽい名言以外は全然知らんけど。

‥まあとりあえず、早く上がろか

時間稼ぎも大した効果にはならないらしい。元から期待できてなかったが。

はやて、すずか、アリサ、なのは、フェイト、俺の順番に八神家に入ってく。

居間まで行ったらリインフォースがいて、俺のことがバレて、それで乙るんだろうなぁ・・・ああ、結局願いを2つ残した・・・。ごめんよ母さん。俺ぁ先にゲス親父の元に行ってる・・・ごめんよナンバーズ。お前達の救済計画は夢で終わった・・・会ってすらいないのに。

ついに断罪の場、居間にさしかかる・・・。

「　　」

『あ、いらっしゃ～い』

「　　」

『はやて、おかえりー』

「　　」

『お帰りですはやてちゃ～ん』

居間で出迎えたのはシャマルとヴィータとリイン・・・。シャマル、結構美人だな・・・なんていうか、女神的な感じ・・・。ヴィータは目つきがキツいイメージがあったけど、案外そんなことなくてか

わいいな・・・リインは、普通に天真爛漫な子供って感じ。あ、リインは普通に子供サイズね。
他には狼形態のザフィーラが床に伏せていて、あと2人。

「
」

『お帰りなさいませ、我が主。それと、よく来たな』

ピンクのポニーテールの女性・・・シグナムもこっちに来た。
そして、シグナムと共にやってきたもう1人・・・リインフォース。

「
？」

『ようこそいらっしゃいました。我が主、この方が・・・？』

ご丁寧なまでに、リインフォースは早速俺に気づいたようだ・・・
まあ、見慣れない客人で、かつ男となれば結構浮くか。

「
」

『うん、彼が忌束キリヲ君や。仲良うしてな』

：キリヲです。お邪魔させてもらいます

はやての紹介に続いて挨拶はしておく。いくら関わりたくなかったとは言え、ここまで来てしまったら引き返しようがない。下手に印象づけないで、できるだけ存在感をなくして立ち去るのが得策だ。

‥リインフォースと言います。ようこそいらっしゃいました

‥シグナムと言います。あなたのことは、■はやてからお伺いしています

‥シャマルです。どうぞゆっくりしていってくださいね♪

‥リインって言います！よろしくお願いしますです♪

‥ヴィータ。で、あそこにいる青い■犬はザフィーラ

八神家の守護騎士から次々と紙を渡される。
黒く塗り潰された部分をいくつか見つけたが、そこには確実に“主”とか“狼”という文字が入るに違いない。

そんなことより・・・まあ、すぐに気づくことはないか。3年以上も前のことだし。
それにひょっとしたら、もう忘れてくれてるのかもしれない。あの時の言葉も、本当に俺のことだっていう確信はない。過去の、闇の書だった頃の主に対する言葉だったのかもしれないし・・・な・・・。

‥さ、勉強会、始めよか

‥そうだね

はやてとすずかの言葉で、勉強会が始まることとなった。

‥キリヲ君、問４の問題はどうすればいいの？

‥またか。これで何度目になるんだ？

‥キリヲ、この問５はどうすればいいのかな？

‥なぜに俺ばかりに集中する。どう見ても他がいるだろ。というか、こっちも教えてほしいものが溜まってるぐらいなんだが。

‥キリヲ君、これ教えてくれへんかな？

‥だが断る

‥なして私だけ！？

‥てかはやてにはすずかがついてるじゃないか

‥ひどい・・・キリヲ君と私の付き合いやなかったの・・・！？

‥意味不明

緊急事態である。

なんと魔導師3人組が揃いに揃って教わる側につきやがった。
この歳でもう働いてるからか？それが理由なのか？
つーか、こっちも英文法とか聞きたいのに教えてばっかだし。俺だけ勉強が進められない。アリサとすずかも魔導師組に教えてるからあまりこっちに関わってくれないし。

誰か教えてくれ・・・この際誰でもいいからさ・・・。

・・・・・・ん？

誰かがシャーペンを持って例文に線や矢印を引いたり、説明したり・・・おお、結構わかりやすいかも。一体この解説をしてくれてる方は・・・。

・・・リインフォースでした。

いや、確かに誰でもいいって思ったけど、ここでリインフォースかよ。シャマル辺りだと思ってたからびっくりだよ。え、びっくりしてるように感じない？びっくりしてないように見せるため頑張ってるんだよ。
というか、顔近い。あ、微笑んだ。ふつくしい・・・いやいやいやいや、そんな目で見ようとするな俺。
落ち着け。挙動不審にはなるな。ここでキョドっちまえば乙る、そういう覚悟で終始冷静でいるんだ。

あ、クッキー発見。差し入れかな？落ち着くためにも、1ついただいちまおう。

「　　！？」

『あ、ちょっ、それ！？』

はやてがなんか言ってるけど、それは無視。

そういや何気に、甘いものを食うのは久し振りになるな・・・モグモグ。

・・・・・フゴッ。

ま、まさかこれ・・・シャマル特製クッキー・・・・・・だと・・・・・。

この世界のシャマルは・・・ポイズンコックだったのか・・・？

油断したところで刑の執行とか・・・マジ鬼畜・・・・・・ガクッ。

・・・・・知らない天井だ。

いや、十中八九八神家だろうけど。

視界の端に俺の様子を伺うリインフォースの姿が・・・あ、少しひっこんだ。

：気がつきましたか？

そう書かれた紙を見せてくるリインフォース。

とりあえず上半身を起こす。

ここかは・・・居間か。俺が寝てたのはソファの上だったようだ。

勉強に使っていたテーブルの方を見る。あったのは勉強道具のみ。

例のクッキーは姿を消している。

：すみません、私達の注意不足で・・・シャマルが料理を作ったばっかりに

：いえ、食べる直前にはやてから警告みたいなのを言ってたのを見たので、自分も悪かったりしますよ。今何時ですか？というか、どのくらい寝たんですか？

：だいたい、２時間ほどです

マジでか、もうそんな時間？

やべーな。これは地味に帰りづらい。今ここで帰ろうとしたら、俺が不機嫌になって帰っていったという印象がつけられてしまう。

でも、そろそろ帰らなきゃな・・・おふくろはもう仕事だとしても、

今はプレシアやアリシアがいるからなぁ・・・。下手に長引けばプレシアの説教が待ってる。あれ、本日2回目の詰みじゃね？

・・・そういや、パッと見た限りリインフォースと・・・ザフィーラ以外誰もいないな・・・八神家メンバーはシャマルへの説教だとしても、なのは達は？

：他の人達は？

：■はやてとシグナム、ヴィータ、リインは今シャマルに説教を・・・高町やテスタロッサ達は、先にお帰りになられました。

また主と書いて塗り潰した痕跡が・・・もういいや。
つか、それって今ここにお邪魔してるのは俺だけってことか。なら・・・、

：じゃあそろそろ、俺もお暇しましょうか？こんな時間ですし

：そうですか。本当にすみません。よろしければ、お見送りしましょうか？

：いえ、そんなお構いなく

：せめてものお詫びです。今、はやてに一言言ってきますね

いや、本音を言ったらリインフォースと2人っきりって気まずくて

キツいんだが・・・。

あー、リインフォース行っちまった・・・しゃーない、俺の分の勉強道具を回収して帰る準備をするか。

帰る前にはやてから色々謝られて、八神家を出発。
俺とリインフォース、横並びになって歩いている。

個人的になんだが・・・気まずい・・・。

リインフォースは気まずく感じてない・・・はず。だけど、事情を知ってる分、今も気負いしてるんじゃねーかとか、俺と過去にリインフォースが会った俺を重ね合わせてるんじゃねーかとか、そういう妄想が止まらん。

や、やばい・・・何かこのマイナス妄想を止めるために会話を・・・いや、会話したら何かボロが出るかも・・・。

ええい、背に腹は替えられん！適当な話題！！

：リインフォースさん

：何でしょうか？

：シャマルさんでしたっけ？あのクッキーを作ったのは・・・シャ

マルさんって、いつも料理はあんな感じなのですか？

：はい、お恥ずかしいことに・・・

：それは、大変ですね

いかん、話が続かない・・・！

ええと・・・な、何か・・・何かないか・・・！

：あの、忌束さん

そんなこんな考えてたら、リインフォースから話しかけられた。

：キリヲでいいですよ

：では、キリヲさん。もし気に障らないのでありましたら、いつからそのように声を出せないのか、教えてくれませんか？

・・・思い切った質問だな・・・。

俺と過去の俺を重ね合わせてるのか、それとも俺に気づいたのか・・・。

：だいたい、今から6年ほど前ですね。当時に、父親に当たる人か

らの虐待を受けていて、そのせいで

嘘と事実を混ぜた話をする。勿論、虐待を受けていたというのが本当、そのせいで耳が聞こえなくなったというのが嘘。

：すみません、嫌なことを思い出させてしまって

：いえ、気にしないでください

これで・・・誤魔化せたのかな・・・。

そろそろ、家も近いな・・・八神家との距離もそれなりに離れてきてるし、ここまでかな。

：では、ここら辺まででいいですよ。もうすぐ家ですし
ありがとうございました

：そうですか
わかりました。またいらしてくださいね

：はい、機会があれば

その機会が来た時、俺はそれを受け入れられるだろうか・・・。
まあ、いいか。こうして、リインフォースの元気そうな姿を見ることができた・・・それだけでいい・・・。

メモ帳とペンをしまい、歩き出す。

歩き出してすぐ、俺の足は止まった。

誰かが・・・・・・リインフォースが俺の手を掴んだのだ。

「　　」

『あ、す、すみません。つい・・・』

慌てて謝るリインフォース。

・・・気づいてるのか・・・？

・・・いや、まさか、な・・・・・・。

そりゃあ、フード付きコートとか右手だけの革手袋・・・当時の面影をそのまま残したような格好だけどさ、ちゃんと他人のような演技はできた。大丈夫だ。まだバレてない。

・・・正体を明かして、全部話して、謝れば・・・俺は楽になれるかもしれない。カニバルの腹の中での出来事を話して、つらい思いをさせて悪かったって言えば、リインフォースも・・・・・・。

でも・・・・・本当にそれでいいのか？全部話して、そうしたら本当に彼女も救われるのか？

いろんな奴を不幸にして、苦しい思いをさせた俺のこの答えは、本当に正しいのか・・・？

その思い、恐れが、リインフォースへと伸びようとした手の動きを封じた。

この手は・・・俺は、周りを不幸にする・・・。触れたら、壊れてしまうかもしれない。余計に不幸にしてしまうかもしれない。
そんな風に怖がって、恐れて、遠ざける。関わらないようにする。
拒絶して、1人カッコつけようとして、自分の弱さから逃げようとする。

最低だよな、俺・・・自分の都合で、他人を振り回してさ。
こんなことになるなら、介入なんてしなかった方が、彼女のためになったんだろうか・・・。

俺はそんな感情を押し殺して、リインフォースに軽く礼をしたあと、再び歩き出した。
俺の歩きは間違いなく、彼女から逃げるための歩きだった。

―ｓｉｄｅ・リインフォース―

少しずつ、フード付きコートを羽織り、右手に手袋を填めた少年の背中が遠ざかっていく。

我が主達の勉強会に一緒に来た少年、忌束キリヲ・・・。
・・・間違いない。彼は、あの時の・・・。

気づいたのは、以前から聞いていた彼についての我が主からの話と、彼の服装を見た時だ。
耳や発声器官に障害を持っているというだけならまだ別人の可能性

もあった。フード付きのコートもだ。しかし、常に右手だけに革手袋を填めているという特徴が決定的だった。そのような特殊な服装をすることはまずない。そしてその格好を、４年前の彼もしていた。そしてそれら全ての特徴が、全て一致していた。

だが、彼は私を見ても驚かず、私との接し方も他人のような素振りだった。

忘れてしまったのだろうか？・・・いや、自分の耳が聞こえなくなった時のことを忘れるはずがない。

だとしたら、なぜ耳が聞こえなくなったのが６年前だという嘘を言ったのだろう・・・。

彼が何も聞こえず、何も言えなくなった原因は私だ・・・私が生きたいと望んだから、自由を望んだから・・・だから彼は、私の願いを叶えるために自ら犠牲になった。私が彼の自由を奪ったも同然なんだ・・・。

闇の書のバグが修正されたその日から、ずっと会いたいと望んだ。会って謝り、償いたいとずっと思い続けた。

彼の見送りをすると言ってついてきたのも、歩き去る彼の手を無意識の内に引いたのも、彼に謝罪をするため。

なのに私の声は、私の手は、謝ろうとする時ばかりに私の言うことを聞いてくれなかった。

謝るべきなのに、償うべきなのに。そうしたら互いの何かが壊れそうだと感じて、怖くて何もできなかった。

だいぶ小さくなった彼の姿がぼやけてくる・・・。

何もできない・・・バグが治ってもやはり、私は誰かを不幸にする、
呪われた存在なんだ・・・！

涙を溢れさせる顔を手で覆い、泣き崩れてしまう。

彼の姿は見えない。

だがそれは、彼が遠くに行ってしまったせいではなく、自分の視界
が遮られたせいでもない。

私の・・・全部私のせいなんだ・・・・・・！

## ｅ２４．テスト勉強・・・色々ヤバス（後書き）

結局キリヲとリインフォース、両者ともに鬱が酷くなる回でした。

なんていうか、２人のすれ違いとかそれの悪化とか、そして最後には和解って言うのを俺は書きたかったんだろうか。

ハッピーだけで進めるなんて、誰にもできる訳ないんだよ。

この小説はそれを訴えたいのだろうか。

そんなことを思ったりするこの頃。

## e25．アリシアとの1日

結果として、こっちの鬱が悪化した勉強会から約１０日。
テストが終わり、返却されたんだが・・・。

チックショォォォォッッ！！！

心中でそんなシャウトをしながら、俺は目の前の何枚も束ねられた用紙にシャーペンを走らせている。

まあ、早い話が赤点である。そしてペナルティーのプリントである。

赤点を取ったのは、予想通りっちゃあ予想通りの社会と英語。

社会科はまあ、記憶力の問題だし、前日の一夜漬けでなんとかしようとした俺に非がある。
けどさ、英語はないよね、存在的に。日本人は日本語だよ！！

‥調子こいてるからこんなことになるのよ

アリサ、こんな時に筆談持ちかけんな。邪魔。
そう思いながらアリサが渡してきた紙を手で払う。

マテリアルズに手伝ってもらおうとも考えたけど、アイツらが書くと字がちっさくて別の人が書いたとバレちまう。だから俺が処理す

る他ない。

その後気合いで、帰りの前にはプリントを全て消化しきった。

帰りのホームルームも終わり、俺はいつものようにダッシュで教室の外へ――、

：待ちなさい

アリサに腕を引かれ、慣性の法則に抗えず後ろに倒れた。なんかデジャヴ。

：前にも書いたが、もう一度聞くぞ。殺す気か

：前にも書いたけどもう一度書くわね。早く帰ろうとしたアンタが悪い

：早く帰ることに罪はない

：早く帰ることを決断したアンタが悪い

解せぬ。

‥で、何の用だ

‥また一緒に翠屋行こ！

なぜなのはが書くんだ。流れ的に見てアリサだろ普通。

‥悪いが用事がある

‥用事用事って、最近アンタそればっかじゃない。何やってるのよ？

‥オカルト検証

‥やめなさい

まず嘘である。今日にそんな予定はない。

本当の予定としては、プレシアの代わりにアリシアの迎えに聖祥小学校へ行く予定だ。

最近加わった日課だ。学校が近いこともあって、よく俺が迎えに行っている。たまに、俺の都合が合わない時はプレシアが迎えに行く。

アリシアを原作組に見られれば、面倒になること間違いなし。バレたくない。

アリサは俺を怪しんでいるのか、ジト目で見てくる。早くやめてほしい。

：アンタ、最近私達のこと避けてない？
なんか隠してるの？

：お前らの場合、隠しきられる前に辞書ハンマーで吐かせようとするだろ

グーパンされた。

アリサ、勘が鋭いな・・・どこまで隠し通せるか・・・というか、転校するか？

：キリヲ君、お前らって何？“ら”って

：そりゃ、なのはも含んでるからに決まってるだろ

なのはからもグーパンされた。

最終的になんとか振り切り、俺は小学校の方へと向かう。

校門の前で待つ。最初の頃は、自身の格好から不審者と間違われたもんである。

・・・お、きたきた。

「　　♪」

『キリヲおにーいちゃーんっ♪』

タックルされた。いつものことだが、抑えてほしいものだ。
頭からのタックルをかましたアリシアは、次にグリグリグリグリ頭でこすってくる。

もうなんていうか、お兄ちゃんという立場で定着しちまってる俺だ。
生まれた年で言ったらアリシアの方が先じゃないのか？
つか、アリシアはフェイトの姉で、俺はアリシアの兄、そんでもって俺とフェイトが同級生って・・・。

いろんな意味で不安になってきた。

グダグダすることなく学校から歩き出す。

‥キリヲお兄ちゃん、おんぶして！

‥だが断る

「　　」

『ぶー、ケチー』

アリシアはいつもおんぶを要求してくるが、俺はいつも拒否してる。おんぶなんてしたら、両手が塞がって会話ができんだろ。

‥そういえば、キリヲお兄ちゃんってなんで何も聞こえなくなっちゃったの？

ん、そういや言ってなかったっけ・・・。

誤魔化す・・・は、無理か。何気に勘が鋭いし、何より才能のこととか知ってるんだし。

アリシアが俺の才能のことを知ったのはテストの前日の話だ。

勉強中にひっついてきたので、第3の手で相手をしてみたら幽霊と勘違いして怖がらせてしまったのである。説明のために1時間もかかったのを覚えてる。プレシアに本気で電撃処刑されかけたのもいい思い出だ。

そこから俺の才能全9種を2人に説明した。マテリアルズは、神からすでに聞いていたらしい。

まあそんな訳で、アリシアは俺が普通の人とは違うことを知っている。そんな状態で事故だと言ってもあまり信じないだろう。事実事故じゃないし。

でも、だからって全部話すのはきついだろうな・・・そうだな・・・。

：願いを叶える、怖いドクロに願ったから

具体的とは言い難い事実を書いてみる。

アリシアはその答えを見て首を傾げた。

：願いを叶えてくれるのに、怖いの？

：願いを叶えてくれるから怖いんだよ

再び首を傾げるアリシア。

・・・やべっ、かわいい・・・じゃなくて。

まあ、アリシアがこれの意味に気づくのはまだ当分先か、このまま気づかないかだな。

：早く帰るぞ。今日は俺の頑張りの労いでカレーだ

：ホント！？

本当だ。ペナルティーを気合いで終わらせた自分へのご褒美。

‥ならおんぶして！

‥なぜに

‥なんでもいいの！

好きだな、俺の背中。

うーん・・・ぶっちゃけちまえば、俺が無言になってもそれは構わないけどさ・・・。

‥おんぶすると、俺は会話できなくなるぞ。それでもいいのか？

‥うん、シュテル達がいるから！

そうだった。

‥わかった。シュテル達は他人に見られないようにしろよ

‥うん！

結局おんぶしてやることになった。
俺が身を屈み、アリシアが俺の背中に抱きつく。俺の背中が気持ちいいのかどうだか、頬ずりまでしてくる。
そんな中俺は立ち上がり、歩き出す。

さっさと帰って、カレーの準備をしなくては。

さて、夕食のカレーをおいしくいただいて。

俺は胡座をかいてテレビを見ているのだが、その組んでいる脚の上にアリシアが座っている。アリシアはよく俺の前や後ろが好きなのである。

母である自分よりも俺のそばにいられて、プレシアはよく涙目である。現在プレシアは風呂に入っているからここにはいないが。

まあ俺も、小動物みたいなアリシアはまんざらでもないが。

ただ、座りながら重心を前後に移動させるのは勘弁いただきたい。

「　　」

『お風呂上がったわよ。早く入ってらっしゃい』

プレシアが風呂から上がってきた。

ぶっちゃけて言うのだが、髪が濡れたプレシア、なんかそれだけで妖艶な美を感じる。

「　　」

『えー、今いいところなのに～』

アリシアが愚痴る。まあ確かに、テレビでやってる番組はいいところである。
しゃーない。ここはアリシアに譲ってやるか。

‥じゃあ、俺が先に入るぞ

そう書き置く。
で、立とうとする。だが立てない。当然である。脚の上にアリシアがいるから。

‥アリシア、風呂に入ってくるから、そこどいてくれるか？

そう書いた紙を見せると、アリシアはなにやら考え込み始めた。いや、早くどいてくれよ。

少ししたらアリシアが紙に何か書き出した。

‥なら、私も一緒に入る！

嘘ぉぉぉ！？

ちょっ、待って！なんでそうなるの！？ちょっ、プレシア、いや、プレシア様も殺気立てないで！

‥やめてくれ。主に俺のために

‥えー

えー、じゃない。

‥というより、なぜいきなり一緒に入ろうと思った？

‥お兄ちゃんと一緒にいたいもん

ブラコン・・・なのか？

まあとにかくだ。俺は認めん、恥を知りなさい。俺のためにも。

‥一緒に入ろうとすれば、間違いなくプレシアに処刑されるため断る

‥しょうがないなー

じゃあシュテル達と一緒に入るね

そうしてくれ。

なんとかプレシアからの処刑を回避して、俺は風呂に入るのだった。

夜、寝る前にはラノベを読んで、だいたいそれで１２時ちょい前ぐらいになって寝るんだが・・・そろそろか。

俺の部屋の扉が開く。

「　　」

『キリヲお兄ちゃーん・・・』

アリシアが、開いた扉から顔を出してきた。

「　　？」

『勉強・・・教えてくれる？』

やっぱり。

はいはいわかりましたよーと、俺は立ち上がるのだった。

言葉で言うようにここはここ、という言い方はできないため、主に矢印や線を多用する。あまり文字は書かない。

アリシアはどうやらじっと座って勉強するより身体を動かす派のようで、勉強には苦手意識があるみたいだ。

ただ、成績が悪い訳ではない。むしろいい方だ。理解もそこそこ早

く、わからないところもある程度やれば結構早くにわかるようになってくれる。

そんでもって、アリシアの勉強に付き合ってだいたい1時間弱。

アリシアは眠気に負けたようで、机の上に突っ伏して寝てしまっている。だいたい、アリシアの勉強が終わるのはこんな感じだ。

俺はアリシアを起こさないように抱きかかえ、ベッドに移す。

布団もかけてやり、これで完了っと。

・・・ん。

そして部屋から去ろうとした時、アリシアに袖を引っ張られた。

それはまるで、俺が行ってしまわないように、引き止めているかのように――、

――行かないで・・・・・・私に、謝らせて・・・！

・・・・・・っ。

・・・あぁ、何思い出してんだ俺は。

目の前にいるのはアリシアだぞ。リインフォースじゃねぇんだ。似たようなことをされたってだけで重ね合わせてんじゃねぇよ。

アリシアの俺の袖を掴む手をほどく。

ほどかれた手はしばらく俺の手を探すように動き回っていたがやはり寝ぼけた行動。そのうち手の動きが止まった。

・・・ふぅ、世話焼かせの妹だな、コイツは。

だからこそ、今度こそ俺が間違えることなく守りたい。そう思う。

こうして、俺は自室に戻った。

## e25．アリシアとの1日（後書き）

アリシアがキリヲに甘えん坊な回。

どうやら、アリシアがヒロインの座をいただこうと企んでいる様子。

頑張ってリインフォース！アリシアに負けちゃだめだ！

## e26．デバイス作りって難しい

今日はリョウ家に来た。

デバイスを作るためである。

カルキさんからもうほとんどの知識、技術を伝授してもらい、そろそろ作ろうと思うんだ。

：予定としては、どんなデバイスを作るつもりですか？

：何か補助系のデバイスにしようと思ってる

コールの質問に、そう返した。

最初はアームドデバイスを作ろうかと思っていたのだが、戦闘面ではすでにシュテル達ユニゾンデバイスがいる。遠近広域全部揃ってしまっているため、これ以上攻撃型を増やしても意味がないのが現実だ。

で、作るべきデバイスはまず人格搭載型なのは大前提。これがなければ思考の読み取りもできないため、俺の場合ただのお荷物になりかねない。そして上記のことを踏まえて補助系。これも前提だ。

ただ、こっから先がうまく纏まらないんだよなぁ・・・補助型って言っても、強化魔法とか結界、捕縛魔法はガーディアンに積んでるから、それを新たに入れ直したり分ける必要性は見えない。召喚魔法は、ぶっちゃけて契約とかのことを考えたら面倒な一面もある。

：そうなったら後は、ホントにピンポイントな補助とか、変身魔法、あと幻術魔法。このぐらいになりますかね

ああ、そういや幻術魔法なんてのもあったんだな。確かフェイクシルエットなんて魔法がアニメで使われたっけ・・・。

・・・・・・ん？

待てよ。もしかしたら・・・・・・。

・・・行ける？

：コール、ちょっと無限書庫に行ってくる

：そうですか？わかりました。気をつけてくださいね

俺はリョウ家を出た。

本局にある無限書庫。行くには当然申請をする必要がある。

まだ俺の正体がバレてないから動けるものの、これから先迂闊に来

ることはできないだろう。

無限書庫への扉が開く。

無重力空間のため、特に足場は存在しない。壁は全て本棚である。
俺は宙を飛び込み、漂う。

うーん、やっぱこの空間、楽しいけどなぁ。足が地面につかないって、案外不安になるものだ。飛行魔法は持ってるけど、俺はあまり使わないようにしている。

さて、そんことよりさっさと検索してっと・・・ん?誰かに肩を叩かれた。
振り返る。

‥久し振り、キリヲ

・・・ああ、ユーノか。

ユーノ・スクライア。彼との付き合いは案外長く、過去にも何度か無限書庫で調べものをした時に知り合い、今では友人である。なのは達にバレないかですげーヒヤヒヤしているが。

まあそれがバレずに済んでいるのは、ユーノのおかげだと言える。俺の才能のことも話して、これが管理局に知られると面倒だから隠しておいてほしいと頼んだら、彼はオッケーしてくれた。本当にありがたい。
ちなみに、ユーノはすでに司書長であり、眼鏡をかけている。

‥何か調べもの？

‥ああ、ちょっと魔法の術式を調べたくて

‥そっか。キリヲ、もし調べものが終わったあとによかったら、こっちの仕事を手伝ってもらってもいいかな？またクロノからの資料請求が来てね

‥ああ、それなら手伝うぞ

‥ありがとう、助かるよ

仲良くなった一番の理由がこれだな。かのＫＹで知られているクロノからの資料請求。それを手伝った故にユーノからの信頼度は急上昇された。どうでもいいことに。

ついでに言うと、クロノは今はまだ提督ではないようだ。現在１８歳ぐらいだっけ？で提督に昇進するのはさすがにないっちゃあないが。でも後２年もしたら提督になるんだよなアイツ・・・。

ま、その辺はどうでもいいか。ユーノも行っちまったし、さっさと検索しないと。

ガーディアン、頼むぞ。

広域検索。検索ワードは・・・“幻術魔法”、“精神攻撃”それから“術式”・・・これでいいか？

検索でかかった本が周囲に集まる。

うわ、結構多いな・・・さすがにワードが3つだけだと少なすぎるか・・・？
出てきた本は約２０強。これでもかなり削れてる方だってわかってるけどなぁ・・・できれば2、3冊まで削りたい。

うーん・・・もう1つぐらいワード足すか。そうだな・・・“禁術”ってどうよ？

おっ、だいぶ削れた。残ったのは5冊。これぐらいならなんとかなるかも。
だいたいこの中に歴史本が2、3冊入っているからそれをどかし、1冊手に取る。

ふむ・・・やべーな。発狂レベルの幻術とか。そこまで求めていないのですが。
けど参考にするのは術式だ。魔法そのものを取る訳じゃない。
必要なことをメモメモっと・・・。

・・・よし、こんなもんかな。

それじゃ、本を戻して、ユーノの手伝いに行ってやろっかな。

さて、ユーノと共にクロノの請求に断末魔を無限書庫に響かせてからリョウ家に戻った俺。

ついにデバイス作りに取りかかろうと思う。

もう気づいてるかもしれないが、俺が作ろうとしているのは幻術特化のデバイス。幻術魔法を大量に詰め込み、それで相手をじわじわ追い詰める。

完全な防御と幻術による精神攻撃。俺が目指す戦闘スタイルは言わば戦闘アンチ。相手の動きを極限まで押さえつけ、戦力として削ぎ落とすタイプだ。

ＡＡしかない魔力で、強力な力を持つ原作エース達や転生者と真正面からぶつかったって勝ち目はない。

だから、攻撃型とは真逆の戦法を取る。攻撃も防御も大した関係ない幻術。それで相手を苦しめていけば、俺でもなんとかなるはず。

まあ、関わらないのが最善なんだけどさ。

さて、作るデバイスの原案が出てきたところで、制作開始。

まずは設計図。元からコアがあるものを使うのもありだが、俺の場合は思考認知のシステムという一般的にはまずない機構を積む必要がある。

そのためガーディアンの構造を分析。ガーディアンの構造を元にコアを作り上げる。元にするデバイスがある分、設計図を作るのがある程度楽なのがメリットだ。

・・・まあ、それでもデバイスができるのは当分先、よくて夏休み中ぐらいなんだけどねっ！

結局、設計図を作るだけで１週間近くかかってしまうのは別の話だ。

デバイスの完成は、まだまだ遠い・・・・・・。

## e26．デバイス作りって難しい（後書き）

キリヲ個人の戦術像が見えた回でした。

ありがたーく容赦ない批評がやってくるこの小説。おかげで小説を書く自信が失いつつある僕です。

いや、批評が悪い訳ではないんですよ。耐性のない僕がいけないんです。

まだしばらくは鬱小説として進める計画なので、作中の鬱成分と批評で僕の精神がブレイクしちゃいそう。

めげずに頑張りたい。けど今後の展開と批評を予測した時に耐えられなさそう・・・。

# e27．うちの家族が全員揃ってるってことって、意外と少ないんだ

特に予定もない休日。現在はまだ午前。

暇なので居間のソファにふんぞり返る。

午前中だから、おふくろはいるし、今日は休日だからアリシアもいるし、諸事情で働きに出られないプレシアは基本家の中。マテリアルズは基本俺と行動が一緒のため家にいる。休日の午前は家族全員がいる貴重な時間なのである。

おふくろは朝食に使った食器洗い、プレシアは洗濯物干しの作業をしている。家事はこの2人でよく分担して行っている。夜おふくろが仕事に出ている時は大体プレシア担当、時々俺。

マテリアルズは現在マイホーム内。ぐっすり寝てる。

で、アリシアは・・・。

「　　♪」

『キリヲおにーぃちゃん♪』

今し方、俺にダイブしてきた。

元気なのはいいが、頼むからもうちょっと抑えてほしい。俺の身体が保たん。

アリシアがさっきまで何をしていたのかと言うと、歯磨きと顔洗い。

普段ツインテールにしているアリシアだが、まだ縛ってない。

アリシアが紙にペンを走らせ、筆談を持ちかけてきた。

‥キリヲお兄ちゃん、髪縛ってくれる？
いつもと同じで♪

‥わかった

俺にリボンを手渡し、アリシアは後ろを向いて俺の膝に座る。
俺はそこそこ慣れた手付きで髪を纏め、リボンで縛る。
なんていうかもう、すごい懐きようである。ここのアリシアは。こんなに懐かれるようなことしたっけか、俺？
アリシアを蘇生させたって言っても、その様子を本人が見た訳じゃないしなぁ・・・ホントになんでだ？

・・・よし、完了。９歳フェイトと同じ髪型になった。

‥できたぞ

‥ありがと、キリヲお兄ちゃん♪

ツインテールを触って確認してから、満面の笑顔を向けてくるアリシア。うむ、かわいい奴だ。
・・・何気にシスコン化してないか、ちょっと不安になってきた。

ああそうだ、今更だが聞いてみるとするか。

‥ところでアリシア、どうして俺を兄と呼ぶんだ？
あとなぜにここまで懐くかも教えてほしい

‥だめ？

‥だめではないが、考えてみたら不思議だったから

アリシアはうーんとシンキングタイムに少し入ってから、答えを書き出した。

‥キリヲお兄ちゃんだから！

‥意味わかんねぇよ

‥頼れるキリヲお兄ちゃんがいいの！

頼れる・・・？俺、そんなに頼れるのか？
頼られるのは嬉しいが・・・俺で大丈夫なのかちょっと不安だ。

そう考えている隙にアリシアは俺をソファ代わりに背中を引っ付けてきた。なんだコイツ、やるか？
俺をソファ代わりにするお仕置きにアリシアに両腕を回してがっちりホールド。力の強さとしてはアリシア基準でちょっと苦しいと思えるぐらい。
程なくして、予想通りうーうー唸りながらアリシアがじたばたしだした。だがその表情は楽しそうな笑顔である。かわいい奴め。

・・・シスコン化が随分と進んでいるようだ。

∴今日はみんなで買い物に行きましょ？

俺とアリシアで戯れて、その間にプレシアと一通りの家事を終わらせたおふくろの第一声がこれだった。

ふむ、確かに買い物には行きたいな。そろそろ古傷からの出血でお釈迦になった服を買い替えたい。それに食材の買い足しとかもしなきゃだし。あ、ラノベもそろそろ新巻出てるかな？あー、あとマテリアル達が欲しがってたもの作るために必要な道具もだなー・・・。

・・・おっとっと、アリシアに引っ張られた。

「　　♪」

『お兄ちゃん、早く行こーよ♪』

ああ、わかったわかった。だから引っ張んな。

・・・よし、行くか。

で、全員で出てデパートで色々買い物を初めて数時間後。

・・・俺さ、思うんだ。

既に古傷で出血が少ない（才能に使われる背中の部分は除いて）からって、怪我人に荷物持ちを任せるのはどうかしてるって。
しかも手が塞がっているために会話能力までもが著しく低下するという二重トラップ。おかげで嫌と言うこともできずどんどん荷物が追加されていく。第３の手？こんな場所で使えるか。

今んとこ買ったのは、食材、日用品、あとマテリアルズ用の服や家具を作るための布やら小道具ｅｔｃ・・・。
これらのほぼ全てを俺に持たされているのである。やばい、もう握力が。

唯一の救いはアリシア。大変そうだと荷物持ちを手伝ってくれた。
持ってくれたのは一番軽いマテリアルのためのもの数点・・・それでも義妹（アリシア）の優しさに涙した。

・・・さて、次が最後の難関、服だな・・・・・・。

「　　！　　　　！」

『ああ！似合ってるわよアリシア！』

・・・・・・・・・・。

「　　！　　！」

『最高よアリシア！ああ、こっち向いて・・・！』

・・・・・・。

「　　！」

『ああ・・・アリシアのこんな姿が見れるなんて幸せ・・・！』

やめんか。

アリシアに色んな服を勧めてはキャラ崩壊させているプレシアの頭にチョップを叩き込む。

アンタね、自分の娘がかわいいって気持ちはわかるが、だからって異常な悶え方してんじゃねーよ。
そしておふくろ、アンタも平然と次の服を選ぼうとしてんじゃねー。

・・・ん、アリシア？どした。

‥どうかな、似合う？

・・・ああ、俺に意見求めてんのね。

つってもな・・・俺、あんまコーディネートセンスがあるなんて思わねーしなぁ。服なんて、買って数回使えば血ぃべっとりでポイだし。

‥悪い、俺にはあまりよくわからないが・・・似合ってるんじゃないか

正直なことを書く。
人によっては、よくわからない時はただ似合ってると言う奴もいるらしいが、所詮そんなのはただの機嫌取りにしかならない。そのうち相手もそのことに気づかれる。そうなるぐらいなら、自分からバラした方が後々楽だ。

「　　♪」

『あ、そっか・・・でも、ありがとー♪』

わからないと言われつつも、褒められたことに笑顔になるアリシア。その笑顔がかわいいからよしよしと頭を撫でてやる。なんていうか、俺はこういう性格の妹属性持ちが好きなようだ。なんていうか、アリシアの明るさにちょっと憧れているんだろうか。

「　　♪」

『さて、アリシアちゃん。まだまだ色んな服を着てみようね～♪』

「　　！」

『うん！』

やめい。聞いてくれないだろうけど。
そしてアリシアも。簡単に頷くな。

「　？」

『どう？』

うん、結構白主体も似合うな。
麦藁帽子があればより良さそうだ。

「　？」

『これは？』

まず問おう。ゴスロリなんてどこから見つけてきた。

「
」

『あぁあっ、アリシアのゴスロリ姿っ・・・今すぐ永久保存を・・・
』

やめんかと、カメラを手にしたプレシアにチョップを叩き込んだ。

「　　？」

『アリシアちゃん、今度はこれなんてどう？』

何ナース服着せようとしてんだ。というか、なんでここにナース服なんてあんだ。

ここはコスプレ専門店なのかと疑問を持ちつつ、おふくろに手刀をめり込ませた。

「　　」

『ふぅ、買った買った』

ああ、買ったな。余計なもんまで買わないようにさせるのに苦労したが。

てか、また俺が荷物持ち。もう俺の腕が爆ぜる。

「　　？」

『もうこんな時間か・・・レストランでお昼にしましょ？』

時間は既に１２時に差し掛かっていた。

うん、それがいい。というか、そうなってほしい。というか、そう

してください。もう腕が限界だ。
そんな訳で、デパート内にあった洋食店に入っていった。

飯食ってからはすぐに帰って帰宅。
荷物をまずは居間の床に置く。やっと、腕が解放された・・・。

マテリアルズもフードの中から出てきて、伸びたりしていた。まあ、ついてきたはいいけどコイツら人前には出せないからずっと隠れてばかりだったからな。

さて、と。自分の服とかマテリアル達用のものを部屋に持っていきますか。

‥キリヲお兄ちゃん、遊ぼ！

買ったものを一通り片付けてすぐ、アリシアにそんなこと言われた。
だがしかし。

‥悪い、ちょっと休ませてくれ

さすがに今日は疲れた

「　　」

『うー・・・』

今日は疲れてしまったためやんわり断るとアリシアはしょぼーん。
ま、負けるな俺。俺にも限界があるんだ。休むべきなんだ。

「　　？」

『アリシア、私達が相手になりましょうか？』

「　　」

『うーん・・・シュテル達はちっちゃいから、遊べることも限られるしなぁ』

「　　！　　！」

『あの神ぃ！なぜ元の大きさに戻れるようにしなかったのだぁぁ！！』

王様ご乱心である。

結局、いつもよくやるかくれんぼをやることになった。
マテリアル３人を探すのが果てしなくめんどくさかった。

おふくろは仕事に行って、残る6人で夕食。

今日の夕飯はアリシアの大好きなハンバーグだ。
アリシアが満面の笑みでハンバーグを食べる姿がまあかわいい。

・・・む、ほっぺにソースがついてしまってるぞ。ベタだな。
俺が指で取って舐める。ベタな展開。
はにかむアリシア。うむかわいい。

マテリアルズは俺のを一部分けたのを食っている。
もう口中にソースが。特にレヴィのが酷い。ティッシュでちょっと強引に拭き取る。
むーむー騒ぐな。

「　　！
　　！」

『むーっ！なんでアリシアにはそんなに優しくて、僕にはこんなに乱暴なのさ！』

そこまで乱暴ではなかったと思うけど。

「　　！
！」

『もういい！キリはアリシアとずっといちゃついてればいいんだー！』

勝手にふてくされた。
なんでこうなったんだ？

周りはと言うと、プレシアはあらあらと微笑ましく見てるし、ロードはやれやれと呆れてるし、シュテルに至ってはもはやどうでもいいようで食事に専念してるし。

で、問題のアリシアは・・・？

「　　？」

『ふっふーん・・・？』

・・・なんか企んでるし。

ちょっ、いきなり抱きつくな。飯の途中だろ。

「
♪」

『じゃ、言われた通りキリヲお兄ちゃんとイチャイチャしてるねー♪』

はぁ！？

何考えてんのこの子は！？

「　　！？」

『ちょっ、なんでそうなるのさ！？』

「　　♪」

『勝手にイチャイチャしてればいいって言ったのはレヴィじゃん。だから、言われた通りキリヲお兄ちゃんにイチャイチャするもん♪』

アリシア、この歳で策士になっちまってるようである。

あーあ、シュテルとロードから睨まれてるよレヴィ。

「　　！！」

『だめーーーっ！！』

「　　！」

『あははっ！』

逃げるアリシア、追うレヴィ。呆れる俺を含めた残り４人。２人とも、今は飯の途中なんだから暴れんな。

騒がしいのは嫌いだが・・・まあ、こういうのならたまにはいいかもな・・・。

そう思いながら、俺はごはんを口の中に入れるのだった。

## ｅ２８．サイレンスＶＳチート、人気投票対決

朝、登校すると。

神崎拓也ＶＳ忌束キリヲ　人気投票対決！！

□　↑顔写真↓　□

神崎拓也　　忌束キリヲ

１年３組　　１年２組

６月１２日昼休み――個人アピール・応援スピーチタイム

６月１３日昼休み――投票

６月１４日昼休み――結果発表

昇降口の壁にこんな張り紙がされていた。

「　　！　　！！」

『忌束！昇降口の貼り紙は見ただろうなぁ！！』

昼休み。
神崎（バカ）がやってきた。

：ああ、見た
とりあえず俺には理解できない事態だということは理解した
あと面倒事は嫌いだ

「　　！
！！」

『最近また調子に乗り出したみたいなんでな！やはりお前には、しっかりとお灸を据えるべきだと思ったのだ！！』

聞いてよ。

『そうだそうだ！』『アリサのツンデレは俺のもの！』『なのはさんは俺の嫁！』『フェイト嬢ＬＯＶＥ！！』など馬鹿の取り巻きが

声を出している。
お前ら全員病院に送られろ。そしてもう退院するな。

「　　！
　　！！」

『ま、１２日のアピールの内容でも考えておくんだな！あと、なのは達聖祥５大美少女は応援スピーチには出られないことになっているから、彼女ら以外から誰か頼んでおくことだな！！』

聖祥５大美少女って何さ。

嵐のように現れて騒ぎ立てた神崎（バカ）は、嵐のように去っていった。

神崎が去っていったのを確認してから、なのはが筆談を持ちかけてきた。

‥なんか、大変なことになったね・・・大丈夫？

‥大丈夫じゃない。アイツの頭が

ホントなんなんだか。面倒だからアピールタイム含めて当日全部休むか？

そう思っていると、今度は別の人が入ってきた。爽やかな雰囲気の男子生徒だった。

‥君が、忌束キリヲ君で間違いないかな?

‥そうだけど

身長的に、2、3年生かな?感じからして、あんま危ないような奴ではないと思うけど・・・。

‥僕は加藤亮太。生徒会長をやってる
少し話をしたいんだけど、一緒に屋上に来てくれるかい?

‥わかった

俺はその生徒会長、加藤先輩についていった。

屋上についた。

加藤先輩の他に男女数人の生徒がいる。多分生徒会の人達だろう。
つか、なんで俺は生徒会の人に呼ばれたのか未だにわからない。

『さて』と加藤先輩が呟いて、筆談が開始された。

：君と神崎君とで、人気投票対決がされるのはもう知ってるよね

：ええ。めんどくさいのでその3日間は休もうかと

その3日間で、デバイス制作をどんどん進めようと思うんだ。

：実は、そのことでお願いがあるんだけど

：お願いですか？

：その対決、ぜひ君に勝ってほしいんだ！

・・・・・・はい？

え・・・えぇ？俺が？アイツに？勝つ？

・・・なんで？

：神崎君を指示する生徒はとても多い。けどそれと同じぐらいに、特に彼に対する苦情が相次いでてね・・・彼が統制するグループ、“チーム神崎”。あれには僕達生徒会や先生方も頭を悩ませているんだ

ああ、あの迷惑集団か。

男女問わずにかなりの人数がいるんだよな・・・数にして一学年分ぐらいいるんじゃないか？

まあ確かに、アイツらに引いているのがなのは達だけって話はないよな。惹かれている奴がいれば、引いてる奴がいるのも当然だ。

：で、今回の対決に勝って、神崎やそのグループを沈静化させろとあわよくばグループを解体まで追い詰めろと

：解体までは行かなくとも、早い話がそうなるね

：俺の彼女が、アイツらにしつこく言い寄られてるんだ！

：私なんて、酷い時には１０人近くの神崎組に言い寄られた！

：神崎はよくその中に割り込んで、自分をカッコつけようとする

これは酷い。

神崎よ、少し制御という言葉を知った方がいいぞ。ググれ。

で、こんな風に頼まれたら、断れないよなぁ・・・ああ、俺のデバイス。完成は程遠い・・・。

：まあ、善処しますけど勝ち目あるんですか？

グループに加えて、何割かが神崎に入るでしょうからこのままだと勝ち目はありませんよ

校内の世間体としては不良ってことになっちゃってるし、俺に支持率があるとは思えませんし

：大丈夫だよ、君は不良なんかじゃない
生徒会の子達から、友達が君に助けてもらったって話をよく耳にするよ

ああ、夢日記を使った未来潰しのことか・・・。

いやでも、それで入る票なんで1、2%程度・・・。

：それに、彼に勝つために12日の昼休みがあるんだから

ああ、なる。

・・・・・・ん?

：ひょっとしてこの対決って

：ああ、ルールは僕達生徒会で作らせてもらったよ

殴ってもいいかな?
本人の許可も得ずにやるのはどうかと思うな。

：我慢してくれ
公平な条件で君が勝てるようにするにはこれが最善だったんだ

：本人の許可も得ずに対決を許可することのどこが最善ですか
殴っていいっすか

：だめだよ

ですよねー。

：まず、応援スピーチは1人申し出てきた子がいてね。彼女に任せようと思うんだ

へえ、申し出てくれた人いたんだ。

俺の前に1人女子生徒が出てきた。
ん？どっかで見たような顔だな・・・。

その女子生徒はおずおずと上目遣いをしながら、まるで手紙でも渡すかのような感じで紙を差し出してきた。

：応援スピーチに出ることにしました、1年1組の尾崎優香です
忌束君、体育館倉庫では助けていただきありがとうございました！
おかげで、友達と仲直りもできました！

・・・？体育館倉庫・・・友達と仲直り・・・・・・？

・・・・・・ああ、あの時いじめられてた女の子か（ｅ６参照）。

：忌束君がとってもいい人だって皆さんにわかってもらえるように私、頑張ります！

：できれば俺が静寂に暮らせる程度に頼む

多分聞いてくれないな。
俺が勝つことを目的とした会議だし。

：そういう訳だ
あとは君のアピールなんだけど、何か思いついてるかい？
よかったら考えるのを手伝うけど

：いや、当日までになんとかしますよ

：そうか
それじゃ、頑張ってね

逃げるコマンドが消えてしまった俺であった。

・・・不幸だ。

そして１２日。
人気投票対決の初日である。
そして現在はすでに昼休み。場所は体育館のステージ裏。
よくもまあ、昼休みにこんな企画を実行できるもんだわ。先生もよく許可出したな。
「　　」
『おう忌束。逃げずに来たようだな』
ああ来たよ。生徒会（アイツら）のせいで。
まあ一応ちゃんと準備は整えているけどさ。
つかお前、アピールのためとは言えそんな派手な服で恥ずかしいとは思わないのか？
あと思ったけど、お前と腕組んでるいかにも高飛車なそこの女子。
誰だお前。つか、ホントに生徒？
‥神崎の応援をする３―１の伊集院遥香だ。神崎親衛女子隊の隊長もやっている・・・強敵だぞ
加藤先輩が教えてくれた。

神崎親衛女子隊って何さ。派生グループでもできてんの？

「

？

」

『拓也さんの素晴らしいところは全てピックアップ済みですの。その程度の庶民と組んだところで、サイレンスのあなたは私の演説にすら適わなくてよ？あら、聞こえないのでしたね。申し訳ありませんでしたわ』

まる聞こえだよ。アンタの口の動きを見れば。

あと、さっきから思ったんだけどさ尾崎さん。アイツに対抗しようと俺の腕に抱きつくのはやめてくれませんか。

：絶対に勝とうね、忌束君！

俺の気持ちを察してください。

最近の出来事と俺の気持ちを無視したこの展開で俺の精神がマッハ。

：始まるぞ

ん、始まるの？

というか、生徒会長である加藤先輩が司会をするんじゃないの？
じゃあ誰がやってるんだ？他の生徒会の奴か？

ちょっと見てみるか・・・ホント頼むから尾崎さん、離れて。動きづらい。

・・・チラッ。

「　　！
！！　　！！」

『――――始まりました！第１回聖祥中学人気投票・忌束キリヲＶＳ神崎拓也！！司会の１年３組の八神はやてでーすっ！！』

――お前かいいいいいっ！！！

：彼女は自ら申し出てきたんだ
ユーモアが溢れてなかなか見所があったから採用したんだよ

確かにそうだけどさ！！

「　　」

『どけ、最初は俺のアピールからだ』

神崎が肩を叩いてそう言ってきた。

確か、順番は神崎、俺、で、応援スピーチで伊集院、尾崎の順番だったか。

俺は道を開け、神崎を通してやった。

神崎のアピールは、ダンスだった。まあ、典型的っちゃあ典型的だが。

・・・さて、時間が来るまで待つか。

‥ところで、忌束君はどういうアピールをするつもりだい？

‥あ、それ私も聞きたいな

あれ、尾崎さんはともかく加藤先輩は知らないっけ?俺、生徒会に色々準備頼んだんだけど。

・・・ああ、そういや昨日、加藤先輩は休んでたからな・・・。

‥まあ、それは本番でのお楽しみってことで

敢えて隠す。ギリギリで見せた方が、カッコいいじゃん。

そんなこんなしているうちに、神崎のアピールが終わった。
アピールが終わった者は、ステージを降りてすぐの席に座ることになっている。神崎がステージから降りた。そして俺のアピールタイムに移る前の準備が始まる。

さ、俺も動きますか。

コートを脱ぎ、ブレザー、ワイシャツ、その下に着ている肌着も脱ぎ捨てる。

加藤先輩達は・・・ああ、驚いてる驚いてる。俺の上半身の傷痕を見て驚愕している。伊集院さんもそれは同じだった。

‥忌束君、これは一体

‥俺の過去も、この演技に使ってやるってことさ

正直あまりやりたくない。
でも、多く票を得るっていうのなら、これぐらいしか思いつかなくてな。

・・・というのが、何かの言い訳であることには気づいている。

本当は、これで自分の“何か”をわかってほしい。
その“何か”が、そしてわかってもらってからどうしてほしいのか

がわからないんだけどな。

・・・さて、道具を持って、行くか。

ステージへと歩を進める。
ステージは床も壁にもブルーシートが敷かれ、壁にはどでかい書道用の紙が掛けられている。

俺の手には、片手にはでかい筆を、もう片手には大量の墨汁が入ったバケツ。

ステージへと入り、中央で一礼。
全員の視線が俺の、ほぼ確実に上半身に刻まれた傷痕に集中している。

バケツを置き、筆をバケツの中に突っ込む。
さて、俺は特別書道に精通している訳じゃない。ただ適当に、やるならこれがいいかと思っただけだ。

十分に墨汁を染み渡らせた筆を持ち、紙の前に立つ。

――そして、筆を走らせた。

うまいとは大して言えない、言わば八つ当たりの殴り書きのような

感覚で、紙に巨大な字を刻んでいく。

書き出したら止まることはなく、全身全霊で筆を動かす。

古傷が痛んでも構わない。

そうして書き上げた、俺の全てを表す3文字。

――“理不尽”。

・・・だがまだだ。俺はこれで終わらねえっ・・・！

再びバケツに筆を突っ込む。

一度強く息を吐き、それから息を整える。

そして息を吸い込み、力を溜め込んでっ・・・！

理不尽の文字を、一閃するっ！！

横一文字に筆を振り、遠心力で飛んだ墨汁が理不尽の文字に、切り

裂くかのように張り付いた。
大量の墨汁が飛んだ分、壁や紙に張り付いた墨汁が下へと垂れていく。

バケツに筆を突っ込み、一息ついてから振り返って一礼。
ステージ裏の方から肌着とワイシャツを投げ入れてもらい、それを受け取ってステージを降りた。
神崎はステージから見て右側。俺は指定されていた神崎の逆側の椅子に座る。

生徒らは・・・呆気にとられている。
体質上何も聞こえないが見る限りではおそらく、誰も何も言ってない、まさに無音の状態だ。

やがて、先頭がざわめき始めた。
ざわめきはほどなくして拍手へと変わっていった。

・・・恥ずい・・・。

「　！　　！」

『さ！続いて応援スピーチタイムに移りまーす！』

はやての司会で、ようやく次へと進んでいく。

伊集院さんがステージ上に出てきて、マイクに向かってスピーチを始める。

俺はスピーチが始まる直前に彼女のスピーチ内容のコピーを受け取

ってはいるが、一応伊集院さんの方を向く。言うことが変わるのかもしれないし。

伊集院さんのスピーチは俺の手元にあるコピーと同じ内容だった。

神崎のいいところばっか言った長ったらしいスピーチ。時々読み取るのも面倒になって寝そうになった。

そんなスピーチも終わり、ついに尾崎さんのスピーチになる。

尾崎さんがステージ上に姿を現す。見るからに動きが固く、緊張しているのが丸わかりだ。

伊集院さんの時と同じく内容のコピーを渡されたが、もらってからそれを見向きもせずに尾崎さんの方を見守る。

スピーチが始まった。

「

」

『えっと・・・私は最初、忌束君のことを“サイレンス”という呼び名しか知りませんでした。サイレンスって名前なら、皆さんもご存知だと思います。時々見かけても最初の頃は怖い感じがして、はっきり言って苦手でもありました』

尾崎さんは静かに語る。

苦手意識・・・まあ当然だな。ありもしないことを神崎が言いふらしたとは言え、何があっても無言な奴とは一緒にいたくないと思うのが普通だ。

「

『そんな忌束君についての考えが変わったのは、今年の4月のことです。当時私は2人の男子生徒と、1人の友達にいじめられてました・・・そして体育館倉庫で、男子生徒にお金を出すように脅されていた時に、忌束君が突然私達のところに来て、男子2人をやっつけたんです。友達でもクラスメイトでもない、知り合ってもいない忌束君が助けてくれたんです。そして男子を追い払うと忌束君は紙に何かを書いて私の友達に渡してすぐに去ってしまいました。後から見せてもらったのですが、“謝って、話しておけ”・・・そう書かれていました。友達は私に謝ってくれて、今では仲直りしています。本当に忌束君は、私にとっての恩人です』

」

尾崎さんはそこまで言って、後ろを見た。

ステージの壁には今も一閃された“理不尽”の姿がある。

『忌束君はこのアピールの直前に、自分の過去もつかったアピールだって教えてくれました。忌束君の過去は知らないのですが、壮絶な過去があったんだということがこれと、忌束君の身体の傷痕から見て取れます。自分の過去を使った、強い強いアピールだと感じま

す』

ここまできて、尾崎さんの口がピタリと止まった。

何度か事前に言う内容を書いたのであろう紙を取り出して見たり、深呼吸したりを繰り返している・・・どうしたんだ？

そして次の瞬間、意を決したかのように尾崎さんが再び口を開いた。

『忌束君は強いです。優しいし、色んな人達を助けてくれています！理不尽を正してくれています！彼は不良なんかじゃありません！例え全校の生徒達が不良だと言っても、私にとっての忌束君は、ヒーローですっ！！私は、忌束君・・・いや、キリヲ君のことが――――大好きですっっ！！！』

尾崎さんの告白。

急激に盛り上がる生徒達、先生方。

えっと、よくわからないけど、自分の心境だけはよくわかった。

恥ずかしいぃーー！！

恥ずい！これは恥ずい！！

なぜ？なんでこのタイミングで告白！？なんでこんな場所で告白！？というか、なんでみんなの前で告白してるのさぁぁぁ！？
ヤバい、これは悶え死ぬ！聞いてるこっちが悶え死ぬ！！

ぐあああああっ！！やめろお前らぁぁぁっ！そんな目で見ないで！お願いだから見ないで！！
尾崎さんは！？

・・・完全に顔真っ赤にして硬直してるしよぉぉぉぉ！！

てめっ、散々俺を引っ掻き回してフリーズってどういうことだぁぁぁ！！

・・・あ、もうだめぽ。

俺は顔を突っ伏した。
体育館中が、尾崎さんの告白で熱狂状態になっている。

俺の静寂な日常・・・。

儚く散る・・・。

# e28．サイレンスVSチート、人気投票対決（後書き）

最近、自分の書いてることが支離滅裂で世紀末な状態になっている気がする。え?今更?ですよねー。

批評で学ぶべきところを全然生かせずに人気投票対決なんてもんを書いてしまった。まあ、批評が来る前にできあがっちゃったものだってこともあるんだけどさ。

というか、こんな先が見えるような展開とかじゃなくてさ、ちゃんと友情的展開でも書けよって話ですよね。もうこんなテンプレなの展開が丸見えでしょ?

こんなんだから批評がくるんだよ。学習しろよ俺。

・・・とまぁ、ネガ思考になってくる僕でした。

今更ながら、転生者多数になんてしなけりゃよかったと後悔してます。

でもそれだと、カニバルを複数出すのが難しいしなぁ・・・そういや第一、なんで敵がカニバルばっかなんだよ。確かに俺が原作を知ってるものが少なくて、エニグマが好きだからっていう自覚はあるんだけどさ。

・・・だめだ。なんかネガ思考が止まんない。

というかこれ、後書きに書くべきことじゃなくね?

## ｅ２９．投票対決の結果

投票日は全力で休みました。

１４日。

今日も全力で休みたかったのだが、おそらくレヴィ辺りから事情を知ったおふくろに叩き起こされ、仕方なく登校。とりあえずレヴィには指で頭グリグリの刑をした。

廊下や教室での俺に対する視線が以前とすげー変わってる。特に女子。俗に言う黄色い視線的なものがこっちにくる。やめてくれ。こっぱずかしいから。

そして昼休み。結果発表である。

場所は体育館ステージ。そこに俺と神崎、そしてそれぞれのサイドに尾崎さんと伊集院さんがいる。・・・尾崎さんとはほとんど目を合わせていない。ついさっき一瞬目が合ってしまったのだが、その瞬間に尾崎さんがオーバーヒート。こんなことになるなら言うなよ・・・。あ、それと俺にだけ加藤先輩もついている。

司会のはやてが進めているが、生徒側の方を向く分俺に対して後ろ向きなため読唇術が使えない。そのため会長からはやてが話す内容が書かれた紙を手渡されたが、はやては確実にアドリブを入れると確信しているため見ていない。一番肝心な結果は別紙で加藤先輩が持ってるし。

ステージの壁がスクリーンとして映像が映し出される。映し出された映像、というか画像は神崎と俺で別れていて、それぞれに１年生、２年生、３年生、合計と書かれた枠がある。

さて、ルールを確認しよう。
投票者は俺と神崎、それぞれの応援スピーチに出た人を除く生徒全員。男女問わずだ。
確か一学年分の人数が１クラス３０人×６で約１８０人。三学年揃って５４０人ぐらいか。
合計での投票数が多い方の勝ち。
ちなみに投票用紙にはその人を選んだ理由、逆に選ばなかった理由も書いてあり、学年ごとに発表していくとか・・・どんな鬼畜仕様なんだこれは・・・。

まあ、ざっと説明すればこんなもんである。

そうこうしているうちに、１年生の枠の中で数字がこう、発表前によくあるような高速で動いたりしている。
そして、１年生の結果が表示された。

神崎拓也　　忌束キリヲ
１０８　　６９

表示された瞬間に神崎が立ち上がってガッツポーズをしていた。そんなに嬉しいのか。どっちかっつーと、お前の言う不良に６９票も入れられていることに驚くべきじゃないか？

ん、加藤先輩から1年生分の資料が手渡された。

えっと・・・？神崎に投票した理由は『チーム神崎のリーダーだから』『気軽に声をかけやすい』『親しみやすい』ｅｔｃ・・・。

逆に、神崎に投票しなかった奴の声は・・・『軽々し過ぎる』『はっきり言ってセクハラ』『自分をカッコよく見せようとしすぎてる』ｅｔｃ・・・まあ、尤もな意見だな。

で、俺に票を入れた理由は・・・『アピールタイムでの主張力に感動した』『２人の仲を応援したい』『ワルっぽいところがイカす』ｅｔｃ・・・。

逆には、『無口すぎて怖い』『話しづらい』『元から嫌い』ｅｔｃ・・・まあ、これも尤もだと言えば尤もか。

だが、票を入れた奴の２番目。そんな仲じゃねぇから。尾崎さんが勝手に口走りやがっただけだから。

表を見ている間に、２年生の票が表示された。ギリギリで加藤先輩のおかげで気づいた。

神崎拓也　　忌束キリヲ

８４　　９６

おい、勝ってんぞ、俺。

神崎、お前以上に取ってるぞ俺。

「　　！？」

『なっ、なにぃぃぃぃっ！？』

神崎(バカ)が叫んでいるが無視。
えっと・・・資料資料・・・。
神崎に入れた奴は・・・ああ、チーム神崎の奴らが半分ぐらいか。
だいたい意見は1年とダブってるのが多いな。あと批評に『彼女に手を出そうとしていた』とかそんなん。

で、俺は・・・？・・・『古傷がカッコいい』『上半身裸に男気を感じる』『魔王と戦う（厨二設定省略）な勇者みたい』（3つとも男子の意見から抜粋）その他外見のビジュアル意見多数・・・厨二野郎共がっ！！
んだよこれ、ルックスなんて言われても全然嬉しかねーよ。魔王と激戦をしていたような跡とかさ、現実と二次元を混ぜないでくれよ。

いかん・・・このままじゃあ負ける・・・そもそも3年生の場合だとコミュニケーション力が問われるだろ。俺加藤先輩達生徒会を除いたら3年と関わってすらいないよ・・・。

まあ、とりあえず結果は見ておくか・・・。

神崎拓也　　忌束キリヲ
13　　166

・・・・・・・・・・。
・・・・・・。
・・・。

・・・・・・えええええええええ！？

ちょっ、まっ、負けるどころか、圧倒的に勝ってるんですけどぉぉぉぉ！？

えっ？どういうこと！？資料見せろ！

・・・『アピールでの主張力が神がかっている』『アピールタイムに忌束君の思いが感じられた』『人を現すのに文字数や時間なんて関係ないことを思い知らされた』『アピールタイムで自分の目が覚めた』ｅｔｃ・・・。

加藤先輩自作の割合円グラフでは、アピールタイムでの主張性が約７５％、応援スピーチタイムで動かされたが約２０％、それ以前から俺が好きもしくは神崎が嫌い約５％・・・。

・・・やりすぎたぁぁぁぁ！？

やばい・・・別の意味でいかんことになってきた・・・。

神崎はこの結果を見て立ち竦んでいる・・・まずは座ってくれ。そして互いに、どの辺で俺達が間違ってしまったのか話し合おう。

俺だって、ここまでくるとは思わなかったんだよ！ここまでやりすぎる気なんてなかったよ！！

詰んだ・・・完璧なまでに俺の静寂な生活に終止符が打たれた・・・・・。

明日から・・・・・・大丈夫なのか・・・・・・。

翌日。

現在、通学路を歩いているんだが・・・なんだ、結構普通だな。

まったく、何か変わるのかと身構えていたのが馬鹿らしくなってきたぜ・・・でもこれからまた静寂に暮らせるんなら、その結果だけでも十分・・・・・・ゴフゥッ。

タックルされた。誰だ。じゃじゃ馬嬢のアリサか？ボケ狙いのつもりのはやてか？

「　　♪」

『おはよ、キリヲ君♪』

尾崎さんでした。なぜ。

尾崎さんはメモ帳を取り出してなにやら書き始めた。

：通学路の途中でキリヲ君の姿が見えたの。同じ道だったんだね

：そうなのか。そういや尾崎さん

：優香ね

：いや、尾崎さんの名前なら知ってるが

‥優香って呼んで！

そういうことか。

‥じゃあ優香、１２日のあれって本気なのか？

‥うん、だって、私のヒーローなんだもん

そう書く尾崎・・・じゃなくて優香の顔は少し赤く染まっていた。
マジか。

‥私は、キリヲ君のことが大好き。だから、これからよろしくね

‥まあ、気持ちは知った

応えるかどうかは別だが。

‥じゃ、一緒に行こう？

そう書いて、俺の腕に抱きついてきた。よりにもよって俺の右腕にである。
優香、そんなことされたら俺の会話能力が著しく低下するんだが・・・ゴフゥッ（２回目）。

誰だ。今度は。

「　　？　　？」

『キーリーヲーくーん？何をしてるのかなー？』

すずかだった。素晴らしい笑顔を向けてくる彼女にカニバル以上の身の危険を感じるのはきっと気のせいじゃない。

「　　♪」

『私、今日からキリヲ君の彼女になったの。だからこうするのも当然だよ♪』

気持ちを知ったと申しただけなんだが。

「　　！」

『むっ・・・私だって、キリヲ君のことが好きだよ！』

遂に言いやがった。

ねぇ、お願いだから周りを見て・・・俺、恥ずかしさで死んじゃうから・・・。

「　　♪」

『甘い甘い♪私は好き程度じゃなくって、大好きって告白したんだから♪』

「　　！！」

『むーーっ！！』

二次創作を読む人は一度は憧れる、ハーレムという立場。
だが現実はこれだ。

いがみ合う女子。周囲からの嫉妬や敵意の視線。そしてさり気に奪われる自由。胃に穴が開きそうでとか、そんな次元じゃない。

い、胃が・・・胃が消えるっ・・・！！

静寂以前に・・・無事にいられる・・・のか・・・？

## e29．投票対決の結果（後書き）

キリヲ、神崎に勝つの回でした。

ご都合主義感が否めないことについては、うん、スルーの方向で。

そもそも、この人気投票対決ですらやったことに対して後悔してるので。

## e30．人気者とか席替えとか再び翠屋とか

教室に着くと、早速加藤先輩に会った。チーム神崎について報告したかったそうだ。

チーム神崎はあの対決でかなりの影響を受けたらしい。具体的な例を上げれば大人数のチーム脱退。特に女子。完全に野郎チームになってしまった訳だ。それでも随分いるが。

：彼らも、これから少しは大人しくなってくれると思う。ありがとう

：その代償として俺の命がマッハなんですが

俺の教室にまでついてきたすずかと優香（未だにいがみ合っている）。神崎組の野郎達から伝わってくる殺気。なんか教室の外にいる女子からの黄色い視線。

今更なんだが、本当に休めばよかった。

ここまで変わられちゃあ誰でもそう思う。俺は静寂に暮らしたいのに・・・。

一体俺はどこで間違えた？

：でもあまりの反響に君のファンクラブができたのは想定外だったな・・・また忙しくなりそうだ。

ちょっと待て。
今とんでもない一文を見た気がしたぞ。

：ファンクラブってなんすか

：理不尽（スラッシュ）＼隊って名前の、君のファンクラブだよ。昨日からすでにメンバーが集まりだしている。クラブの名前はこうだけど、普通のファンクラブとやってることは同じだよ

ネーミングセンスはこの際どうでもいいとして、なぜにこうなった。
理不尽＼・・・やっぱあれか。アピールタイムのあれがいけなかったのか。

こんなところに留まっていたら、俺の精神が底尽きるのは明白。

：俺、転校したら彼女つくるんだ

：それは転校不可能だと言ってるようなものだよ

オワタ。

その後加藤先輩やすずか、優香は自分の教室のところに戻っていき、やっと落ち着けるようになった。

：人気者ね、アンタ

：羨ましいならこんな称号くれてやる

：別にいらない

アリサに話しかけられたので返事と同時に助けを求めたが、見事に切られた。
というかアリサ、今日はなんだか機嫌が悪くないか？

：アリサ、今日何かあったのか？

：別に。アンタはいいわよね、美少女に抱きつかれながら登校できて

：先程までの光景を思い出してから、自分の言ったことのどこが間違ってるかを確認しようか

どこがいいんだよ、あんな状況。
ドロドロな取り合いに嫉妬と殺気。俺の精神が保たんわ。
アリサは（多分）鼻を鳴らした後、そっぽを向いた。何なんだこれ。

‥でもすごかったよね、あのアピール
私も思わず息を飲んじゃったもん

なのはは俺の間違いをすごかったの一言で終わらせてやがる。

‥光栄だが今の俺にとって嬉しくない評価をどうも
くそ、どの辺で主張性を上げすぎたんだ、あれ

‥元からすごかったと思うよ
それを押したのがあの古傷かな。あれ、本当に本物なの？

偽物の傷からどうやって出血する。
かなり動いた分結構痛かったんだぞ、あれ。

‥でも、これで拓也君のあのグループが落ち着いてくれるんだよね？

‥大した変わりないグループが結成されたらしいがな
というか今回、徹底的に俺が生贄にされただけな気がする

‥諦めなければ、きっといいことがあるよ！

もはやいいことの基準がわからないんだが。

ＬＨＲとは。

Ｌ・・・レモンの輪切りをしてて、
Ｈ・・・人差し指切っちゃって、
Ｒ・・・流血！

の、略である。嘘である。銀〇先生のネタである。正確にはロングホームルームの略である。週に１回行われているのである。

そして現在、そのＬＨＲの時間なのである。

「　　」

『今回のＬＨＲは席替えにすんぞー』

「　　」

やる気のない我らが担任の一言に活気と、期待の声があちこちから出てくる。俺には聞こえないけど。

俺の場合・・・席はどこでもいいや。原作キャラが近くにいなければ。願わくはなのはやアリサは極力避けたい。真横に来られた場合には俺の静寂が砕ける。

夢日記が発動する度にガッだぜ？よく今まで保った俺。いい席に当たっていいんだよ。

「　　」

『忌束ー、引けー』

おっと、くじを引く順番が来たようだ。

・・・燃えろ！俺の何か！！

なーーーーー、

‥ぜーーーーー

‥何なのかわからないよ

何かあったの？大丈夫？

大丈夫じゃねっす。まだマシな方だけど。

フェイトとお隣さんになりました。

フェイト、今もう執務官やってんのか？もし観察眼スキルがあるとしたらなのはよりもタチが悪い。

俺の席は窓側から数えて２列目の最後尾。右隣にフェイト。

アリサは廊下側の前から２番目。かなり距離を離すことに成功した。

なのははフェイトとアリサの中間ぐらい。２人が突っかかってくることはないだろう。

まあ、フェイトは字が綺麗だし、これから筆談をしていきたいという願望はあったりしたしバレさえしなければ問題ないか。

「

」

『そんじゃあ、今日のＬＨＲは終わりっつーことで。騒がしくすんなよー』

どんだけやる気のない教師なんだアンタ。

・・・ぬ、眠気。これは・・・ちょうどいいや・・・・・・ＺＺＺ。

―ｓｉｄｅ・フェイト―

席替えが済んでからほどなくして、もうキリヲは寝ちゃった・・・。

ＬＨＲは終わりになったけど、起こした方がいいかな？

なのははよくすずかの教え通りに辞典で叩いていたけど、さすがにあれはちょっと・・・あの鈍い痛そうな音を聞く度に大丈夫か心配になったし。

揺すってみる。キリヲ、起きて・・・。

・・・だめ、起きそうにない・・・どうすればいいのかな。できるだけ痛い思いはさせたくないし・・・・・・？

・・・キリヲの左手・・・動いてる？

うーん・・・うつぶせに寝ているキリヲの体が邪魔でよく見えない・・・でも寝てるのに左手が動くって変だよね・・・やっぱ起きてるのかな？

あ、左手止まった・・・。

・・・・・・・・・。

あ、起きた。眠そうにしてるけど、やっぱり寝ていたのかな。
そしてキリヲは机の左側に置かれていた・・・日記？それを手にとってジッと見ていた。
・・・程なくして閉じた。

うーん、何なんだろう？もし今度同じことがあったら聞こうかな？

―ｓｉｄｅ・ｏｕｔ―

さて、帰りのホームルームも終わり、後は帰るだけだ。
すでに帰る準備は済んでいる。

嫌な予感がするのでダッシュで帰る！

「　　！！」

『キリヲくーん！！』

待ち伏せタックルっ！？

教室に出てすぐに、待ち伏せていた優香に抱きつかれた俺であった。

：一緒に帰ろ！

：わかったから抱きつくな

周囲の視線がつらい

：やだよ

キリヲ君に抱きついていたいもん

なぜこうなった。

：それと、翠屋って言う喫茶店があるんだけど、そこに寄らない？

あそこのケーキすごくおいしいよ！

：誘い文句がアリサとほぼ同じ件について

アイツも誘い文句にケーキという単語を使ってた気がする。

・・・ん？空気が変わった。

：キリヲ君、アリサちゃんもオトしてるんだ

：何のことだ

いつの間にか瞳が単色化している優香に冷や汗。

まず俺は誰をオトした覚えもない。

：せっかく理不尽＼隊の女子隊長がいるのに、キリヲ君はずるいよ

ちょっと待て。

今とんでもない一文を（ｒｙ。

：優香が隊長だと？

：うん

なんてこった。敵は近くに潜んでいたとは。

：男子隊長は勿論キリヲ君ね

：まずその集団に入ることすら言ってないのだが

：いいの！

俺がよくないん・・・ゴフゥ。

いい加減にしてくれ。今日だけで４回目になるぞ、タックルされるの。

てか、またすずかか。

：キリヲ君、翠屋行こう！

アンタもそれか。

それからすずかと優香で口喧嘩が勃発。内容はどちらが俺を翠屋に連れて行くかとか、どちらがキリヲの隣に相応しいかとか。

リア充展開のつらさとか以前の話をしよう。周りを考えろお前ら。

というかさ。

：俺に拒否権は

「「　　！」」

『『ない！』』

疑問に思うんだ。

こういう時の女子って、ヤケに強いってことが。

結局流され2人に連れられ、気がつけば翠屋の前。
最近は極力避けるようにしていたこの店。懐かしく感じなくもない。
ええい、今回は何事もなく済みますように・・・！

扉を開け、入店する。

「　　！　　！」

『いらっしゃいませ・・・あ、すずかちゃん！キリヲ君も！』

出迎えたのは美由紀さん。まあこれはいいとして、客の中には・・・。

「　　」

『あ、すずかさん。久し振り～』

・・・げっ、あの緑髪の女と黒髪の男は！！

「　　！　　！」

『あ、リンディさん！クロノ君も！』

やっぱりだぁぁぁ！！

く、くそ・・・何なんだこのエンカウント率は・・・テメッ、神！
俺なんかしたのか！？

しかも美由紀さんとすずかの先導で2人と近い席に着いてしまった。
とりあえずいつものを頼んで、さっさと食って素早く脱出するが吉
と見た。

・・・ん？なんだすずか。

：紹介するね
リンディさんとクロノ君
フェイトちゃんの家族だよ

キリヲは逃げ場を失った。

もう、なるようになれ・・・。

：忌束キリヲです
ちょっとした事情で音が聞こえませんが読唇術があるのであしからず

：リンディ・ハラオウンです
あなたのこと、フェイトから結構聞いてますよ

：クロノ・ハラオウンだ

優香は普通に自己紹介をした後、すずか、リンディと談笑し始める。

あとクロノ。いつも無限書庫に地獄の資料請求ありがとね。おかげで俺まで駆り出されてストレスもマッハだよ。

‥クロノ、お前を見ていたらなんだかムカついてきた。1回投げさせろ

「　　!?
　!!」

『なんでそうなる!?というか、答えも聞かずに掴みかかろうとするな!!』

許可があればいいのか?

あ、ちょっ、リンディさん、それ俺が頼んだシュークリーム!勝手に食べないで!てか、優香とすずかも何勝手に食ってんの!?

そしてクロノ、テメーは逃げてんじゃねー!!

数分後

クロノと2人揃って士郎さんに怒られました。

店で暴れられたら困るのは当然なので、反論はできない。

：元気なのはいいけど、暴れたらだめだぞ。わかったね

：すいません

素直に謝り、解放された後席に戻る。

・・・シュークリーム・・・なくなってやがる・・・。

シュークリームを再度注文してから座る。

：ごめんねキリヲ君
怒ってない？

：すずか、謝ってくれるのはいいが謝罪の順番がおかしい
一番食ってたリンディさんが一番に謝罪すべきだと思う

：気にしたら負けよ？

アンタホントに大人なのか。

：ところで、キリヲさんは甘いものが好きだって話を聞きましたけど、どのくらい？

：味覚が変にならない程度です

確か俗称で“リンディ茶”とか呼ばれる甘ったるいお茶があったはず。そんなもん飲めるほど甘党ではない。というか、甘党ですらない。ちょっと甘いものが好きなだけだ。

‥そう

あなたと共感できないか、ちょっと期待してたんだけど

‥音がない俺にとって、味覚は1つの大事な自由なんで

飲まそうと思ってたんか。

動きの自由も限られている中、俺に残された自由と言えば視覚と味覚ぐらいである。それを失われたら堪ったもんじゃない。

てかクロノ。お前はさっきから何考えている。

「

」

『忌束キリヲ・・・・・・おかしいな、本局のどこかで聞いた気がする・・・』

ギクッ

・・・・・・ユーノくーん?誰にも言わないようにって言ったよねー?他の司書達もー・・・。

どうしてクロノの耳に入ってるんだーい？

本人は小さな呟きだと思うが、こっちには丸聞こえである。

・・・って、ちょっ！

：優香、何また俺のシュークリーム勝手に食ってんだ

：ごめんね♪

無邪気そうに笑って、かわいらしさで誤魔化そうという算段のようだがな、さすがに限界というものがあるのだよ人には。

：勝手に食う罰だ
あのデラックスケーキを奢れ

：ちょっと、対価で抑えて！

お前が悪い。

・・・と言いたいが、まあ冗談だ。さすがにそこまで俺は酷い奴じゃない。

：冗談だ

‥そう?よかった

‥女の子にそんな脅しつけるものじゃないですよ

‥アンタは謝れよ

どんだけフリーダムなんだリンディさんは。

・・・おっと、もうこんな時間か。

‥ではそろそろお暇するか
俺が頼んだシュークリームの分は置いておくから

‥うん、またね

おうすずか。
次からはもうちょっと抑えるようにしてくれよ。俺の身体が保たんから。

最後にお土産としてシュークリーム12個入りの箱を買って翠屋を後にした。

シュークリームは晩御飯の後、家族7人揃っておいしくいただいた。

## ｅ３０．人気者とか席替えとか再び翠屋とか（後書き）

最近よくある無茶苦茶な話。

話は変わりますが、皆さんはなのぽＧＯＤやりました？

僕はまだです。ソフトはあるんですけど、本体をちょっと貸しという出張に出していまして。

なんでそんなことをしたかって？

まあ、ここだけの話、高校の成績が滅茶苦茶落ちこぼれていましてですね、それで、まあ、ゲーム禁止を受ける可能性があったんですよ。というか、親から禁止受けてますけど。

そこで、没収される前に友人の手元に避難させた、ということなんです。

まあ、僕が悪いんですけどね。

もうすぐ返してもらう予定なんで、それからなのぽやります。すっげー楽しみです。

とにかく楽しみたい。

さて、話は戻ってこれからのことを少しだけ。ネタバレになりすぎない程度に。

次回から、こんなグダグダ感を捨て去ってシリアスに突入します。

シリアスです。そして鬱です。

鬱話って、書き応えはあるんですけど、書くのがなかなかにつらいです・・・おかげで執筆の手が進みません・・・。

大丈夫かなぁ・・・・・・・・・・俺・・・・・・。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8976y/

魔法少女リリカルなのは―ドクロを持つ転生者―

2011年12月28日07時07分発行